

福島第一原子力発電所
特定原子力施設への指定に際し
東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対
して求める措置を講ずべき事項について等へ
の適合性について
(滞留水一時貯留設備の設置)

令和6年1月
東京電力ホールディングス株式会社

本資料においては、福島第一原子力発電所の滞留水一時貯留設備の設置に関連する「特定原子力施設への指定に際し東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対して求める措置を講ずべき事項について」（平成24年11月7日原子力規制委員会決定。以下「措置を講ずべき事項」という。）等への適合方針を説明する。

目 次

1 章 全体工程及びリスク評価について措置を講ずべき事項	
1.1 特定原子力施設における主なリスクと今後のリスク低減 対策への適合性	1.1-1
2 章 設計, 設備について措置を講ずべき事項	
2.8 放射性固体廃棄物の処理・保管・管理への適合性	2.8-1
2.9 放射性液体廃棄物の処理・保管・管理への適合性	2.9-1
2.10 放射性気体廃棄物の処理・管理への適合性	2.10-1
2.11 放射性物質の放出抑制等による敷地周辺の放射線防護等 への適合性	2.11-1
2.12 作業員の被ばく線量の管理等への適合性	2.12-1
2.13 緊急時対策への適合性	2.13-1
2.14 設計上の考慮	
2.14.1 準拠規格及び基準への適合性	2.14.1-1
2.14.2 自然現象に対する設計上の考慮への適合性	2.14.2-1
2.14.3 外部人為事象に対する設計上の考慮への適合性	2.14.3-1
2.14.4 火災に対する設計上の考慮への適合性	2.14.4-1
2.14.5 環境条件に対する設計上の考慮への適合性	2.14.5-1
2.14.7 運転員操作に対する設計上の考慮への適合性	2.14.7-1
2.14.8 信頼性に対する設計上の考慮への適合性	2.14.8-1
2.14.9 検査可能性に対する設計上の考慮への適合性	2.14.9-1
3 章 特定原子力施設の保安	
3.1 特定原子力施設の保安のために措置を講ずべき事項 への適合性	3.1-1

4 章 実施計画に係る検査の受検

4.1 実施計画に係る検査の受検への適合性	4.1-1
-----------------------------	-------

1 章 全体工程及びリスク評価について 措置を講ずべき事項

1.1 特定原子力施設における主なリスクと 今後のリスク低減対策への適合性

特定原子力施設への指定に際し東京電力株式会社福島第一原子力発電所に対して求める措置を講ずべき事項について（平成 24 年 11 月 7 日原子力規制委員会決定）

（以下「措置を講ずべき事項」という。）

I. リスク評価について講ずべき措置

1号炉から4号炉については廃炉に向けたプロセス，燃料デブリの取出し・保管を含む廃止措置の完了までの全体工程，5号炉及び6号炉については冷温停止の維持・継続の全体工程をそれぞれ明確にし，各工程・段階の評価を実施し，特定原子力施設全体のリスク低減及び最適化を図ること，特定原子力施設全体及び各設備のリスク評価を行うに当たっては，敷地外への広域的な環境影響を含めた評価を行い，リスクの低減及び最適化が敷地内外の安全を図る上で十分なものであること。

1.1.1 措置を講ずべき事項への適合方針

1号炉から4号炉については廃炉に向けたプロセス，燃料デブリの取出し・保管を含む廃止措置の完了までの全体工程，5号炉及び6号炉については冷温停止の維持・継続の全体工程をそれぞれ明確にし，各工程・段階の評価を実施し，特定原子力施設全体のリスク低減及び最適化を図る。

特定原子力施設全体及び各設備のリスク評価を行うに当たっては，敷地外への広域的な環境影響を含めた評価を行い，リスクの低減及び最適化が敷地内外の安全を図る上で十分なものであるようにする。

1.1.2 対応方針

福島第一原子力発電所内に存在している様々なリスクに対し，最新の「東京電力福島第一原子力発電所 中期的リスクの低減目標マップ（以下「リスクマップ」という。）」に沿って，リスク低減対策に取り組んでいく。プラントの安定状態に向けた更なる取組，発電所全体の放射線量低減・汚染拡大防止に向けた取組，ならびに使用済燃料プールからの燃料取り出し等の各項目に対し，代表される様々なリスクが存在している。各項目に対するリスク低減のために実施を計画している対策については，リスク低減対策の適切性確認の視点を基本とした確認を行い，期待されるリスクの低減ならびに安全性，被ばく及び環境影響等の観点から，その有効性や実施の要否，時期等を十分に検討し，最適化を図るとともに，必要に応じて本実施計画に反映する。

当該実施計画の変更認可申請内容である滞留水一時貯留設備設置の設置目的については，別紙－1，プロセス主建屋・高温焼却炉建屋を用いた現状設備運用と滞留水一時貯留設備を用いた設備運用との比較などについては，別紙－2，滞留水一時貯留設備の設置によるリスク低減に関する既存設備との比較については，別紙－3，滞留水一時貯留設備の設置に伴う既設設備の改造箇所と改造に伴う影響については，別紙－4 参照。

東京電力福島第一原子力発電所の中期的リスクの低減目標マップ(固形状の放射性物質以外の主要な目標)

分野 (年度)	液状の放射性物質	使用済燃料	外部事象等への対応	廃炉作業を進める上で重要なもの
2023	1/3号機PCV水位計の設置・S/C水位を低下	2号機原子炉建屋 オペフロ遮へい・ダスト抑制	陸側遮水壁内のフェーシング範囲 50%へ拡大 【当面の雨水対策】	多核種除去設備等処理水の 海洋放出開始
	原子炉建屋内滞留水の半減・処理	キャスク仮保管設備の増設着手	格納容器内部の閉じ込め機能維持方針 策定(水素対策含む)	2号機燃料デブリ試験的取り出し ・格納容器内部調査・性状把握
	タンク内未処理水(Dエリア)の処理開始		日本海溝津波防潮堤(T.P.約13～16m)設置	
	高性能容器(HIC)内スラリー移替作業		1～3号機原子炉建屋の遠隔による健全 性確認手法の確立・建屋内調査開始	
2024	滞留水中のα核種除去開始	1号機原子炉建屋カバー設置	建物構築物の健全性評価手法の確立	2号機燃料デブリの「段階的な 取り出し規模の拡大」に対する安全対策
2025		6号機燃料取り出し完了/ 5号機燃料取り出し開始		1/2号機排気筒下部の高線量SGTS配管 等の撤去・周辺の汚染状況調査
今後の 更なる 目標	タンク内未処理水(H2エリア)の処理開始	乾式貯蔵キャスク増設エリア拡張	地下水対策 (建屋外壁の止水等)	燃料デブリ分析施設設置(分析第2棟)
2026 ～	プロセス主建屋等ドライアップ	1/2号機燃料取り出し		取り出した燃料デブリの安定な状態での保管
2034	地下貯水槽の撤去	全号機使用済燃料プール からの燃料取り出し		
	ドライアップ完了建屋の残存スラッジ等の処理			
	原子炉建屋内滞留水の全量処理			
	【実現すべき姿】 タンク残量を含む液状の放射性物質 の全量処理	【実現すべき姿】 全ての使用済燃料の乾式保管	【実現すべき姿】 建屋構築物等の劣化や損傷状況に応じ た対策を講じる	【実現すべき姿】 ・多核種除去設備等処理水の計画的 な海洋放出の実施 ・燃料デブリの安定な状態での保管

 周辺の地域や海域等への影響を特
に留意すべきリスクへの対策
 留意すべきであるが比較的外部へ
の影響が小さいリスクへの対策

※原子力規制委員会 東京電力福島第一原子力発電所の中期的リスクの低減目標マップ
(2023年3月版)より抜粋

滞留水一時貯留設備設置の設置目的について

1. 建屋内滞留水処理の現状

1－4号機の建屋内滞留水については、1～3号機原子炉建屋、プロセス主建屋(PMB)、高温焼却炉建屋(HTI)を除き、2020年内に床面露出状態までの水位低下を達成し、滞留水処理を完了している状況。これに引き続き、プロセス主建屋および高温焼却炉建屋の滞留水処理完了へ向けには、最地下階に高線量のゼオライト土嚢等が存在することを踏まえ、ゼオライト土嚢等に対する線量緩和対策（回収作業）を実施後に、床面露出状態までの滞留水の水位低下により処理を行う計画を進めている。

2. 滞留水一時貯留設備の設置目的

PMB/HTIは、震災当初より建屋内滞留水を敷地外に流出させない措置として、建屋地下で1-4号機の原子炉建屋(R/B)、タービン建屋(T/B)、放射性廃棄物処理建屋(Rw/B)等の各建屋の滞留水を集約・貯留しており、1－4号機建屋内滞留水の受入先、かつ処理装置（セシウム吸着装置【KURION】、第二セシウム吸着装置【SARRY】、第三セシウム吸着装置【SARRY II】）前段で建屋内滞留水を一時貯留する機能などをもたせている。

現状の設備構成では、PMB/HTIへ一旦、貯留する処理プロセスとなっており、1－4号機建屋で滞留水の発生が継続する限りは、床面露出を達成することは困難である。したがって、PMB/HTIの建屋内滞留水処理を実施し、床面露出するには、PMB/HTIでの1－4号機建屋滞留水の一時的貯留が不要なプロセスへの変更が必要である。また、前後段設備の運転に影響を与えず、日々発生する建屋内滞留水の処理を継続することも必要となる。

PMB/HTIの滞留水処理を実施し、床面露出するため、PMB/HTIに代わる一時貯留機能を有する設備として滞留水一時貯留設備をPMB/HTIの建屋内滞留水処理完了に向けて事前に設置する。

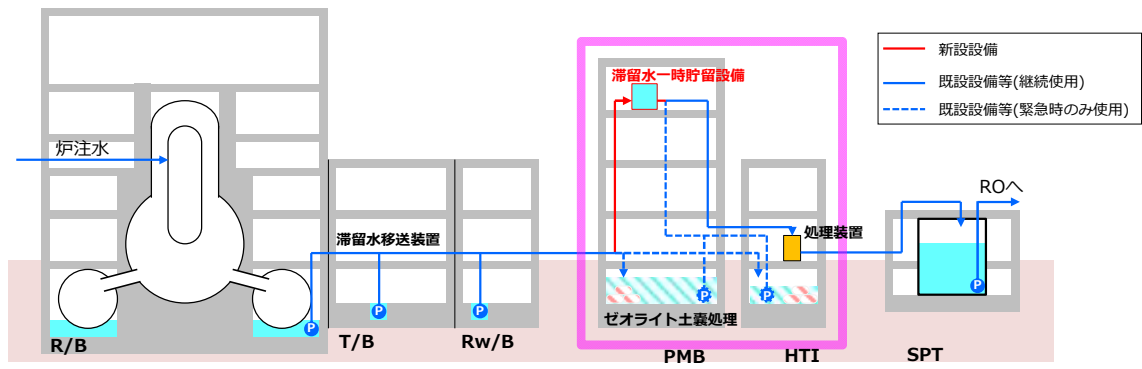


図 1.1.1-1 概略系統図

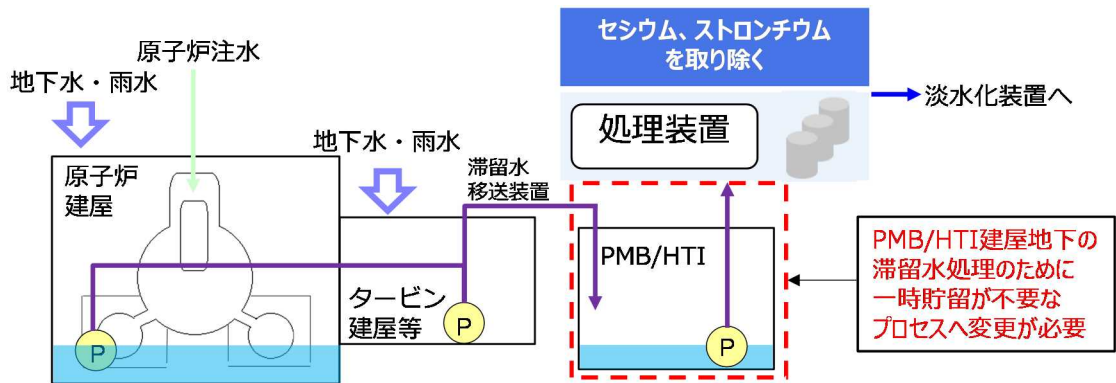


図 1.1.1-2 処理プロセス概要

3. 滞留水一時貯留設備のPMB 4階への設置理由

下記を踏まえて、滞留水一時貯留設備をPMB 4階に設置することを計画している

1. 高放射能濃度の建屋内滞留水を取り扱う設備であるため、系外への流出防止および台風、津波などの自然現象に対する考慮のために、建物内に設備設置が必要であること。
2. 既設系統構成を考慮すると、本設備は前段設備である1-4号機滞留水移送装置と後段設備である処理装置の間に設置する必要がある。前段設備である滞留水移送装置は1-4号機各建屋からPMBまたはHT Iへかけて設備が配置されていること、後段設備である処理装置は1-4号機南側の集中Rw建屋エリアに配置（KURION：焼却工作建屋，SARRY：HT I，SARRY II：サイトバンカ建屋）されていることから、33.5m盤エリア等の離れたエリアに配置するには、長距離の移送配管などが必要となり、これに伴う漏えいリスクが高まること、およびセシウム除去前の高線量の建屋内滞留水を敷地境界により近いエリアに移送することにより公衆被ばくの影響が大きいと想定されることなどから、8.5m盤エリアでの配置が合理的であること。
3. 8.5m盤エリアでの建物の新設には、既に当該エリアに空きスペースがない状況であることから既設構造物等の大規模な撤去による大量の廃棄物が発生し、保管エリアの確保が困難であること、および建物新設には干渉物撤去によるエリア確保を含めて長期間を要することが想定されることから、速やかな建屋内滞留水処理のために既設建屋内での配置が合理的であること。
4. 8.5m盤の既設建屋内の空きスペース等のうち、滞留水一時貯留設備を設置可能なエリアについて、設置エリアサイズが十分に確保可能なこと、設備の搬入が可能なこと、撤去が必要となる干渉物が少ないことなどの観点で調査し、若干の資材等の撤去により設備の配置スペースの確保が可能であること、既設クレーンを機器類の搬出入に活用可能であり、設置工事の実施に優位であることから、PMB 4階を設備設置場所に選定した。

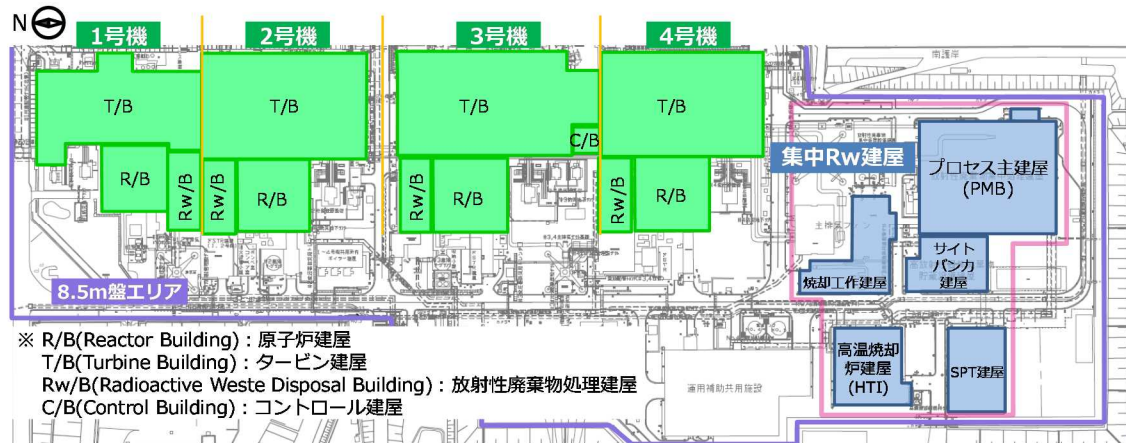


図 1.1.1-3 8.5m 盤エリアの建屋配置状況

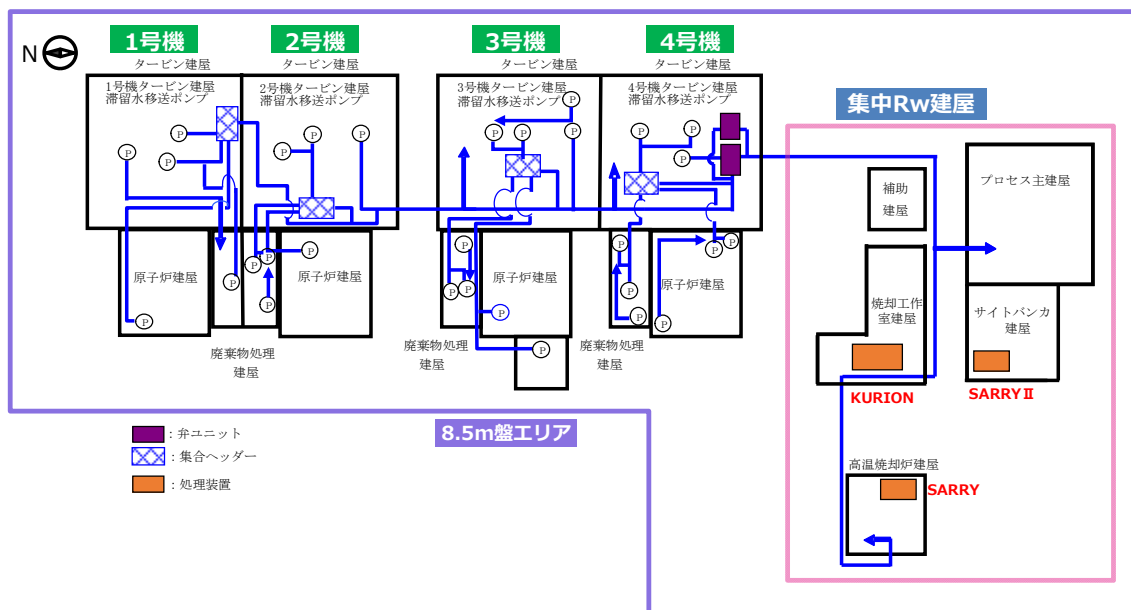


図 1.1.1-4 滞留水移送装置と処理装置の配置

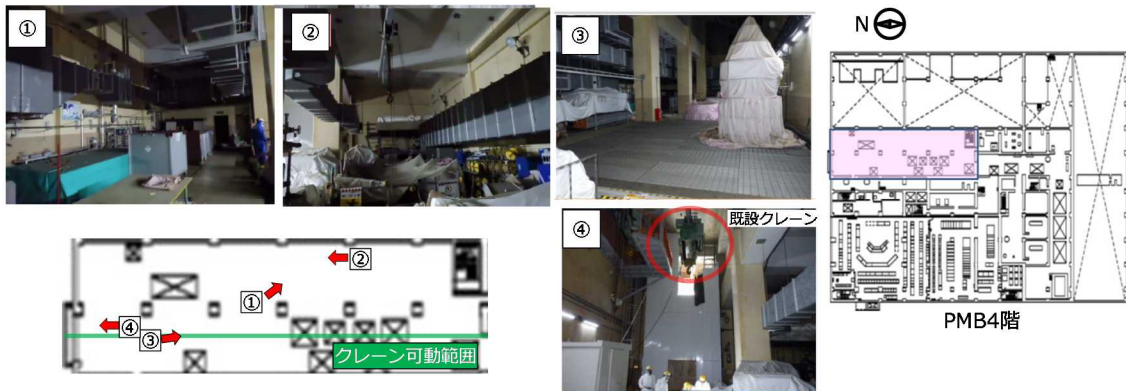


図 1.1.1-5 滞留水一時貯留設備設置候補エリアの状況

滞留水一時貯留設備の 8.5m 盤での配置候補案に関する検討について以下の通りに実施。

滞留水一時貯留設備の 8.5m 盤での配置としては、大きく分類すると下記の 2 つとなる。

- ① 既設建屋のスペース等の活用による最小限の一時貯留容量を確保した設備の設置
- ② 新設建屋を建設し、大容量の一時貯留容量を確保した設備の設置

それぞれの配置候補案に対して、リスク等の評価を実施した結果は以下の通り。

表 1.1.1-1 配置候補案のリスク等の評価結果

項目	①既設建屋の活用(現行案)	②新設建屋の建設
メリット	<ul style="list-style-type: none"> • 工事規模が比較的小さいことから早期に設備の設置が可能であり、2025年度頃から運用開始が可能な見込み。 • 最小限の一時貯留量となることから、汚染水処理プロセス内で保有する高濃度放射性物質の量が少なくなる。(数千m^3→約80m^3) 	<ul style="list-style-type: none"> • 大容量の一時貯留容量を確保可能。
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> • 一時貯留容量が小さいことで大雨時等の緊急時にはPMB等地下への滞留水受入の可能性あり。 	<ul style="list-style-type: none"> • 既設建物・機器等の撤去などのエリア確保に関する規模が大きく、撤去に伴い発生する廃棄物の保管場所の確保や耐震性の確保、線量低減、漏えい対策など建屋を含めた要求事項を成立させるための検討期間、新設建屋に係る地質調査、地盤改良など準備工事等を考慮すると、2030年度以降の運用開始となる見込み。

PMB/HTI の速やかな滞留水処理の実現および汚染水処理プロセス内で保有する高濃度放射性物質の量が低減することを踏まえて、既設建屋を活用して設備を配置することが合理的であると判断している。

既設集中 Rw 建屋の活用に関する検討について以下の通りに実施。

既設集中 Rw 建屋において、以下の観点を踏まえてフロア毎に活用可能な箇所の検討を実施。

- ・ 容器を現地製作するには、現場環境の制約【揚重装置,製作スペース(特に高さ方向の確保が困難)など】にて、製作可能な形状は下部が平底の容器のみとなり、平底容器では内部へのスラッジ対策をすることが困難となることから、完成品の容器を搬入し、設置することが必要。
- ・ 貯留容量を確保するには面積および高さ方向のスペースの確保が必要。また、搬出入に関しては容器高さに加え、揚重装置も考慮した高さ方向のスペースの確保が重要となる。既設建屋の上層階に設置するには、揚重装置（地上階から上層階への移動用、上層階における移動用）や搬入用開口が必要。

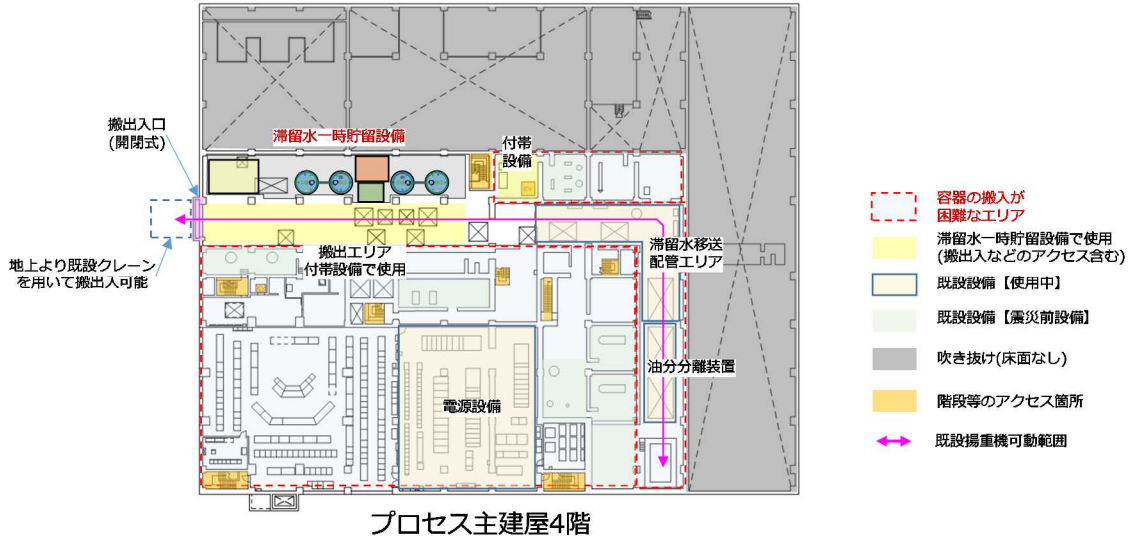
既設集中 Rw 建屋エリアの状況を踏まえて検討した結果、PMB 4 階が最適であると判断。既設集中 Rw 建屋エリアの活用に関しての整理結果は表 1.1.1-2 参照。

表 1.1.1-2 既設集中 Rw 建屋エリアの活用に関しての整理結果

No.	検討箇所	エリアの状況	評価	備考
1	PMB1階	既設設備【AREVAなど】およびPMB/HTIの床面露出に関連する設備【ゼオライト土壌処理設備、滞留水排水設備(今後設置)】等により、活用可能なエリアが極めて少ない状況	×	
2	PMB2,3階	当該フロアに容器を搬入することが困難。また、フロアの積載荷重上限が低く、容量の確保が困難。	×	容器の搬入には大型開口および揚重装置の新設が必要。エリア確保には震災前設置の機器の大規模撤去が必要。
3	PMB4階	北東エリアにて既設設備もなく、容器の搬入可能エリアを確保可能	○	汚染・漏えい拡大防止を踏まえた考慮についても対応可能。 最適と判断
4	HTI1階	既設設備【SARRYなど】およびPMB/HTIの床面露出に関連する設備等により、活用可能なエリアが極めて少ない状況	×	
5	HTI2階	当該フロアに容器を搬入することが困難。	×	上層階のためNo.2の備考と同様
6	サイトバンカ建屋1階	既設設備【貯蔵プール、機器搬出入エリア】等により、容器を搬入可能なエリアは少ない。	△	
7	サイトバンカ建屋2階	既設設備【貯蔵プール、SARRY II】等により、容器を搬入可能なエリアは少ない。	△	既設揚重装置により上層階でも搬入可能
8	焼却工作建屋1階	既設設備【KURIONなど】、震災前設備【焼却炉フィルタ】等により、容器を搬入可能なエリアは少ない。	△	
9	焼却工作建屋2,3階	容器を搬入することが困難	×	上層階のためNo.2の備考と同様

※ SPT 建屋は、SPT(サブプレッションプール水サージタンク)がフロアの大半を占めている建屋のため、活用不可と判断。

- プロセス主建屋4階には北東エリアには、既設揚重機を用いたエリアの活用が可能。
- その他エリアについては、既設設備が存在または揚重機による搬入が困難であり、追加のエリア確保が困難な状況。



- 既設設備【AREVAなど】およびPMB/HTIの床面露出に関連する設備【ゼオライト土壌処理設備、滞留水排水設備(今後設置)】等により、活用可能なエリアが極めて少ない状況。



- サイトバンカ建屋については、既設設備【貯蔵プール, SARRY II】等により、容器を搬入可能なエリアは少ない。
- 高温焼却炉建屋については既設設備【SARRYなど】およびPMB/HTIの床面露出に関連する設備等により、活用可能なエリアが極めて少ない状況。

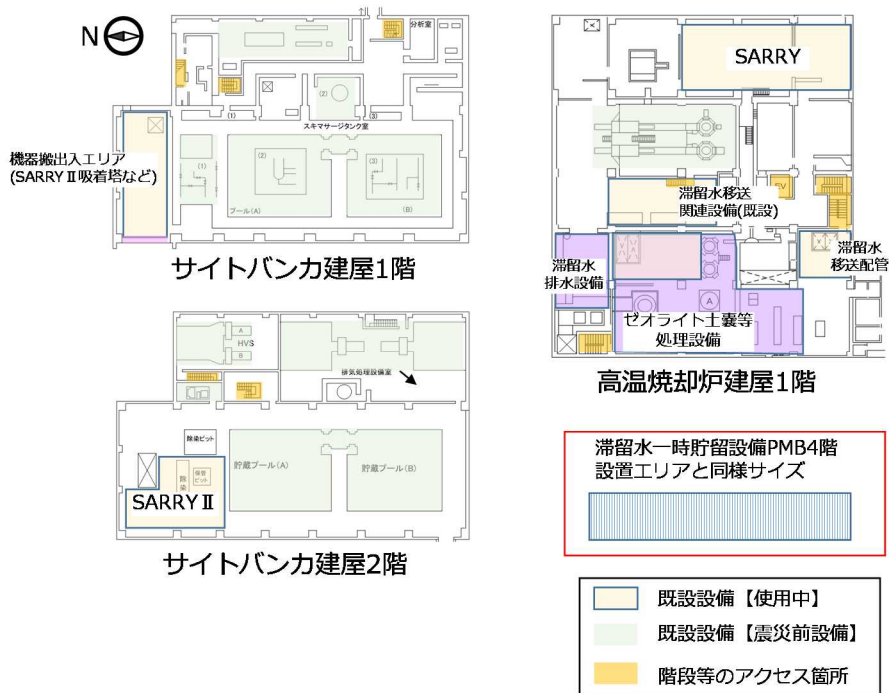


図 1.1.1-8 サイトバンカ建屋, 高温焼却炉建屋のエリア使用状況

なお、滞留水一時貯留設備の一部として、PMB2階に入口ヘッダスキッドを設置する計画である。入口ヘッダスキッドの設置箇所の選定理由については、前【PMB切替弁スキッド：PMB1階】・後【滞留水一時貯留設備の容器等の主要な機器：PMB4階】の取り合いを考慮し、配置エリアの確保が可能なこと、配管敷設ルートが合理的となること等の観点で、PMB1階～PMB4階で候補地を調査した結果、PMB2階にスペースを確保できることが確認できたため当該エリアとしている。なお、主要な機器と同様にPMB4階に設置しない理由については、設備運用に際して入口ヘッダスキッド内の手動弁の操作が発生することから、雰囲気線量の高くなることが想定されるPMB4階の容器近傍エリアを避けること等である。

プロセス主建屋・高温焼却炉建屋を用いた現状設備運用と滞留水一時貯留設備を用いた設備運用との比較などについて

現在、１－４号機各建屋で発生した建屋内滞留水は滞留水移送装置により、基本的にはプロセス主建屋（PMB）または高温焼却炉建屋（HTI）に集約・移送され、一時貯留した後に処理装置にてセシウムおよびストロンチウム除去を実施している。

PMB・HTIでは、①１－４号機各建屋から断続的に移送される滞留水を一時貯留する機能、②滞留水に含まれるスラッジ等を分離する機能、③１－４号機各建屋の異なる水質を均平化し、処理装置の安定運転を可能とする機能、④建屋躯体により高濃度の建屋内滞留水の線量影響を低減する機能を有しており、このPMB・HTIの機能に相当する機能を有する設備が必要となる。

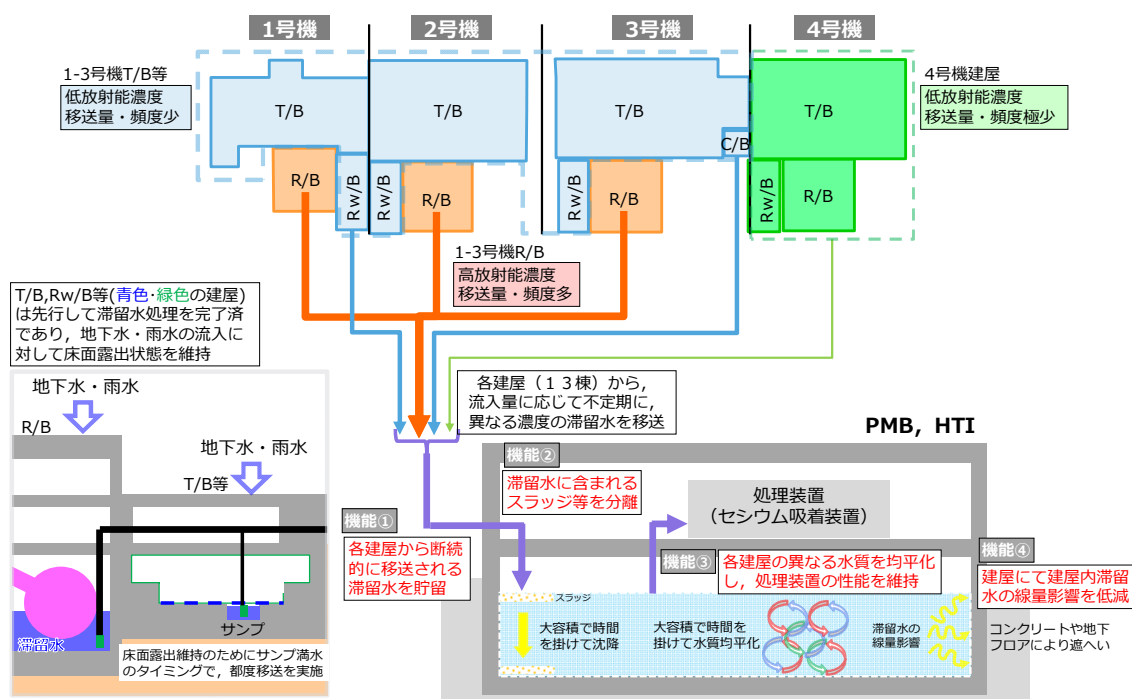


図 1.1.2-1 PMB/HTI にもたせている機能に関する概略図

PMB・HTIの4つの機能に対して、達成が必要な要求機能やPMB・HTIと滞留水一時貯留設備との比較などを整理した結果は表 1.1.2-1 の通り。

表 1.1.2-1 要求機能などの整理結果

項目	達成が必要な要求機能	プロセス主建屋,高温焼却炉建屋の能力(現状)	滞留水一時貯留設備の能力(変更後)	現状との変更点等
① 一時貯留機能	一時貯留箇所から溢れることなく、処理装置にて継続処理が可能な容量の確保	建屋地下の大きい空間により一時貯留容量を確保(各建屋 数千 m^3)	滞留水受入槽(15 m^3), 滞留水一時貯留槽(24 m^3)各2基により一時貯留容量を確保	一時貯留容量が縮小されることから、大雨・台風に伴う滞留水発生量の増大時等には、現状と同様にプロセス主建屋または高温焼却炉建屋に一時貯留することで対応するが、概ね要求機能は満足する
② スラッジ分離	処理装置の性能等に影響を与えない程度までのスラッジの分離	建屋にて時間を掛けてスラッジを沈降分離	滞留水受入槽にてスラッジの分離	滞留水受入槽の容器内でのスラッジ分離に変更となるが要求機能は満足する
③ 水質均平化	処理装置の性能等に影響を与えない程度までの水質均平化	大容積にて時間を掛けて均平化	1-4号機建屋からの建屋毎の滞留水移送運用の変更により均平化	滞留水移送運用の変更による均平化に変更となるが要求機能は満足する
④ 線量低減	一時貯留する滞留水に由来する線量を低減すること	建屋のコンクリート躯体や地下貯留に伴う土壌の遮へい効果により線量低減	滞留水一時貯留容量に合わせて地下貯留に伴う土壌の遮へいに必要な鉛遮へい等を設置し、線量低減	地下貯留に伴う土壌の遮へい効果はなくなるが、要求機能は満足する

上記の通り、滞留水一時貯留設備に設置により達成すべき要求機能は概ね満足することから、PMB・HTIへの一時貯留は不要となり、建屋内滞留水処理が可能となる。

なお、PMB・HTIの地下階を介さずに建屋内滞留水を処理装置に移送する設備（以下、直送設備という。実施計画Ⅱ.2.5 添付ー22参照）を設けているものの、滞留水移送装置から処理装置へ直送した場合には、上記のPMB・HTIの機能のうち、②、③を除外することによって処理装置の性能等に影響を与えるデメリットが発生することから、PMB・HTIに一時貯留した後に処理装置へ移送している。（このため、現在直送設備の運用は行っていない。）

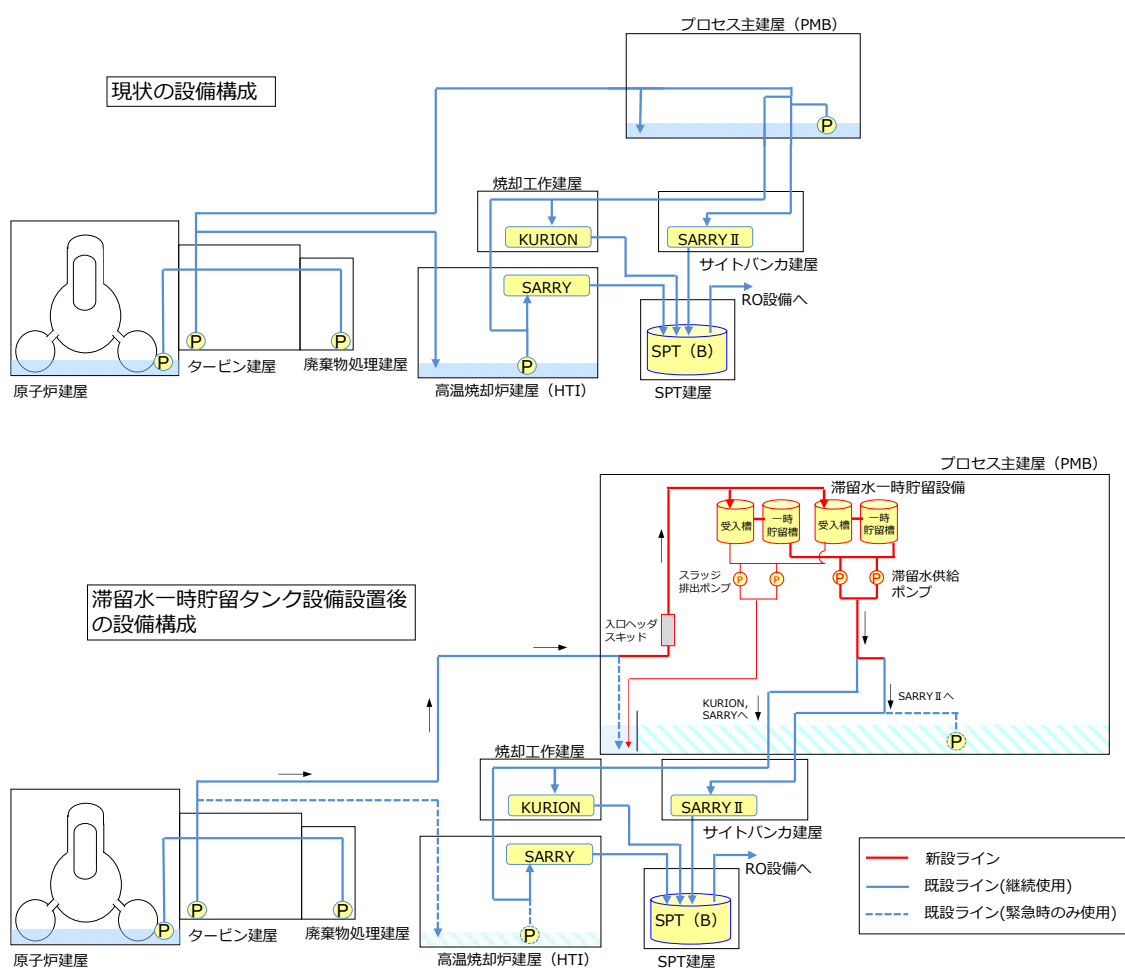
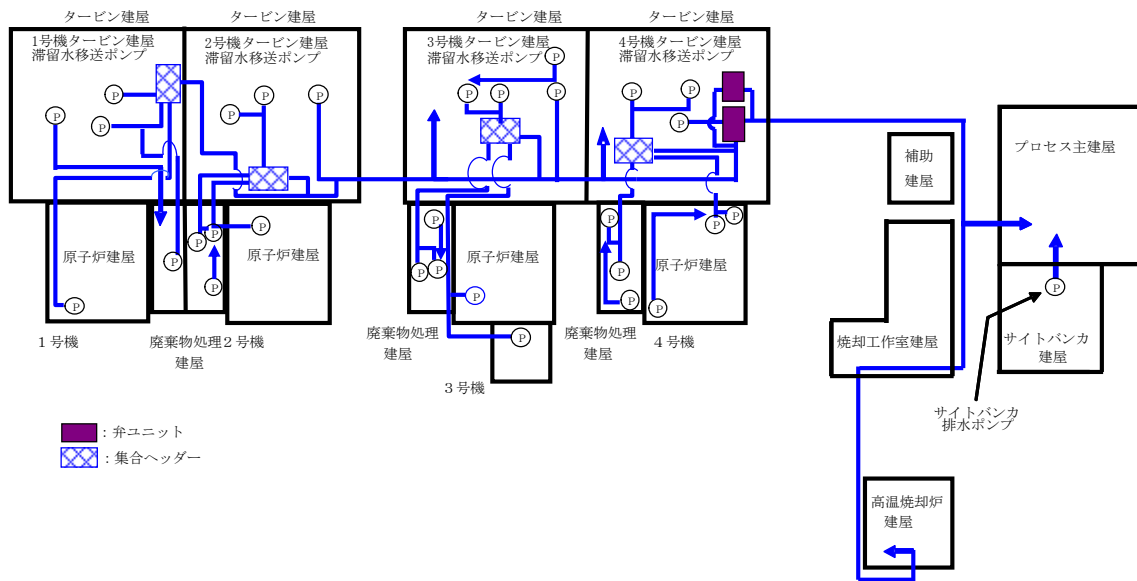


図 1.1.2-1 滞留水一時貯留設備設置前後の概略系統図



滞留水移送装置全体系統図（Ⅱ.2.5 添付資料-1 図-2（1/3）抜粋）

滞留水一時貯留設備の設置によるリスク低減に関する既存設備との比較について

リスク低減に関する既存設備と滞留水一時貯留設備の比較について、以下の項目で実施。また、リスク低減のための措置について整理を実施。

- ・PMB/HTI 地下への滞留水受入に関するリスク
- ・滞留水中に含まれるスラッジ取扱いのリスク

【PMB/HTI 地下への滞留水受入に関するリスク】

プロセス主建屋(PMB)および高温焼却炉建屋(HTI)の滞留水処理完了へ向けては、床面露出状態までの滞留水の水位低下により処理を行う計画を進めている。

PMB/HTI 地下への滞留水受入に関するリスクに関して、既存設備との比較をした結果は表 1.1.3-1 の通り。また、プロセス主建屋、高温焼却炉建屋の地下への措置等については、図 1.1.3-1、滞留水一時貯留設備の一時貯留容量に関する設計上の考慮については図 1.1.3-2 参照。

表 1.1.3-1 PMB/HTI 地下への滞留水受入に関するリスクの既存設備との比較結果

プロセス主建屋,高温焼却炉建屋への継続貯留	滞留水一時貯留設備の設置
<ul style="list-style-type: none"> ・1-4号機建屋からPMB/HTIへの移送により滞留水の受入・一時貯留が継続する。<u>液体状の放射性物質量を低減することができず、長期的にリスクが残存する状態。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・当該設備を経由して1-4号機建屋滞留水の処理が可能となり、PMB/HTIへの一時貯留が不要となるため、<u>液体状の放射性物質量の低減が可能。</u> ・大雨,台風に伴う滞留水発生量の増大時等においても、処理装置の故障時等を除き、PMB/HTIへ滞留水を受入・一時貯留せずとも対応可能。



- 当該設備の設置により、早期にPMB/HTIの建屋滞留水を処理（床面露出）することで、液体状の放射性物質【PMB,HTI合計で約1.6E+14 Bq※】のリスク低減が可能。
- ・建屋外への漏えい防止に対して、滞留水量を低減させること、流入箇所の止水をしていくことが必要である。現状、PMB/HTIは建屋外への漏えい防止を施しているものの、経年劣化等により長期的には漏えいポテンシャルが増加していく恐れがある。
- ・当該設備の一時貯留容量は既存のPMB/HTIと比較して少なくなるが、汚染水抑制対策の効果や概ね当該設備のみで対応可能であることから、PMB/HTIの滞留水受入は限定的となる。

- プロセス主建屋、高温焼却炉建屋の建屋地下については、地下躯体部分の水密性を確保し、放射性物質の建屋外への漏えい防止のため、建屋内壁のひび割れ点検・ひび割れ箇所の補修※、貫通部の止水措置を実施したうえで震災当初(2011年)より、滞留水を受入れている。また、滞留水の建屋外への漏えいを防止するために、建屋に滞留する滞留水の水位が地下水の水位【サブドレン水(建屋周辺の地下水)】よりも低くなるように管理している。
- なお、集中Rw建屋周辺のサブドレン水の日々の放射性物質の核種分析結果の確認等により、これまで放射性物質の建屋外への漏えいは発生していないことを確認している。
- PMB,HTIの建屋地下への受入開始から10年以上経過しており、補修箇所や貫通部等の止水措置を講じた箇所の経年劣化や滞留水の放射線影響による補修箇所の放射性劣化が懸念され、長期的には漏えいポテンシャルは増加していくことから、可能な限り早期に建屋滞留水量の低減することにより、建屋外への漏えいリスク低減を進めていく必要がある。

プロセス主建屋のひび割れ補修状況



※ ポリマーセメント系塗膜防水材にて補修塗装を実施。

図 1.1.3-1 プロセス主建屋、高温焼却炉建屋の地下への措置等について

- 滞留水一時貯留槽については、滞留水受入槽を通じた滞留水受入と処理装置への払出を同時に実施しており、「処理装置への払出量>滞留水受入量」であれば、滞留水一時貯留槽液位は上昇せずに、当該設備で継続して滞留水受入が可能である。
- 処理装置が1系列でも運転可能であれば、500m³/日程度(最大720m³/日)の処理が可能であり、SARRY・SARRY IIの同時運転による処理容量の増加を実施すれば、合計1200m³/日程度まで処理可能である。
- 至近数年の実績では汚染水抑制対策の効果により、滞留水移送量は減少傾向であり、大半が処理装置1系列で処理可能な範囲であること、大雨、台風に伴う滞留水発生量の増大時でも上記の最大処理量を超えないと想定されることから、PMB/HTIへ滞留水を受入・一時貯留せずに対応可能。
- なお、想定を超える大雨などによる1-4号機建屋からの滞留水移送量の増加等により、処理装置への払出量を越える移送量で滞留水一時貯留設備に移送された際【処理装置への払出量<滞留水受入量】には、液位の上昇が継続して運用容量を超えることで受入不可となり、インターロックで予備系統→PMB地下の順で滞留水の移送先を切替する設計である。

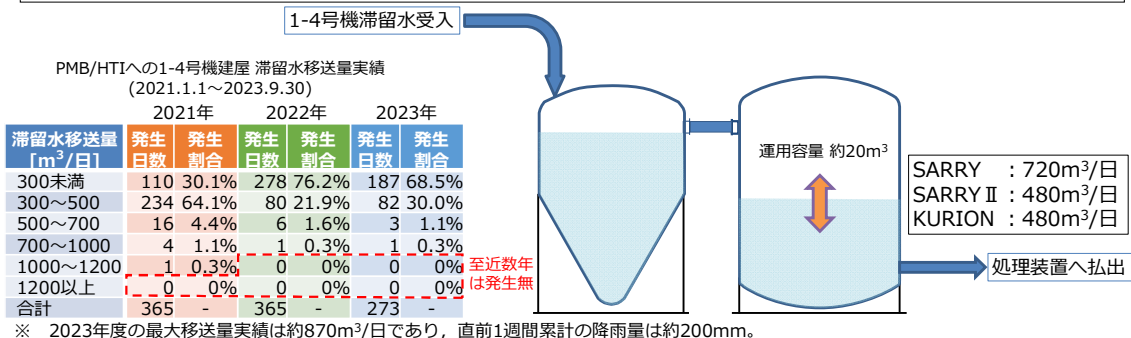


図 1.1.3-2 滞留水一時貯留設備の一時貯留容量に関する設計上の考慮

【滞留水中に含まれるスラッジ取扱いのリスク】

先行して床面露出が完了しているタービン建屋他と同様に PMB/HTI においても系外への流出リスクの高い液状の放射性物質である建屋滞留水処理（PMB/HTI 床面露出）を優先して実施し、建屋床面スラッジは別途回収していくことを計画している。なお、長期間を要することが想定される回収設備の設置検討は進めていくものの、分離したスラッジを PMB 地下へ排出する現行の設計にて設備設置を進める計画。

スラッジ取扱いのリスクに関して、既存設備との比較をした結果は表 1.1.3-2 の通り。また、滞留水一時貯留設備でのスラッジ排出箇所などについては図 1.1.3-3 参照。

表 1.1.3-2 スラッジ取扱いのリスクに関する既存設備との比較結果

プロセス主建屋,高温焼却炉建屋への継続貯留	滞留水一時貯留設備の設置
<ul style="list-style-type: none"> 滞留水中のスラッジ成分は、貯留箇所である PMB/HTI 地下へ継続して蓄積していく。 アクセス不可な建屋地下にて分離が行われ、スラッジは底部に沈降していることから、現状では<u>分離したスラッジを取り扱うことはできない。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 滞留水受入槽にて分離後にスラッジが拡散しないように PMB地下の限定したエリアに排出し、水分は床ファンネルを通じてサンブ等へ導水後に滞留水一時貯留設備へ回収可能とする設備構成を計画している。当面の間は継続して PMB 地下にスラッジが蓄積していく。(数回/月の頻度*と想定) 設備内で分離することから、分離したスラッジの取扱いが可能であり、地下階への排出から将来的に設置する回収設備等への切替も可能な構成。

- 当該設備の設置により、**HTIへの新たなスラッジの蓄積は発生しないこと**、設備内で分離するプロセスに変更し、取扱い可能な状態となることから、様々な箇所へスラッジが拡散するリスク低減が見込まれる。**将来的には当該設備から直接スラッジ回収する設備を設置することでPMBへの排出をなくし、更なるリスクの低減を図る。**
- 建屋床面に蓄積したスラッジは、PMB/HTI床面露出後にまとめて回収するべく、同様の高線量下での環境における作業である除染装置スラッジ、ゼオライト土嚢等の回収・処理にて検討を進めている遠隔での回収・処理技術を活用・展開し、スラッジの回収・処理工法の確立やモックアップ等により作業成立性の検証を進めていく計画。まとめて効率よく回収することで廃棄物発生量の低減の効果も期待できる。

※ 実運用のなかで滞留水の性状に応じて、実状に合わせた適切なスラッジ排出頻度を策定する計画

- 滞留水一時貯留設備ではスラッジはPMB地下の西側通路(幅1.5m程度)へ排出する。区画された限定的な箇所であることから建屋全域にスラッジが拡散せず、通路上であることから床面露出後の回収の際にもアクセスは比較的容易であることが想定され、限定された区画であることで回収作業の計画を立案しやすい。
- これまでの床面スラッジの回収作業の実績は以下の通りであり、比較的線量が低い環境であったことから下記のような手法を用いたが、PMB等地下は高線量下での環境であることから、環境に合わせた遠隔での回収・処理技術が必要となる。



図 1.1.3-3 滞留水一時貯留設備でのスラッジ排出箇所等のまとめ

また、滞留水一時貯留設備設置に伴うリスク低減に関する適切性に関しては、表 1.1.3-3 の通りであり、現状よりもリスクは低減すると考えている。

表 1.1.3-3 滞留水一時貯留設備設置に伴うリスク低減に関する適切性

ロードマップ関連 項目		想定されるリスク	リスク低減対策	目的	対応状況	個々の対策に対する適切性
プラントの安定状態維持・継続に向けた計画	滞留水処理計画	・放射性物質の系外放出リスク	滞留水一時貯留設備の設置	プロセス主建屋(PMB)/高温焼却炉建屋(HTI)の滞留水処理を実施し、床面露出するには、PMB/HTIでの1-4号機建屋内滞留水の一時的貯留が不要な処理プロセスへの変更が必要なため、PMB/HTIに代わるバッファ機能などを有する設備として滞留水一時貯留設備を設置する。	今後対策実施	<p>①PMB, HTI からの放射性物質の追加放出リスクが低減しない。</p> <p>②PMB, HTI からの漏えい時における放射性物質の追加放出リスクは大きい。</p> <p>③対策を実施することにより津波の浸入等による滞留水が敷地外へ流出するリスクは低減する。</p> <p>④PMB, HTI の建屋の止水箇所の劣化等により、漏えいに繋がる損傷が発生する可能性が増加する。</p> <p>⑤PMB, HTI の滞留水処理のために可能な限り早期に実施することが望ましい。</p> <p>⑥対策を実施するリスクは小さいが、滞留水から分離したスラッジについては、継続して PMB には蓄積することになる。</p> <p>⑦対策を実施できないリスクはない。</p>

適切性確認の視点 ①対策を実施しないリスク ②放射性物質の追加放出リスク ③外部事象に対するリスク ④時間的なリスクの増減 ⑤実施時期の妥当性 ⑥対策を実施するリスク ⑦対策を実施できないリスク

滞留水一時貯留設備の設置に伴う既設設備の改造箇所と改造に伴う影響について

滞留水一時貯留設備は、１－４号機滞留水移送装置と処理装置の既設設備の間に系統改造を実施して設置する。滞留水一時貯留設備の設置に伴う既設設備の改造箇所は以下の通り。図 1.1.4-1 参照。

- ①PMB 切替弁スキッドの一部
【PMB 切替弁スキッドから入口ヘッダスキッドまでのライン新設】

- ②PMB 切替弁スキッドから SARRY II 入口までの配管
【入口ヘッダスキッドから SARRY II までのライン新設】

- ③PMB 切替弁スキッド近傍配管
【PMB 地下滞留水の SARRY II での並列処理のためのライン追加】

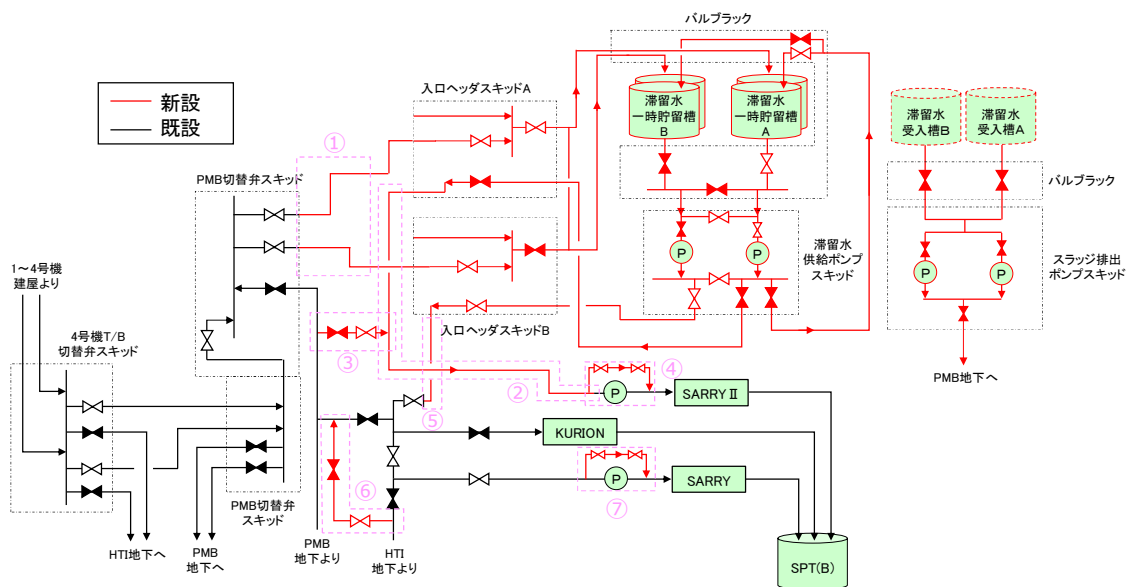
- ④SARRY II 入口部配管および SARRY II ブースターポンプ出口部配管
【SARRY II ブースターポンプバイパスライン追加】

- ⑤サイトバンカ建屋 1 階西側配管
【入口ヘッダスキッドから SARRY, KURION への移送するためのライン新設】

- ⑥プロセス主建屋 1 階西側移送配管およびプロセス主建屋切替弁スキッド移送配管部
【HTI 地下滞留水の SARRY II での並列処理のためのライン追加】

- ⑦SARRY 入口部配管および SARRY ブースターポンプ出口部配管
【SARRY ブースターポンプバイパスライン追加】

【改造後】



【改造前】

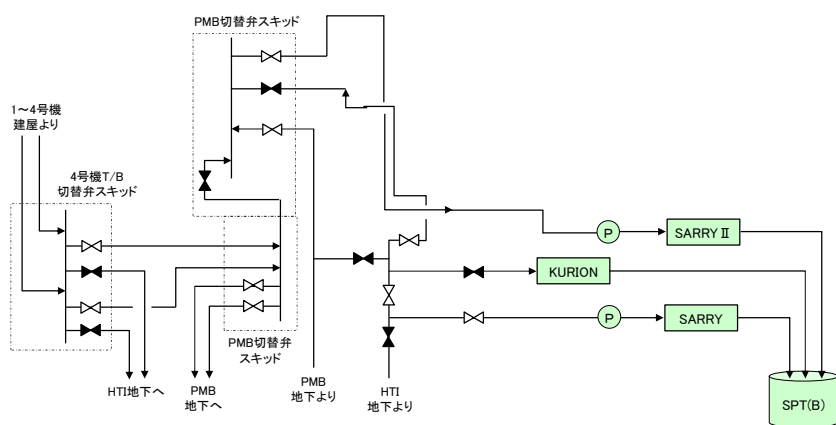


図 1.1.4-1 滞留水一時貯留設備の設置に伴う既設設備の改造箇所

既設設備の改造の際に、すべての箇所を同時に施工開始すると施工完了（使用前検査を含む）までの期間、改造範囲に該当する既設設備については使用停止となることで滞留水処理が長期に停止し、運用に支障をきたすこととなる。このため、既設設備の改造にあたっては、改造範囲の停止中も建屋内滞留水処理は継続する必要がある、いずれかの処理装置での建屋内滞留水処理が可能な状態となるように限定した範囲で区切り、その改造範囲毎に施工を順次実施していくことで既設設備への運用影響が最小限となるような考慮を行う。

なお、既設設備の改造の施工にあたっては、予め施工範囲を隔離したうえで水抜きなどを実施し、施工中に系統内の残水による漏えい等が発生しないように漏えい受け等の対策を実施する。

2 章 設計，設備について措置を講ずべき 事項

2.8 放射性固体廃棄物の処理・保管・管理 への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

8. 放射性固体廃棄物の処理・保管・管理

○施設内で発生する瓦礫等の放射性固体廃棄物の処理・貯蔵にあたっては，その廃棄物の性状に応じて，適切に処理し，十分な保管容量を確保し，遮へい等の適切な管理を行うことにより，敷地周辺の線量を達成できる限り低減すること。

2.8.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備内で発生する瓦礫等の放射性固体廃棄物の処理・貯蔵にあたっては，その廃棄物の性状に応じて，適切に処理し，十分な保管容量を確保し，遮へい等の適切な管理を行うことにより，敷地周辺の線量を達成できる限り低減する。

2.8.2 対応方針

○ 廃棄物の性状に応じた適切な処理

放射性固体廃棄物や事故後に発生した瓦礫等の放射性固体廃棄物等については、必要に応じて減容等を行い、その性状により保管形態を分類して、管理施設外へ漏えいすることのないよう一時保管または貯蔵保管する。

○ 十分な保管容量の確保

放射性固体廃棄物や事故後に発生した瓦礫等については、これまでの発生実績や今後の作業工程から発生量を想定し、既設の保管場所内での取り回しや追加の保管場所を設置することにより保管容量を確保する。

○ 遮蔽等の適切な管理

作業員への被ばく低減や敷地境界線量を達成できる限り低減するために、保管場所の設置位置を考慮し、遮蔽、飛散抑制対策、巡視等の保管管理を実施する。

○ 敷地周辺の線量を達成できる限り低減

上記を実施し、継続的に改善することにより、放射性固体廃棄物や事故後に発生した瓦礫等からの敷地周辺の線量を達成できる限り低減する。

(実施計画：II-1-8-1)

滞留水一時貯留設備の設置に伴い発生する廃棄物等の発生量については、別紙－1 参照

滞留水一時貯留設備の設置に伴い発生する廃棄物の発生量について

滞留水一時貯留設備の設置に伴い発生する廃棄物発生量を表 2.8.1-1 に示す。

なお、滞留水一時貯留設備は、2023 年度の固体廃棄物の保管管理計画に計上済。

また、本設置工事で発生する廃棄物については、梱包材等の持ち込みを減らすなど、極力廃棄物の発生低減に努める。

表 2.8.1-1 滞留水一時貯留設備の設置に伴い発生する廃棄物量

	線量区分 [mS/h]	発生源	想定発生量 [m ³]		
			2023 年度	2024 年度	2025 年度
可燃物	BG 程度	紙・ウエス類，プラスチック・ポリ・ビニール類，木材類	0	5	7
	BG～0.1		0	23	14
	0.1～1		0	2	0
	1～		1	1	1
不燃物	BG 程度	金属ガラ，コンクリートガラ，機器類・制御盤類，塩化ビニール類，保温材，ケーブル類	1	6	3
	BG～0.1		4	78	23
	0.1～1		26	487	2
	1～		0	1	1
難燃物	BG 程度	ゴム類，難燃シート類，ホース類	1	2	2
	BG～0.1		0	20	13
	0.1～1		0	5	3
	1～		0	2	1
合計			33	632	70

※BG：バックグラウンド

発生する瓦礫類については線量，種類で分別し，できる限り減容した上で，一時保管エリアで保管する。なお，β汚染のあるものについては飛散抑制のためコンテナ等に収納する。

以上

2.9 放射性液体廃棄物の処理・保管・管理 への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

9. 放射性液体廃棄物の処理・保管・管理

○施設内で発生する汚染水等の放射性液体廃棄物の処理・貯蔵にあたっては，その廃棄物の性状に応じて，当該廃棄物の発生量を抑制し，放射性物質濃度低減のための適切な処理，十分な保管容量確保，遮へいや漏えい防止・汚染拡大防止等を行うことにより，敷地周辺の線量を達成できる限り低減すること。また，処理・貯蔵施設は，十分な遮へい能力を有し，漏えい及び汚染拡大し難い構造物により地下水や漏水等によって放射性物質が環境中に放出しないようにすること。

2.9.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備内で発生する汚染水等の放射性液体廃棄物の処理・貯蔵にあたっては，その廃棄物の性状に応じて，当該廃棄物の発生量を抑制し，放射性物質濃度低減のための適切な処理，十分な保管容量確保，遮へいや漏えい防止・汚染拡大防止等を行うことにより，敷地周辺の線量を達成できる限り低減する。また，処理・貯蔵施設は，十分な遮へい能力を有し，漏えい及び汚染拡大し難い構造物により，地下水や漏水等によって放射性物質が環境中に放出しないようにする。

2.9.2 対応方針

- 廃棄物の発生量の抑制及び放射性物質濃度低減のための適切な処理
滞留水一時貯留設備で発生した放射性液体廃棄物については、処理装置へ移送し、処理を行う。なお、設備へ蓄積したスラッジについてはプロセス主建屋地下階へ排出を実施する。
- 十分な保管容量確保
1－4号機建屋の滞留水を本設備にて一時貯留し、速やかに処理装置へ移送し、継続処理を行うプロセスであり、滞留水の長期にわたる貯留は実施しない設備であるため、保管容量は十分である。
- 遮へいや漏えい防止・汚染拡大防止
機器等には設置環境や内部流体の性状等に応じた適切な材料を使用し、遮へいや漏えい防止を行う。また、機器等の周辺に堰等を設け、汚染拡大防止の対策を講じる。
- 敷地周辺の線量を達成できる限り低減
上記3項目を実施し、継続的に改善することにより、放射性液体廃棄物等の処理・貯蔵に伴う敷地周辺の線量を達成できる限り低減する。
- 十分な遮へい能力を有し、漏えい及び汚染拡大し難い構造物
汚染水等を扱う処理・貯蔵施設に対して、人が近づく可能性のある箇所を対象に作業員の線量低減の観点で鉛毛マットによる遮へいを設置する等の対策を講じる。また、当該施設はトラフ等により独立した区画内に設けるかあるいは周辺に堰等を設け、漏えいの拡大防止対策を講じることにより、万が一漏えいしても漏えい検知器を設置による漏えいの早期検知を行って、漏えい水が排水路等を通じて所外へ流出しないようにする。

滞留水一時貯留設備の放射性物質の漏えい防止及び漏えい拡大防止については、別紙－1，滞留水一時貯留設備で分離するスラッジ等の取扱いについては、別紙－2，滞留水一時貯留設備の貯留容量に関する考慮については、別紙－3，**滞留水一時貯留設備の水質均平化に関する考慮については、別紙－4**参照。

滞留水一時貯留設備の放射性物質の漏えい防止及び漏えい拡大防止

(1) 漏えい発生防止

- a. 高線量の滞留水を扱うため、接液部は耐放射線性、耐食性を併せ持つ材質を使用する。(材質等への考慮については、2.14.5-3, 2.14.5.1-1～2.14.5.1-2 参照)
- b. 滞留水を移送する配管は耐食性を有する鋼管並びにポリエチレン管、耐圧ホース等とする。なお、鋼管の内面にはライニングを施す。(既設配管のうち、現地改造部分を除く)
- c. 屋外に敷設される移送配管のうち、ポリエチレン管とポリエチレン管の接合部は漏えい発生防止のために融着構造とする。
- d. 滞留水供給ポンプおよびスラッジ排出ポンプは、耐食性に優れた二相ステンレス鋼等を使用するとともに、軸封部は漏えいの発生し難いメカニカルシール構造とする。

(2) 漏えい検知・漏えい拡大防止

- a. 滞留水受入槽，滞留水一時貯留槽，滞留水供給ポンプおよびスラッジ排出ポンプ等は，以下の対応を行う。
 - ・漏えいの早期検知および漏えいの拡大防止として，機器の周囲に堰を設けるとともに漏えい検知器を設置する。
 - ・漏えい検知の警報は，免震重要棟集中監視室に表示し，運転員が流量等の運転監視パラメータの状況を確認し，ポンプ運転・停止等の適切な対応がとれるようにする。
- b. 移送配管等は，以下の対応を行う。
 - ・鋼管と鋼管，ポリエチレン管と鋼管との取合い等でフランジ接続となる箇所については，堰を設置し，漏えい拡大防止を図る。また，堰内には漏えい検知器を設置する。漏えい検知の警報は，免震重要棟集中監視室に表示し，運転員により流量等の運転監視パラメータの状況を確認し，ポンプ運転・停止等の適切な対応がとれるようにする
 - ・屋外に敷設される移送配管については，コルゲート管等で移送配管を覆う二重構造とする。

漏えい拡大防止に関する概念図は図 2.9.1-1，移送配管の概略配置図は図 2.9.1-2～図 2.9.1-5 参照

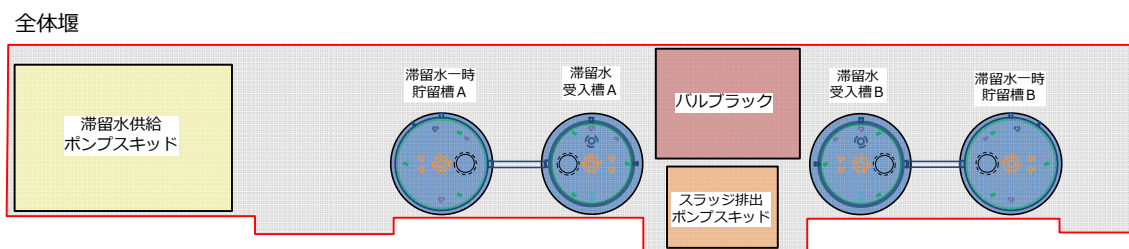
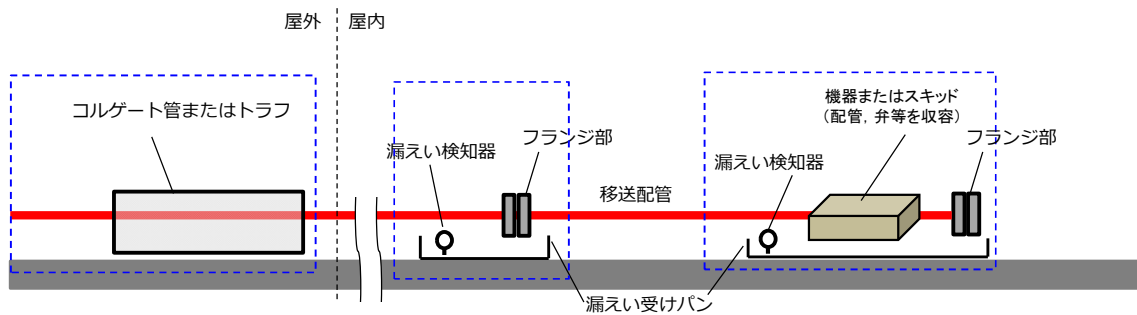


図 2.9.1-1 漏えい拡大防止に関する概念図

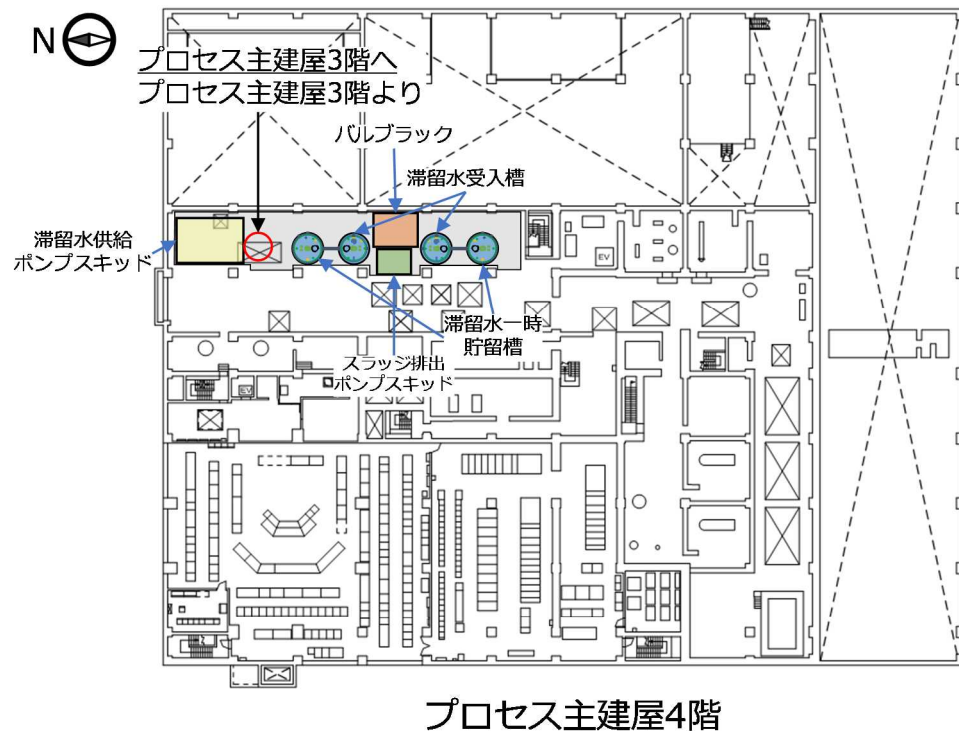


図 2.9.1-2 配管概略配置図 (1 / 4)

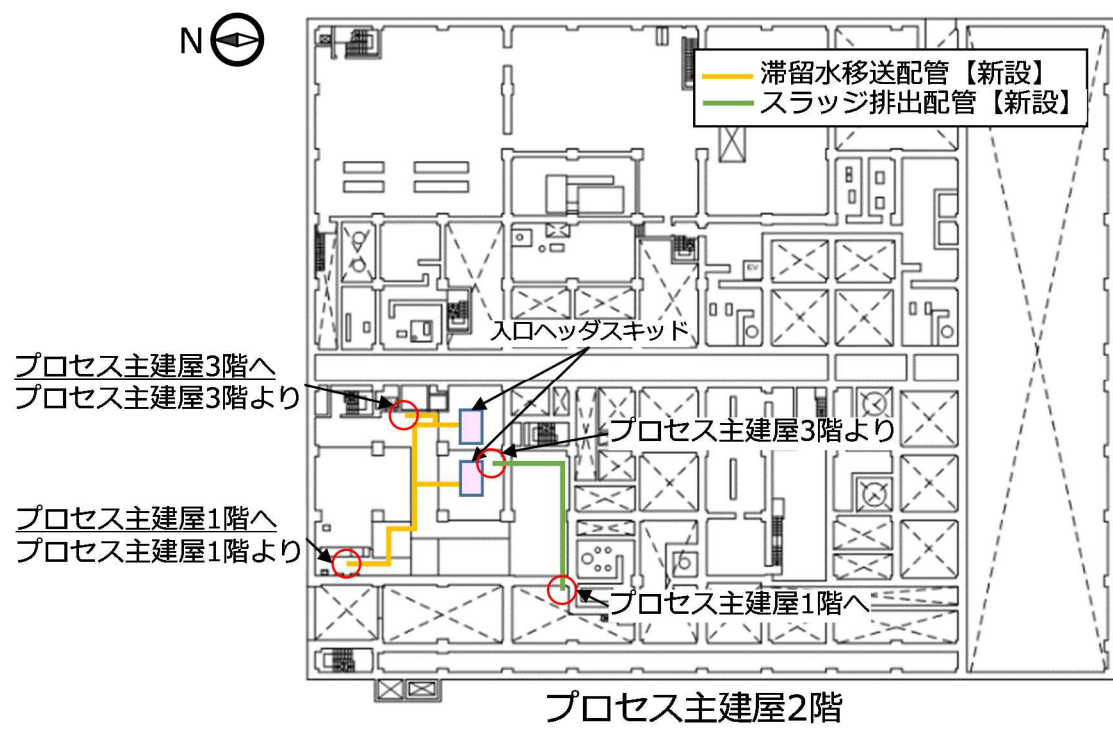


図 2.9.1-3 配管概略配置図 (2 / 4)

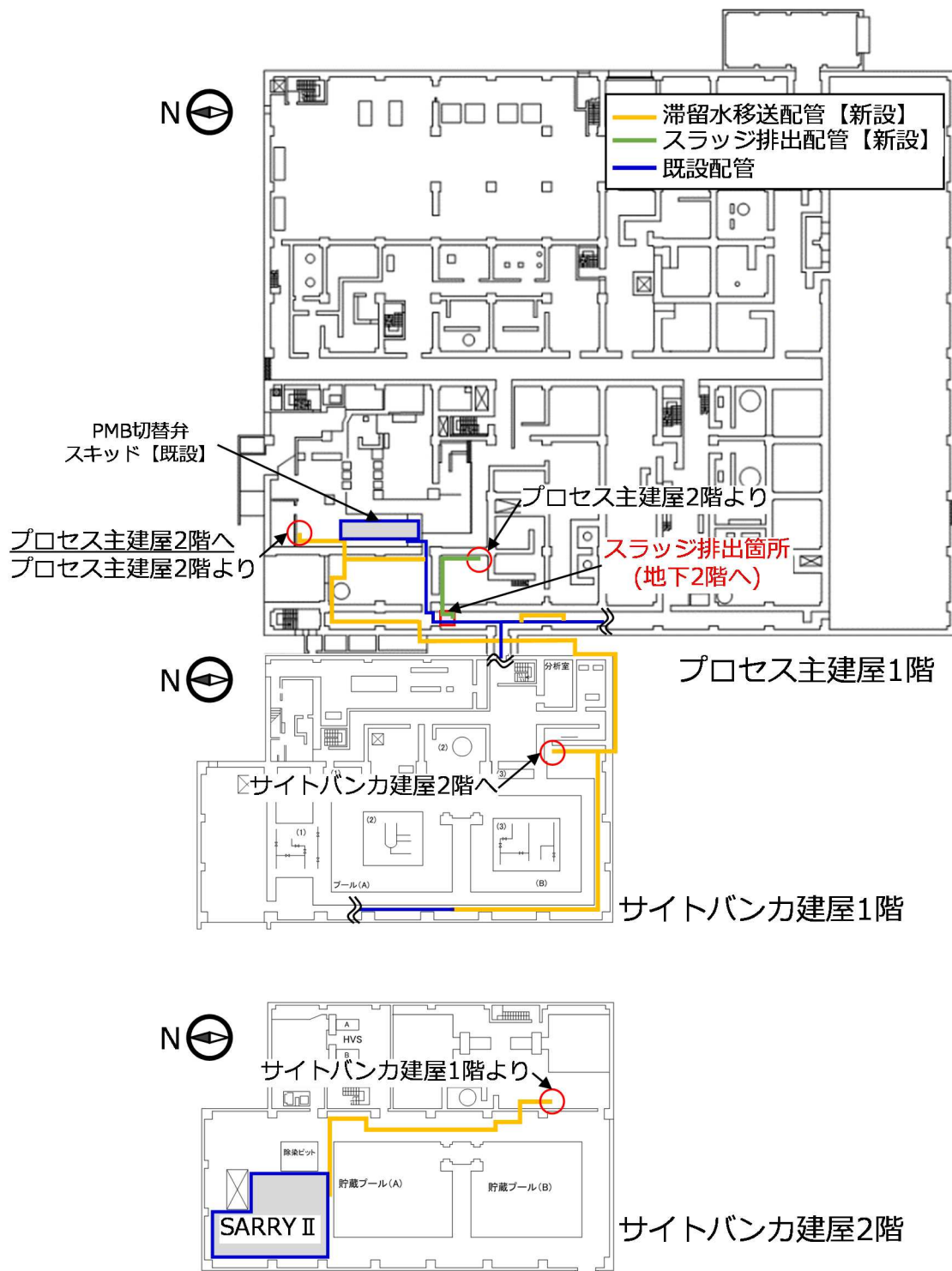


図 2.9.1-4 配管概略配置図 (3 / 4)

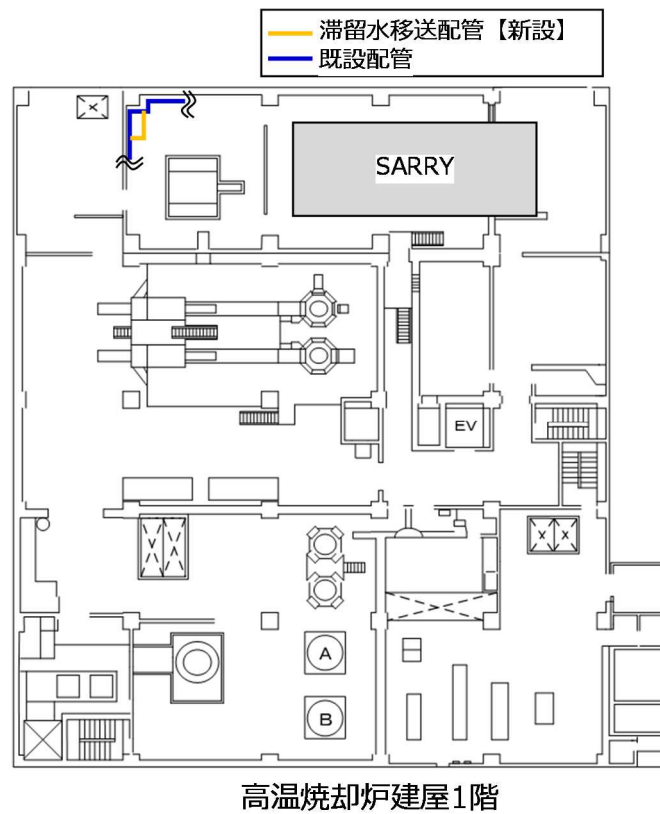
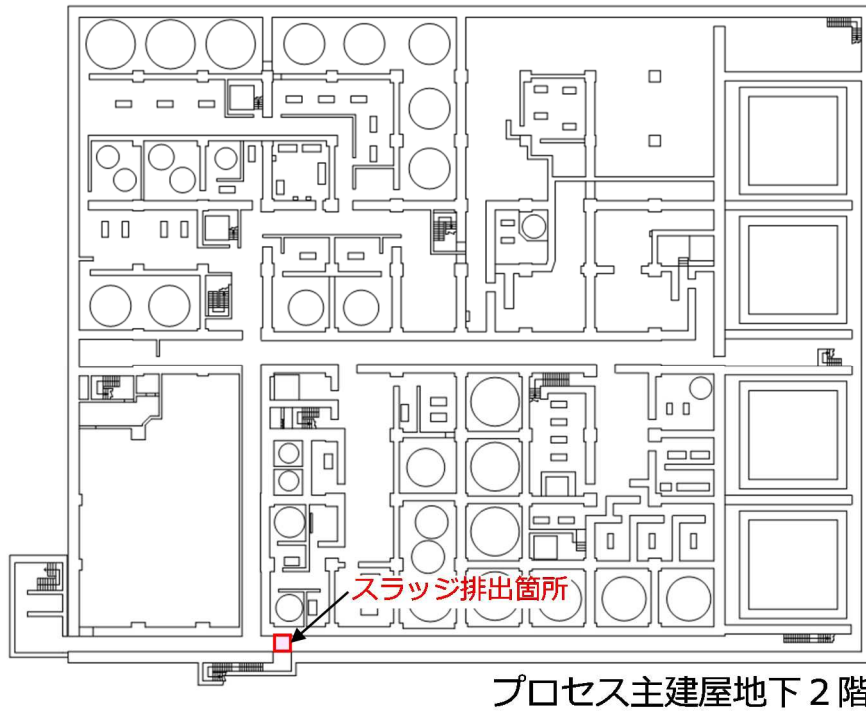


図 2.9.1-5 配管概略配置図 (4 / 4)

以上

滞留水一時貯留設備で分離するスラッジ等の取扱いについて

滞留水一時貯留設備では滞留水受入槽での沈降分離等によって滞留水からスラッジ等を分離する設計としている。分離したスラッジは受入槽の底部に蓄積した後にスラッジ排出ポンプにより、プロセス主建屋地下へ移送・排出することとしている。

１．設計上の配慮

タンク底部への広範囲のスラッジ蓄積の防止し、底部中心に向けて集約して沈降させること、並びに蓄積するスラッジの排出性を考慮し、滞留水受入槽底部の形状を円錐型としている。

滞留水受入槽からのスラッジ排出にあたっては、内部のスラッジ排出配管のノズルは上向きとし、タンク底部からスラッジを吸い上げる構造としていること、底部に蓄積したスラッジを浮遊させ、スラッジ排出を効率的に実施するため、底部へ攪拌水を供給する配管を設置すること、およびスラッジを排出ノズル近傍で希釈しながら、吸い出すことで固形分濃度が低減されて閉塞を生じにくくするため、希釈水を供給する配管を設置することにより、スラッジによる排出ラインの閉塞リスクへの考慮を実施する。なお、滞留水受入槽の攪拌・希釈には滞留水受入槽の上澄水を用いる。

また、滞留水受入槽からプロセス主建屋地下までのスラッジ排出ラインに関しては、排出先まで下り勾配を設けて移送ラインを敷設することにより、移送ライン上での閉塞リスクを低減する設計としている。

設計上の配慮の滞留水受入槽への設置イメージは図 2.9.2-1 参照。

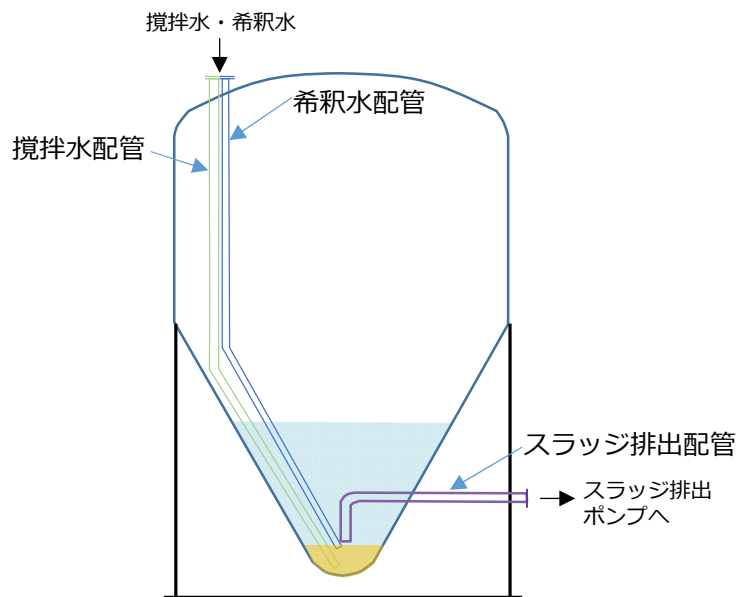


図 2.9.2-1 設計上の配慮の滞留水受入槽への設置イメージ

スラッジ排出ポンプは、うず巻形の遠心ポンプであり、羽根車の形状はスラリーなどを含んだ液体の移送に一般的に適用され、スラッジ閉塞リスクの低いオープン型を用いる。

オープン型羽根車の遠心ポンプのイメージは図 2.9.2-2 参照。

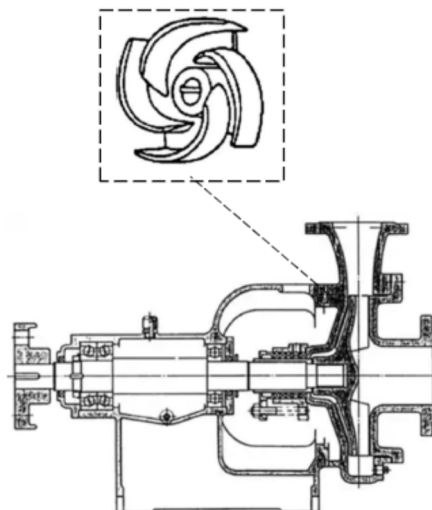


図 2.9.2-2 オープン型羽根車の遠心ポンプのイメージ

なお、受入槽からスラッジ排出については、ミニスケールの受入槽排出の模擬試験装置、模擬スラッジを用いて、コールド試験にて検証を実施し、スラッジ排出が可能であることを確認している。

2. スラッジ排出をPMB地下へ排出する理由

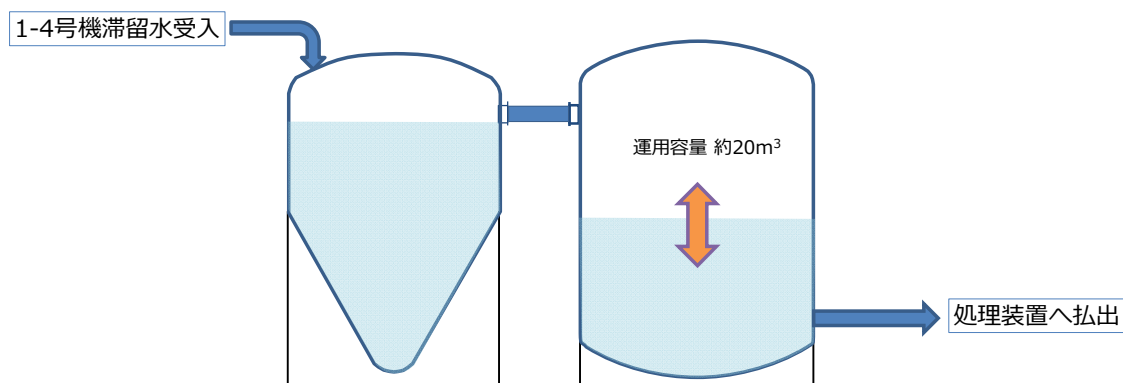
先行して床面露出が完了しているタービン建屋他と同様に、PMB/HTIにおいても系外への流出リスクの高い建屋滞留水処理を優先して実施し、建屋床面スラッジは別途回収していくことを計画している。

スラッジを地下階に排出せずに、受入槽で分離したスラッジを容器等へ直接回収する場合には、回収したスラッジに関して、安定状態で保管可能な容器等に封入する処置およびその取扱いのための装置等の設計、設置が必要となり、設置完了までに長期間を要することが想定されることから、速やかにリスクの高い建屋滞留水処理（PMB/HTI 床面露出）を完了するために、分離したスラッジを建屋地下へ排出する現行の設計にて設備を設置することで進めている状況である。なお、当面の間は一時的に分離したスラッジを建屋地下に排出することで対応する予定だが、今後 PMB/HTI のスラッジ回収のための装置、設備の設計・設置について、検討していく。

滞留水一時貯留設備の設計においては、受入槽で分離したスラッジの回収・保管する対策の実施による排出運用からの将来の切替に備えて、排出ライン上に予備座を設けることとしている。

滞留水一時貯留設備の貯留容量に関する考慮について

滞留水一時貯留設備を用いた滞留水処理において、滞留水受入槽は、連結管を通じて上澄水を継続して滞留水一時貯留槽へ移送することから、概ね満水状態での運用となり、貯留容量として見込むことはできない。一方、滞留水一時貯留槽については、滞留水受入槽を通じた滞留水受入と処理装置（セシウム吸着装置【KURION】、第二セシウム吸着装置【SARRY】、第三セシウム吸着装置【SARRY II】）への払出を同時に実施しており、処理装置への払出量＞滞留水受入量であれば、滞留水一時貯留槽液位は上昇せずに、当該設備で継続して滞留水の受入が可能である。



至近 3 年（2021.1.1～2023.12.31）の 1-4 号機建屋内滞留水の PMB または HTI への移送量の日毎の実績データにおいても、90%以上は 500m³/日以下の移送量である。処理装置のうち、処理容量の少ない SARRY II, KURION においても 480m³/日程度で処理可能であることから、処理装置が 1 系列でも運転可能であれば、滞留水一時貯留設備の貯留容量においても、概ね日々発生する建屋内滞留水処理は可能である。なお、滞留水一時貯留槽は運用時に最大 20m³ 程度の運用容量を有しており、急な移送量増加が発生した場合においても、バッファ容量を有することにより、10m³/h 程度の移送量変動は吸収可能な見込み。

PMB/HTIへの1-4号機建屋 滞留水移送量実績
(2021.1.1~2023.12.31)

滞留水移送量 [m ³ /日]	2021年		2022年		2023年	
	発生 日数	発生 割合	発生 日数	発生 割合	発生 日数	発生 割合
300未満	110	30.1%	278	76.2%	261	68.5%
300~500	234	64.1%	80	21.9%	100	30.0%
500~700	16	4.4%	6	1.6%	3	1.1%
700~1000	4	1.1%	1	0.3%	1	0.3%
1000~1200	1	0.3%	0	0%	0	0%
1200以上	0	0%	0	0%	0	0%
合計	365	-	365	-	365	-

至近3年は発生無

想定を超える大雨などによる1-4号機建屋への地下水流入量増加に伴う滞留水移送量の増加等により、処理装置への払出量を超えて滞留水一時貯留設備に移送された際【滞留水受入量>処理装置への払出量】には、液位の上昇が継続して運用容量を超えることで受入不可となり、インターロックで予備系統→PMB地下の順で滞留水の移送先を切替する設計である。

なお、滞留水一時貯留設備経由では処理装置のうち、SARRYは720m³/日程度、SARRY IIは480m³/日程度、KURIONは480m³/日程度で処理運転が可能であり、SARRY・SARRY IIの同時運転による処理容量の増加(720m³/日+480m³/日で合計1200m³/日程度)も実施可能な設計としている。至近3年の期間における滞留水移送量の実績最大値は約1080m³/日【2021年7月】である(2023年の最大移送量実績は約870m³/日であり、直前1週間累計の降雨量は約200mm)ことから、SARRY・SARRY IIの同時運転を活用すれば、滞留水一時貯留設備においても至近の滞留水移送量の状況を踏まえると概ね満水になることなく処理可能と想定している。

滞留水一時貯留設備の水質均平化に関する考慮について

1－4号機建屋からの滞留水処理は、現状ではPMB、HTIにおいて数千m³の大容量にて1－4号機各建屋の異なる水質の均平化を実施したうえで、処理装置で実施している。

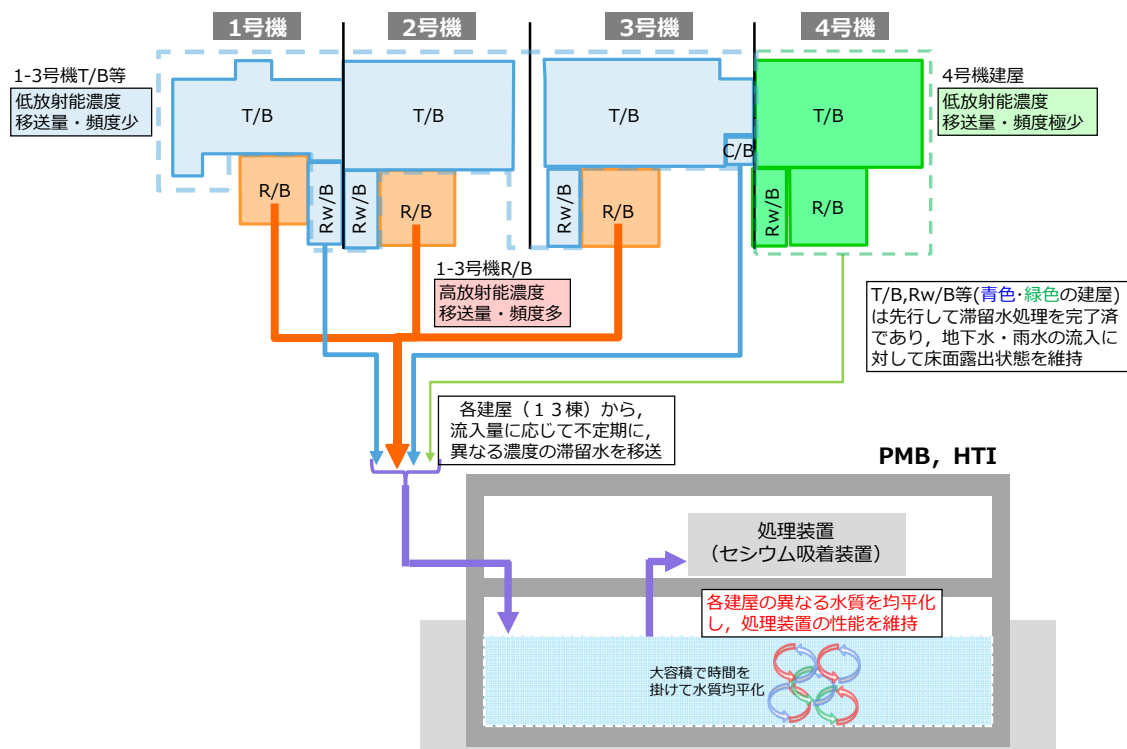


図 2.9.4-1 1-4号機各建屋からのPMB、HTIへの滞留水移送およびPMB、HTIから処理装置での処理までの状況

また、1－4号機建屋からの滞留水移送において、現状、T/BやRw/B等の床面露出を達成済みの建屋に関しては、地下水・雨水等の建屋流入に対して床面露出状態維持のために床ドレンサンプ等で水位管理を実施しており、サンプ満水等のタイミングで、都度移送を実施している。また、燃料デブリ冷却のために原子炉へ注水を継続している1－3号機R/Bに関しては、建屋水位一定維持のために設定範囲内の水位上限に達したタイミングで、都度移送を実施している。

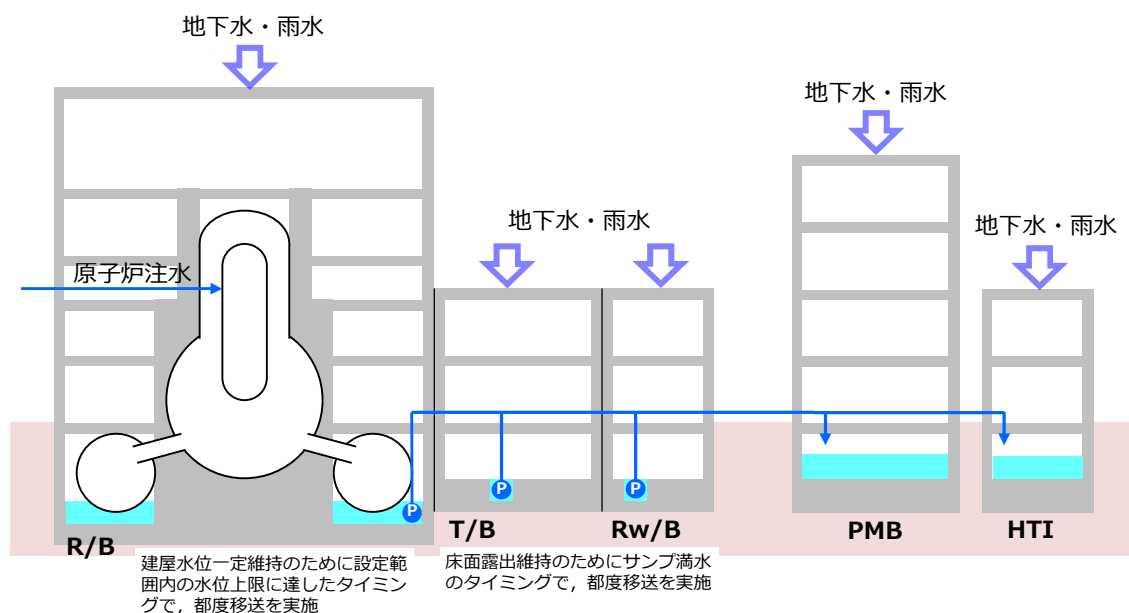


図 2.9.4-2 1-4 号機各建屋から PMB, HTI への滞留水移送状況

1-4 号機各建屋の現状の水質のうち、処理装置の除去対象の放射性核種である Cs-137, Sr-90 の濃度については、Cs-137 : $10^4 \sim 10^7$ オーダー[Bq/L], Sr-90 : $10^4 \sim 10^7$ オーダー[Bq/L]と建屋毎にばらついており、各建屋のうち、1-3号機 R/B において比較的高い状況を確認している。PMB, HTI においては1-4号機各建屋の水質が集約されて Cs-137 : 10^7 程度[Bq/L], Sr-90 : 10^6 程度[Bq/L]となっている。

1-4号機建屋から PMB, HTI への移送量のうち、1-3号機 R/B については原子炉注水を継続実施（2024年現在、1-3号機合計で 220m³/日程度）しており、注水後に原子炉から原子炉建屋地下へ流入する経路で建屋滞留水が継続的に発生している。1-3号機 R/B においては、この経路での発生が大半を占めている状況である。

1-4号機 T/B 等については、滞留水処理を実施し、床面露出状態を維持していることから、地下水・雨水等の建屋への流入による滞留水発生が支配的であるが、汚染水抑制対策の効果もあり、発生量は1-3号機 R/B と比較して少ない状況である。

表 2.9.4-1 1-4 号機各建屋および PMB, HTI の滞留水の放射能濃度
および 1-4 号機各建屋から PMB, HTI への平均移送量

号機	建屋	試料採取日	放射能濃度[Bq/L]		移送量 [m3/日]
			Cs-137	Sr-90	
1	R/B	2023/11/20	1.71E+07	5.03E+06	90~120程度
	T/B	2023/11/20	6.24E+05	2.17E+04	0~15程度
	Rw/B	2023/11/21	3.46E+06	4.19E+04	0~5程度
2	R/B	2023/11/10	2.78E+07	2.58E+07	50~65程度
	T/B	2023/11/21	2.22E+05	1.78E+05	2~10程度
	Rw/B	2023/11/21	9.64E+05	1.56E+05	0~5程度
3	R/B	2023/11/22	1.09E+07	5.96E+06	90~110程度
	T/B	2023/11/22	1.48E+06	2.41E+05	10~35程度
	Rw/B	2023/11/22	2.66E+07	1.49E+05	0~10程度
4	R/B	2023/11/22	1.75E+04	1.66E+04	0~3程度
	T/B	2023/11/22	2.85E+05	1.29E+04	0~6程度
	Rw/B	2023/11/22	6.05E+05	8.91E+04	0~3程度

↓

建屋	試料採取日	放射能濃度[Bq/L]		移送量 [m3/日]
		Cs-137	Sr-90	
PMB	2023/11/28	1.07E+07	6.64E+06	-
HTI	2023/11/28	1.50E+07	6.52E+06	-

滞留水一時貯留設備を用いた滞留水処理においては、これらの現状を踏まえて 1-4 号機建屋からの建屋毎の滞留水移送運用の変更により均平化を実施し、後段設備である処理装置への影響を与えないよう考慮する。具体的には 1 - 3 号機 R/B からの移送に関して、建屋水位一定維持は継続したうえで、都度移送する運用から、移送流量を制御し、建屋流入量に合わせて常時移送する運用へ変更する。

この運用変更により、原子炉注水により常時一定量の滞留水が継続発生する特性を活用し、1 - 3 号機 R/B から一定流量での常時移送が可能となる。

この変更により高濃度で移送量の大半を占める 1 - 3 号機 R/B から滞留水一時貯留設備への移送が継続することで、1 - 4 号機 T/B 等から比較的低濃度の滞留水が都度移送されて滞留水一時貯留設備内で混合された際にも低濃度の割合は低いことから、滞留水一時貯留設備から処理装置へ移送される滞留水の濃度変動を抑制することが可能となる。

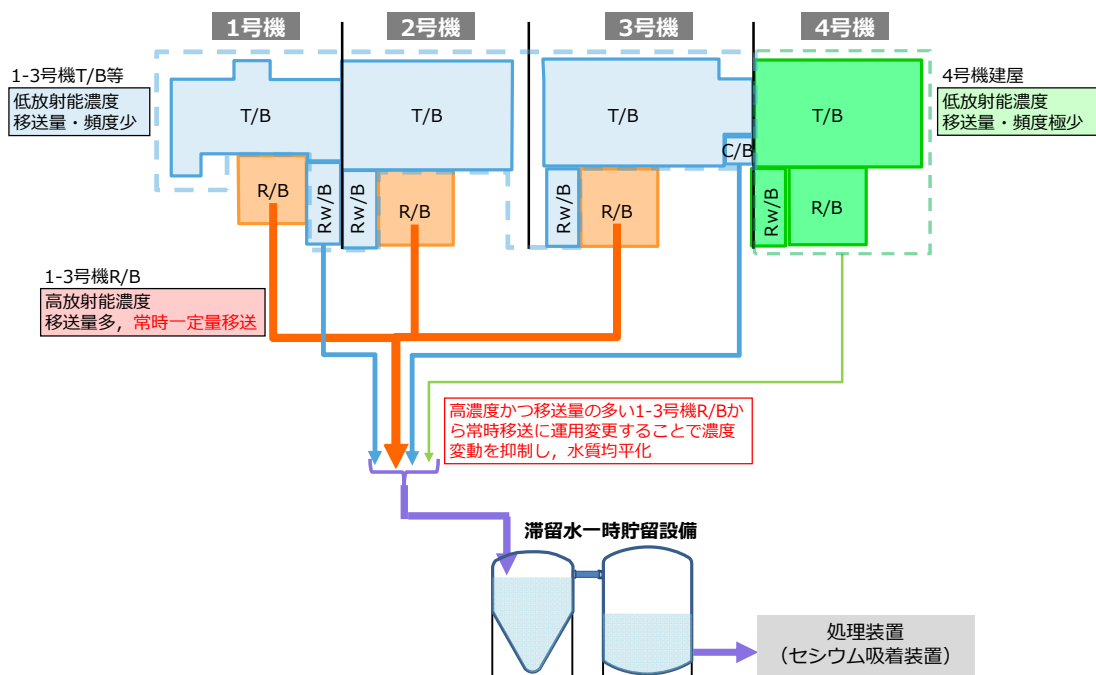


図 2.9.4-3 1-4号機各建屋からの滞留水一時貯留設備への滞留水移送および滞留水一時貯留設備から処理装置での処理までの状況

表 2.9.4-2 滞留水一時貯留設備における運用変更点

号機	建屋	移送方法 【変更前】	移送方法 【変更後】	移送量 [m ³ /日]
1	R/B	都度移送 →	常時移送	90~120程度
	T/B		都度移送	0~15程度
	Rw/B		都度移送	0~5程度
2	R/B		常時移送	50~65程度
	T/B		都度移送	2~10程度
	Rw/B		都度移送	0~5程度
3	R/B		常時移送	90~110程度
	T/B		都度移送	10~35程度
	Rw/B		都度移送	0~10程度
4	R/B	都度移送	0~3程度	
	T/B	都度移送	0~6程度	
	Rw/B	都度移送	0~3程度	

2.10 放射性気体廃棄物の処理・管理への 適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

10. 放射性気体廃棄物の処理・管理

○施設内で発生する放射性気体廃棄物の処理にあたっては，その廃棄物の性状に応じて，当該廃棄物の放出量を抑制し，適切に処理・管理を行うことにより，敷地周辺の線量を達成できる限り低減すること。

2.10.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備から発生する排気等の放射性気体廃棄物の処理にあたっては，その廃棄物の性状に応じて，当該廃棄物の放出量を抑制し，適切に処理・管理を行うことにより，敷地周辺の線量を達成できる限り低減する。

2.10.2 対応方針

○ 廃棄物の性状に応じた適切な処理

滞留水一時貯留設備のタンク上部の気相部については、内部で液位変動による気相部の押し込みや水素掃気に伴い気相部の外部への排気が発生することから、ベントフィルタを設ける。排気中に含まれる粒子状の放射性物質は、フィルタを通すことにより、放射性物質を十分低い濃度になるまで除去した後、建屋内に放出する。

○ 廃棄物の放出量の抑制

滞留水一時貯留設備から発生する排気等の放射性気体廃棄物等については、可能な限り排気の発生量を低減する設計とすることにより、建屋外への放出を防止する。

○ 敷地周辺の線量を達成できる限り低減

上記を実施し、継続的に改善することにより、放射性気体廃棄物からの敷地周辺の線量を達成できる限り低減する。

(実施計画：II-1-10-1)

滞留水一時貯留設備に設けるベントフィルタの概要については、別紙－1 参照

以上

ベントフィルタの概要

ベントフィルタはタンク上部気相部の外部への排気が発生することに伴い、気体状の放射性物質を低減することを目的に設置する。ベントフィルタは、HEPAフィルタを用いて粒子を捕集することにより放射性物質を除去する。ベントフィルタ構造のイメージ図は図 2.10.1-1 を参照。

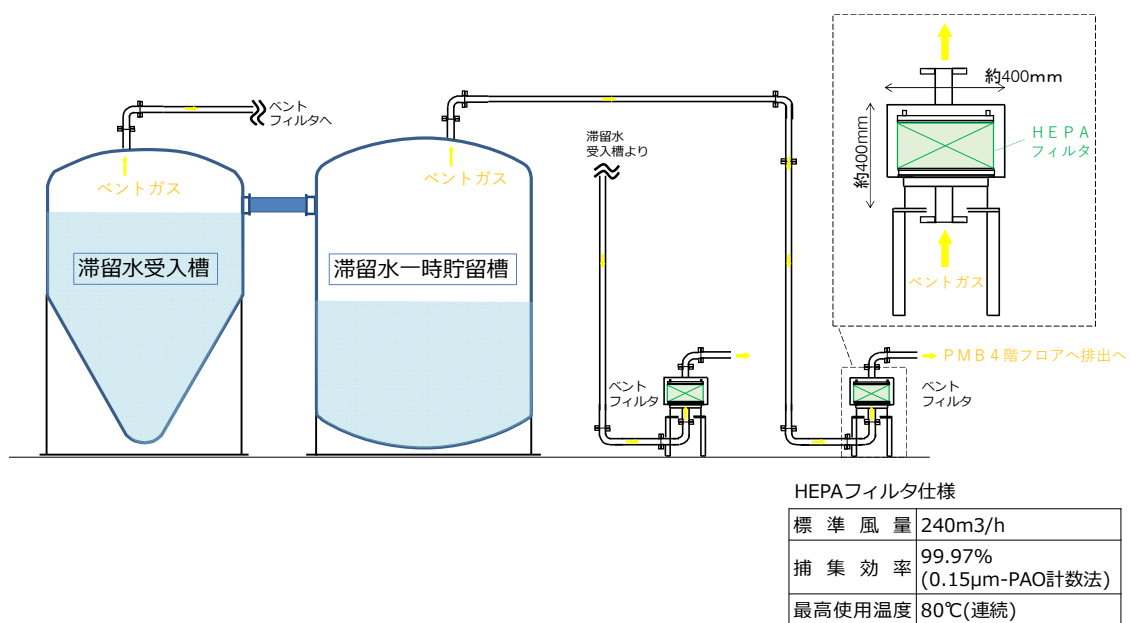


図 2.10.1-1 ベントフィルタ構造のイメージ図

2.11 放射性物質の放出抑制等による敷地 周辺の放射線防護等への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 1. 放射性物質の放出抑制等による敷地周辺の放射線防護等

- 特定原子力施設から大気，海等の環境中へ放出される放射性物質の適切な抑制対策を実施することにより，敷地周辺の線量を達成できる限り低減すること。
- 特に施設内に保管されている発災以降発生した瓦礫や汚染水等による敷地境界における実効線量（施設全体からの放射性物質の追加的放出を含む実効線量の評価値）を，平成25年3月までに1 mSv/年未満とすること。

2.11.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備は，特定原子力施設から大気，海等の環境中へ放出される放射性物質の適切な抑制対策を実施することにより，敷地周辺の線量を達成できる限り低減する。特に施設内に保管されている発災以降発生した瓦礫や汚染水等による敷地境界における実効線量（施設全体からの放射性物質の追加的放出を含む実効線量の評価値）を，1 mSv/年未満とする設計とする。

2.11.2 対応方針

- 平成 25 年 3 月までに、追加的に放出される放射性物質及び事故後に発生した放射性廃棄物からの放射線による敷地境界における実効線量を 1mSv/年未満とするため、下記の線量低減の基本的考え方にに基づき、遮へい等の対策を実施する。

また、線量低減の基本的考え方にに基づき、遮へい等の対策を実施することにより、敷地周辺の線量を達成できる限り低減する。

敷地境界における線量評価は、プラントの安定性を確認するひとつの指標として、放射性物質の放出抑制に係る処理設備設計の妥当性確認の観点と、施設配置及び遮蔽設計の妥当性確認の観点から施設からの放射線に起因する実効線量の評価を行うものとする。

線量低減の基本的考え方

- ・ 設備に対し、追加の遮へい対策を施す、もしくは、遮へい機能を有した施設内に廃棄物を移動する等により、敷地境界での放射線量低減を図っていく。

(実施計画：II-1-11-1)

○ 線量評価

滞留水一時貯留設備は、高濃度放射性物質を内包する滞留水を取り扱う設備であることから影響評価を実施する。当該設備では、滞留水の受入、一時貯留、払出を行うことから、貯留容量に変動はあるが、保守的に満水状態での評価とする。滞留水の分析結果を基に核種は Cs-134、Cs-137 及び Sr-90、表 2.11.1 の放射能濃度が内包しているとし、制動エックス線を考慮したガンマ線線源強度を核種生成減衰計算コード ORIGEN により求め、3次元モンテカルロ計算コード MCNP により敷地境界評価点における直接線・スカイシャイン線の寄与を評価した。

評価の結果、敷地内各施設からの直接線及びスカイシャイン線による敷地境界の線量は、最寄り敷地境界評価点 No.7 では約 0.0001mSv/年未満 (約 0.00005mSv/年)、最大実効線量評価点 No.71 では約 0.0001mSv/年未満 (約 0.000002 mSv/年)であることを確認した。

評価条件は滞留水の分析結果に基づいて放射能濃度を設定する（表 2.11.1）。

表 2.11.1 滞留水一時貯留の放射能濃度と放射能物質質量

核種	放射能濃度 (Bq/L)	量 (m ³)	放射性物質質量 (Bq)
Cs-137 (Ba-137m)	1.3E+08	39	5.07E+12
Cs-134	6.6E+06		2.57E+11
Sr-90 (Y-90)	3.0E+07		1.17E+12

滞留水一時貯留設備の敷地境界線量影響評価に関する評価条件については、別紙-1 参照

以上

滞留水一時貯留設備の敷地境界線量影響評価に関する評価条件について

滞留水一時貯留設備の敷地境界線量に対する影響評価に関する評価条件は以下の通り。

○モデル化条件

・プロセス主建屋（PMB）

建屋床面は4階（床面高さ：約 T.P.24.5m）のみ，建屋側壁は最外周壁面を地面（地面高さ：約 T.P.8.6m）から屋上面（高さ：約 T.P.35m）までモデル化。

・滞留水一時貯留設備

滞留水受入槽，滞留水一時貯留槽の容器※，遮へい体をモデル化し，機器配置箇所であるPMB 4階に配置。遮へい体のモデル化にあたり，遮へい体周囲の建屋の柱をモデル化。

※金具等の細かい部品や形状までは再現しない

・地形

地面はモデル化するが，法面はモデル化しない。

○内包水の放射能濃度条件

1－4号機各建屋から濃度の異なる滞留水が移送されるため，1－4号機の建屋内滞留水のうち，保守的となるよう放射能濃度の高い1～3号機原子炉建屋の滞留水の平均放射能濃度を採用し，その濃度を2倍にすることで値に保守性を持たせている。

なお、以下の手順で放射能濃度条件を算出している。

1～3号機原子炉建屋の滞留水の2020年度水質分析データより、建屋毎に各核種の平均放射能濃度を算出し、その平均放射能濃度に1～3号機の各原子炉建屋の滞留水発生量をそれぞれ掛け合わせて、1～3号機原子炉建屋滞留水の総発生量で割ることで1～3号機原子炉建屋の平均値を算出。算出した値を保守的に2倍にし、放射能濃度条件に用いる。

表 2.11.1-1 1～3号機原子炉建屋滞留水

建屋	核種毎の平均放射能濃度 (Bq/L)			滞留水発生量 (m3/日)
	Cs-137	Cs-134	Sr-90	
1号機原子炉建屋	2.1E+07	9.0E+05	6.7E+06	76.8
2号機原子炉建屋	1.4E+08	7.5E+06	2.6E+07	96
3号機原子炉建屋	9.8E+06	4.6E+05	8.7E+06	76.8
1～3号機原子炉建屋平均	6.3E+07	3.3E+06	1.5E+07	249.6

なお、建屋滞留水の水質分析に係るサンプリング位置は、建屋毎に独立した滞留水の性状を把握できるよう、1～4号機各建屋に設置している滞留水移送ポンプ出口部において実施しており、建屋毎の分析データを考慮したうえで、上記の通り放射能濃度条件を設定している。

現状の建屋滞留水の放射能濃度は、Cs-134、Cs-137、Sr-90の3核種の濃度が高く、支配的である。敷地境界評価に影響を与えることが想定されるその他の核種は検出下限値未満であり、3核種に比べて濃度が低い。以上のことから、Cs-134、Cs-137、Sr-90の3核種を用いた評価に代表性があると考えている。なお、H-3についてはβ核種かつ線源としてのエネルギーが小さく、線量評価において有意に影響を与えないことから、評価対象としていない。(現状の建屋滞留水の放射能濃度を参照するデータは、表 2.11.1-2 PMB, HTI の建屋滞留水の分析結果を参照)

表 2.11.1-2 PMB, HTI の建屋滞留水の分析結果

建屋	試料採取日	放射能濃度[Bq/L]							
		Cs-134	Cs-137	Sr-90	Co-60	Sb-125	Ru-106	H-3	全α
PMB	2023/12/5	2.33E+05	1.35E+07	8.54E+06	<4.42E+03	<9.23E+04	<1.44E+05	2.36E+05	3.95E+00
HTI	2023/12/5	2.88E+05	1.57E+07	8.13E+06	<3.39E+03	<9.87E+04	<1.60E+05	2.63E+05	6.08E+01

「<」は検出下限値未満を示す。

以上

2.12 作業者の被ばく線量の管理等への 適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 2. 作業者の被ばく線量の管理等

○現存被ばく状況での放射線業務従事者の作業性等を考慮して，遮へい，機器の配置，遠隔操作，放射性物質の漏えい防止，換気，除染等，所要の放射線防護上の措置及び作業時における放射線被ばく管理措置を講じることにより，放射線業務従事者が立ち入る場所の線量及び作業に伴う被ばく線量を，達成できる限り低減すること。

2.12.1 措置を講ずべき事項への適合方針

作業者の被ばく管理等において，現存被ばく状況での放射線業務従事者の作業性等を考慮して，遮へい機器の配置，遠隔操作，放射性物質の漏えい防止，換気，除染等，所要の放射線防護上の措置及び作業時における放射線被ばく管理措置を講じることにより，放射線業務従事者が立ち入る場所の線量及び作業に伴う被ばく線量を，達成できる限り低減する。

なお，滞留水一時貯留設備の設置工事では，プロセス主建屋内で工事が行われるが，何れのエリアにおいても，外部放射線に係わる線量率は低減されており，放射線業務従事者が過度に被ばくする恐れはない。また，建屋内はイエローゾーンに設定されており，作業時には適切な放射線被ばく管理措置を講じる。

2.12.2 対応方針

(1) 作業者の被ばく線量管理等

○ 現存被ばく状況における放射線防護の基本的な考え方

現存被ばく状況において放射線防護方策を計画する場合には、害よりも便益を大きくするという正当化の原則を満足するとともに、当該方策の実施によって達成される被ばく線量の低減について、達成できる限り低く保つという最適化を図る。

○ 所要の放射線防護上の措置及び作業時における放射線被ばく管理措置の範囲

「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則」に基づいて定めた管理区域及び周辺監視区域に加え、周辺監視区域と同一な区域を管理対象区域として設定し、放射線業務に限らず業務上管理対象区域内に立ち入る作業者を放射線業務従事者として現存被ばく状況での放射線防護を行う。

○ 遮へい、機器の配置、遠隔操作、換気、除染等

放射線業務従事者が立ち入る場所では、外部放射線に係わる線量率を把握し、放射線業務従事者等の立ち入り頻度、滞在時間等を考慮した遮へいの設置や換気、除染等を実施するようにする。なお、線量率が高い区域に設備を設置する場合は、遠隔操作可能な設備を設置するようにする。

○ 放射性物質の漏えい防止

放射性物質濃度が高い液体及び蒸気を内包する系統は、可能な限り系外に漏えいし難い対策を講じる。また、万一生じた漏えいを早期に発見し、汚染の拡大を防止する場合は、機器を独立した区域内に配置する対策や、周辺に堰を設ける等の対策を講じる。

○ 放射線被ばく管理

上記の放射線防護上の措置及び作業時における放射線被ばく管理措置を講じることにより、作業時における放射線業務従事者が受ける線量が労働安全衛生法及びその関連法令に定められた線量限度を超えないようにするとともに、現存被ばく状況で実施可能な遮へい、機器の配置、遠隔操作を行うことで、放射線業務従事者が立ち入る場所の線量及び作業に伴う被ばく線量を、達成できる限り低減するようにする。

さらに、放射線防護上の措置及び作業時における放射線被ばく管理措置について、長期にわたり継続的に改善することにより、放射線業務従事者が立ち入る場所における線量を低減し、計画被ばく状況への移行を目指すこととする。

(実施計画：II-1-12-1)

滞留水一時貯留設備設置における被ばく線量管理に関する補足説明については、別紙-1参照。

(2) 放射線管理に係る補足説明

① 放射線防護及び管理

a. 放射線管理

(a) 基本方針

- 現存被ばく状況において、放射線被ばくを合理的に達成できる限り低減する方針で、今後、新たに設備を設置する場合には、遮へい設備、換気空調設備、放射線管理設備及び放射性廃棄物廃棄施設を設計し、運用する。また、事故後、設置した設備においても、放射線被ばくを合理的に達成できる限り低減する方針で、必要な設備の改良を図る。
- 放射線被ばくを合理的に達成できる限り低くするために、周辺監視区域全体を管理対象区域として設定して、立ち入り制限を行い、外部放射線に係る線量、空気中もしくは水中の放射性物質の濃度及び床等の表面の放射性物質の密度を監視して、その結果を管理対象区域内の諸管理に反映するとともに必要な情報を免震重要棟や出入管理箇所等で確認できるようにし、作業環境の整備に努める。
- 放射線業務に限らず業務上管理対象区域に立ち入る作業者を放射線業務従事者とし、被ばく歴を把握し、常に線量を測定評価し、線量の低減に努める。また、放射線業務従事者を除く者であって、放射線業務従事者の随行により管理対象区域に立ち入る者等を一時立入者とする。
さらに、各個人については、定期的に健康診断を行って常に身体的状態を把握する。
- 周辺監視区域を設定して、この区域内に人の居住を禁止し、境界に柵または標識を設ける等の方法によって人の立ち入り制限をする。
- 原子炉施設の保全のために、管理区域を除く場所であって特に管理を必要とする区域を保全区域に設定して、立ち入り制限等を行う。
- 核燃料物質によって汚染された物の運搬にあたっては、放射線業務従事者の防護及び発電所敷地外への汚染拡大抑制に努める。

(実施計画：Ⅲ -3-3-1-2-2)

(b) 発電所における放射線管理

a. 管理対象区域内の管理

管理対象区域については、次の措置を講じる。

- 管理対象区域は当面の間、周辺監視区域と同一にすることにより、さく等の区画物によって区画するほか周辺監視区域と同一の標識等を設けることによって明らかに他の場所と区別し、かつ、放射線等の危険性の程度に応じて、人の立ち入り制限等を行う。
管理対象区域内の線量測定結果を放射線業務従事者の見やすい場所に掲示する等の方法によって、管理対象区域に立ち入る放射線業務従事者に放射線レベルの高い場所や放射線レベルが確認されていない場所を周知する。特に放射線レベルが高い場所においては、必要に応じてロープ等により人の立ち入り制限を行う。
- 放射性物質を経口摂取するおそれのある場所での飲食及び喫煙を禁止する。ただし、飲食及び喫煙を可能とするために、放射性物質によって汚染された物の表面の放射性物質の密度及び空気中の放射性物質濃度が、法令に定める管理区域に係る値を超えるおそれのない区域を設ける。なお、設定後は、定期的な測定を行い、この区域内において、法令に定める管理区域に係る値を超えるような予期しない汚染を床又は壁等に発見した場合等、汚染拡大防止のための放射線防護上必要な措置等を行うことにより、放射性物質の経口摂取を防止する。
- 管理対象区域全体にわたって放射線のレベル及び作業内容に応じた保護衣類や放射線防護具類を着用させる。
- 管理対象区域から人が退去し、又は物品を持ち出そうとする場合には、その者の身体及び衣服、履物等身体に着用している物並びにその持ち出そうとする物品（その物品を容器に入れ又は包装した場合には、その容器又は包装）の表面の放射性物質の密度についてスクリーニングレベルを超えないようにする。管理対象区域内において汚染された物の放射性物質の密度及び空気中の放射性物質濃度が法令に定める管理区域に係る値を超えるおそれのない区域に人が立ち入り、又は物品を持ち込もうとする場合は、その者の身体及び衣服、履物等身体に着用している物並びにその持ち出そうとする物品（その物品を容器に入れ又は包装した場合には、その容器又は包装）の表面の放射性物質の密度について表面汚染測定等により測定場所のバックグラウンド値を超えないようにする。
- 管理対象区域内においては、除染や遮へい、換気を実施することにより外部線量に係る線量、空気中放射性物質の濃度、及び放射性物質によって汚染された物の表面の放射性物質密度について、管理区域に係る値を超えるおそれのない場合は、人の出入管理及び物品の出入管理に必要な措置を講じた上で、管理対象区域として扱わないこととする。

(実施計画：III-3-3-1-2-3~4)

滞留水一時貯留設備設置における被ばく線量管理に関する補足説明

滞留水一時貯留設備においては、主に設置工事時、通常運用時、メンテナンス時に設備設置エリアにおける被ばく線量管理に関する考慮が必要になると想定しており、それぞれの場合における考慮は以下の通り。

・設置工事時

滞留水一時貯留設備の設置工事では、プロセス主建屋内で工事が行われるが、何れのエリアにおいても、外部放射線に係わる線量率は低減されていること、既設設備の改造部分を除き、機器据付、配管敷設等であり、滞留水を取り扱う作業ではないことから、放射線業務従事者が過度に被ばくする恐れはない（図 2.12.1-1～2 参照）。また、それぞれの作業の放射線被ばくのリスクに応じて作業エリアの区域区分を表 2.12.1-1 のように設定して、それぞれの作業時には適切な放射線被ばく管理措置を講じる。

・通常運用時

監視・操作は免震重要棟にて遠隔で実施することを基本としており、設備設置エリアでの定常的な作業はない。定常以外では、手動弁の操作時において設備設置エリアでの作業が想定されるが、弁開閉作業のみであることから、短時間での作業が可能であり、放射線業務従事者が過度に被ばくする恐れはない。

・メンテナンス時

滞留水受入槽、滞留水一時貯留槽には、容器内部に洗浄水配管を設置することで内部のフラッシングが可能な構造としており、その他機器類はろ過水によるフラッシング等により、メンテナンス作業時の被ばくの低減を考慮した設計としている。設備の近傍で作業することになるが、事前にフラッシング等を実施することで放射線業務従事者が過度に被ばくする恐れはない。（**フラッシングに関するフロー図は図 2.12.1-4 参照**）

運転中の滞留水一時貯留設備の設置エリアのうち、プロセス主建屋 4 階の設備設置エリアは、設備運用時に数 mSv/h の雰囲気線量当量率になることが想定されることから、遮へいを設け、遮へい体表面での線量を 1.0mSv/h 以下とし、作業員の被ばく線量の低減を行う。また、その他のエリアについても必要に応じて適切な遮へいを設けることにより、作業員の被ばく線量の低減を行う。プロセス主建屋 4 階の遮へいの設置イメージは図 2.12.1-3 参照。

福島第一 原子力発電所	図面名称: 集中環境施設 プロセス主建屋 4階	[単位: mSv/h]
-------------	-------------------------	---------------

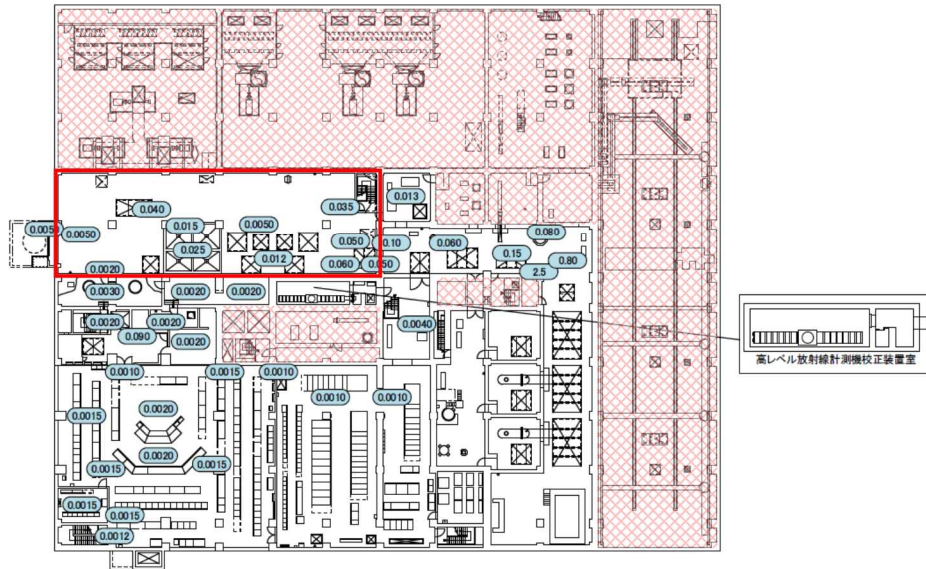


図 2.12.1-1 滞留水一時貯留設備設置の設置工事の作業エリアの外部放射線に係わる線量率（プロセス主建屋 4階 2022 年 8 月）

福島第一 原子力発電所	図面名称: 集中環境施設 プロセス主建屋 2階	[単位: mSv/h]
-------------	-------------------------	---------------

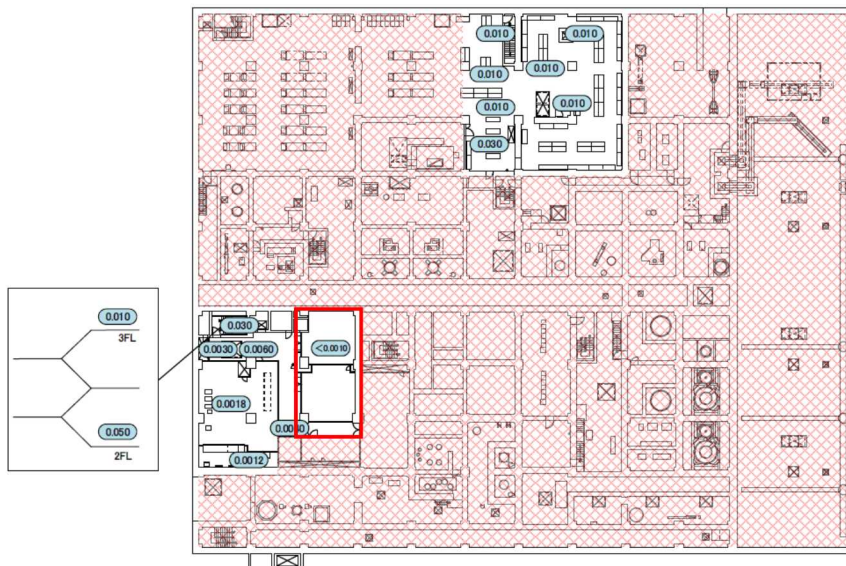


図 2.12.1-2 滞留水一時貯留設備設置の設置工事の作業エリアの外部放射線に係わる線量率（プロセス主建屋 2階 2022 年 8 月）

表 2.12.1-1 滞留水一時貯留設備設置の作業分類ごとの具体的な作業

分類	区分区分	具体的な作業
滞留水を直接扱う設備の設置作業	Yゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・機器の設置 (滞留水受入槽, 滞留水一時貯留槽・滞留水供給ポンプ・スラッジ排出ポンプ・配管等)

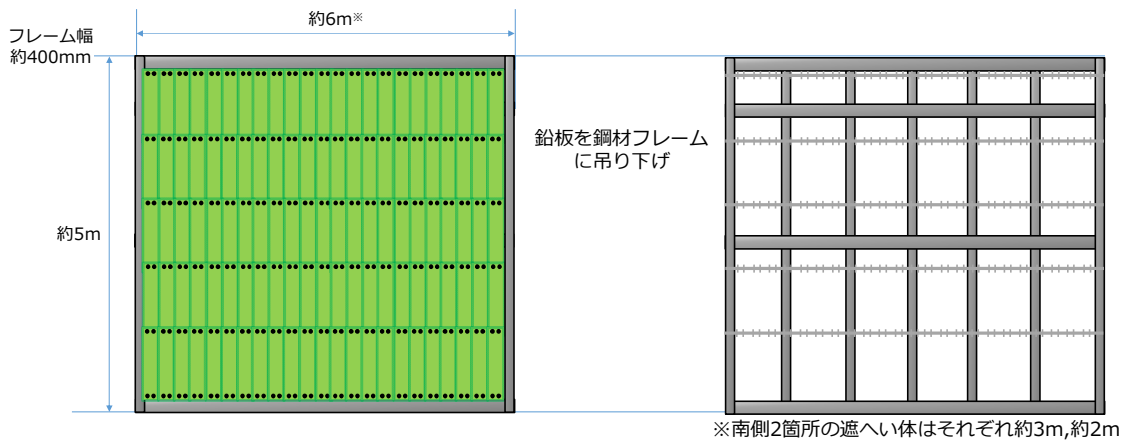
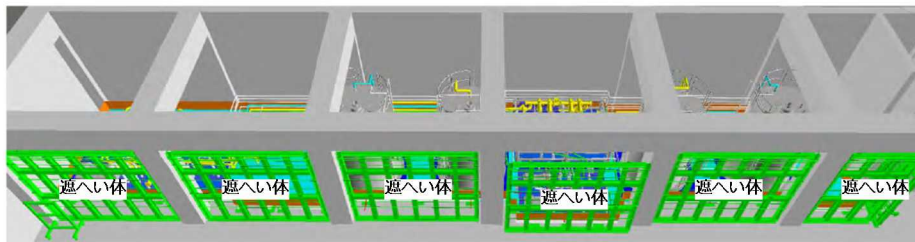
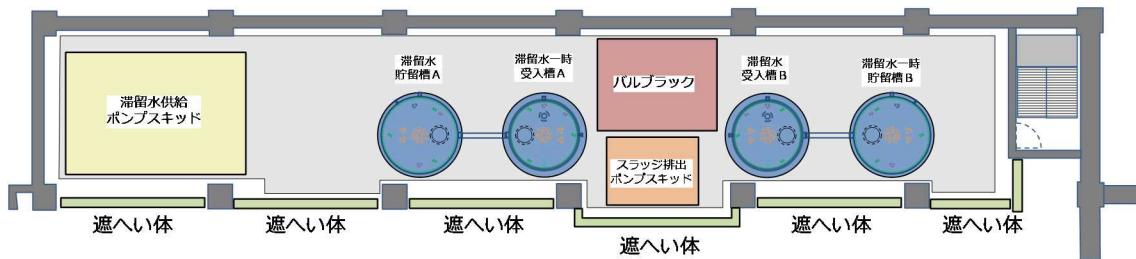


図 2.12.1-3 プロセス主建屋 4階の遮へいの設置イメージ

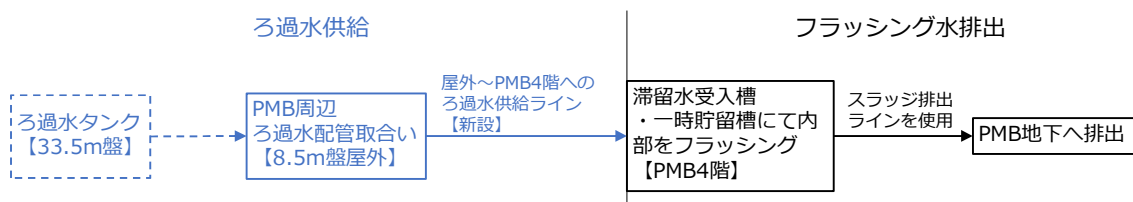


図 2.12.1-4 フラッシングに関するフロー図

2.13 緊急時対策への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 3. 緊急時対策

- 緊急時対策所，安全避難経路等事故時において必要な施設及び緊急時の資機材等を整備すること。
- 適切な警報系及び通信連絡設備を備え，事故時に特定原子力施設内に居るすべての人に対する確に指示ができるとともに，特定原子力施設と所外必要箇所との通信連絡設備は，多重性及び多様性を備えること。

2.13.1 措置を講ずべき事項への適合方針

(1) 緊急時において必要な施設及び資機材等の整備について

緊急時において必要な施設及び安全避難経路等事故等において必要な施設及び緊急時の資機材等の整備を行う。

(2) 緊急時の避難指示について

緊急時の特定原子力施設内に居るすべての人に対し避難指示を実施できるようにする。
なお，滞留水一時貯留設備においても，緊急放送等により施設内への周知が可能となっている。

(3) 所外必要箇所との通信連絡設備の多重性及び多様性について

特定原子力施設と所外必要箇所との通信連絡設備は，多重性及び多様性を備える。

2.13.2 対応方針

(1) 緊急時において必要な施設及び資機材等の整備について

原子力防災管理者は、緊急時において必要な施設及び緊急時の資機材等の整備について防災業務計画に従い以下の対応を実施する。

- ・ 緊急時対策所を平素から使用可能な状態に整備するとともに、換気浄化設備を定期的に点検し、地震等の自然災害が発生した場合においてもその機能が維持できる施設及び設備とする。また、外部電源喪失時においても専用の非常用発電機により緊急時対策所へ給電可能である。
- ・ 退避場所又は避難集合場所を関係者に周知する。
- ・ 瓦礫撤去用の重機及び操作要員を準備し、瓦礫が発生した場合の撤去対応が可能である。
- ・ 原子力防災資機材及びその他の原子力防災資機材について、定期的に保守点検を行い、平素から使用可能な状態に整備する。また、資機材に不具合が認められた場合、速やかに修理するか、代替品を補充あるいは代替手段により必要数量又は必要な機能を確保する。

施設内の安全避難経路については防災業務計画に明示されていないが、誘導灯により安全避難経路を示すことを基本としている。しかしながら、一部対応できていない事項があるため、それらについては以下のとおり対応する。

- ・ 震災の影響により使用できない誘導灯（1～4号機建屋内）
作業にあたっては、緊急時の避難を考慮した安全避難経路を定め、この経路で退出することとする。また、使用するエリアの誘導灯の復旧を進め、適切な状態に維持する。
- ・ 震災の影響により使用できない非常灯（1～4号機建屋内）
施設を使用するエリアの非常灯の復旧を進め、適切な状態に維持する。

(実施計画：II-1-13-1)

(2) 緊急時の避難指示について

○ 緊急時の避難指示

緊急時の避難指示については、防災業務計画では緊急放送等により施設内に周知することとなっているが、緊急放送等が聞こえないエリアが存在することを考慮し、以下の対応を実施することで、作業員等特定原子力施設内にいるすべての人に的確な指示を出す。

- ① 免震重要棟にて放射性物質の異常放出等のプラントの異常や地震・津波等の自然災害を検知。
- ② 原子力防災管理者は緊急放送装置により免震重要棟・高台等への避難を指示。
- ③ 緊急放送が聞こえないエリアで作業を実施している場合は、作業主管Gより携帯電話にて免震重要棟・高台等への避難を指示。
- ④ 緊急放送が聞こえないエリアでの作業者に対して上記③により連絡が付かない場合は、警備誘導班がスピーカー車により免震重要棟・高台等への避難を指示。

※ 建屋内等電波状況が悪く緊急放送等も入らないエリアにおいては、緊急放送が入るエリアに連絡要員を配置する、トランシーバ等による通信が可能な位置に連絡要員を配置する等通報連絡が可能となるような措置を実施する。

○ 通報、情報収集及び提供

緊急事態の発生及び応急措置の状況等の関係機関への通報連絡、事故状況の情報収集による応急復旧の実施のため、特定原子力施設内及び特定原子力施設と所外必要箇所との通信連絡設備として防災業務計画に定める以下を準備することで、多重性及び多様性を備える。

a. 特定原子力施設内の通信連絡設備

- ・ 緊急放送（1台）
- ・ ページング
- ・ 電力保安通信用電話設備（60台）
- ・ 携帯電話（40台）

※緊急放送・ページングについては、聞こえないエリア・使用できない場所があるが、場所を移動しての連絡や電力保安通信用電話設備・携帯電話の使用、その他トランシーバの使用等により対応する。

※電力保安通信用電話設備、携帯電話については防災業務計画に定める数量を示しているが、緊急時対応として必要により、防災業務計画に定める数量を超える通信連絡設備を使用する場合もある。

(実施計画：II-1-13-1~2)

滞留水一時貯留設備に関する緊急時対策に関する補足説明については、別紙ー1参照。

(3) 所外必要箇所との通信連絡設備の多重性及び多様性について

○ 通報，情報収集及び提供

緊急事態の発生及び応急措置の状況等の関係機関への通報連絡，事故状況の情報収集による応急復旧の実施のため，特定原子力施設内及び特定原子力施設と所外必要箇所との通信連絡設備として防災業務計画に定める以下を準備することで，多重性及び多様性を備える。

b. 特定原子力施設と所外必要箇所との通信連絡設備

- ・ ファクシミリ装置（1台）
- ・ 電力保安通信用電話設備（60台；上記「特定原子力施設内の通信連絡設備」の再掲）
- ・ TV会議システム（1台），IP電話（5台），IPFAX（3台）
- ・ 携帯電話（40台；上記「特定原子力施設内の通信連絡設備」の再掲）
- ・ 衛星携帯電話（1台）

※電力保安通信用電話設備，携帯電話については防災業務計画に定める数量を示しているが，緊急時対応として必要により，防災業務計画に定める数量を超える通信連絡設備を使用する場合もある。

※防災業務計画ではこの他に緊急時用電話回線があるが使用できないため，電気通信事業者の有線電話，携帯電話，衛星携帯電話等の通信手段により通信連絡を行う。

※上記防災業務計画で定めるもの以外として，TV会議システム（社内用）についても通信連絡用に使用する。

○ 外部電源喪失時の通信手段・作業環境確保

外部電源喪失時に緊急時対策を実施するために，防災業務計画に明示されていないが，以下の対応を実施する。

必要箇所との連絡手段確保のため，ページングについては，小型発電機または電源車から，電力保安通信用電話設備については，小型発電機から給電可能とする。また，夜間における復旧作業に緊急性を要する範囲の照明については，小型発電機から給電可能とする。

(実施計画：II-1-13-2~3)

滞留水一時貯留設備に関する緊急時対策に関する補足説明

1. 緊急時の避難指示等について

滞留水一時貯留設備の設置範囲において、「実施計画Ⅱ章 1.13 緊急時対策」の規定に従い、所内の作業員等に対して必要な対応等を指示するために設置されているスピーカーのエリア図を図 2.13.1-1 に示す。

また、緊急放送が聞こえないエリアで作業を実施している場合は、作業主管 G より携帯電話にて免震重要棟・高台等への避難を指示する他、緊急放送が聞こえないエリアでの作業員に対しては、警備誘導班がスピーカー車により免震重要棟・高台等への避難を指示する計画となっている。

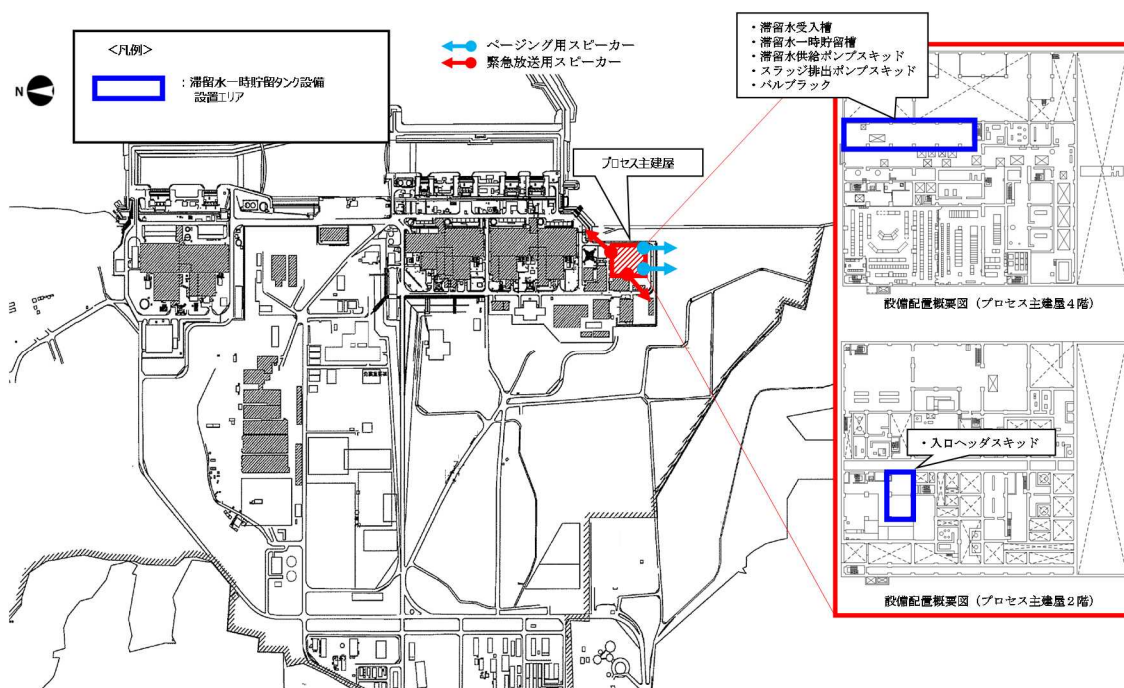


図 2.13.1-1 滞留水一時貯留設備の設置範囲におけるスピーカーのエリア図

滞留水一時貯留設備においては、主に設置工事時、通常運用時、メンテナンス時に設備設置エリアにおける作業員への考慮が必要になると想定しており、それぞれの場合における緊急時の避難指示等の作業員への考慮は以下の通り。

- ・設置工事時

主な設備設置エリアであるプロセス主建屋各階にて作業を実施中であることが想定される。緊急時には設置されているスピーカーにより、作業者等に対して必要な対応等を指示することが可能である。

- ・通常運用時

監視・操作は免震重要棟にて遠隔で実施することを基本としており、設備設置エリアでの定常的な作業はないため、当該設備に関連する作業者等は存在しないと想定されるが、設備設置エリアであるプロセス主建屋に設置されているスピーカーにより、緊急時は作業者等に対して必要な対応等を指示することが可能である

- ・メンテナンス時

設置工事時と同様。

2. 所外必要箇所への通信連絡について

滞留水一時貯留設備において、設計上の想定を超える自然現象等により事故故障等が発生した場合は、設備の状況を連絡するために、既認可の規定に沿って、ファクシミリ装置や電力保安通信用電話設備等を使用して、発電所外の関係箇所に連絡を実施する。

以上

2.14 設計上の考慮

2.14.1 準拠規格及び基準への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 4. 設計上の考慮

○施設の設計については，安全上の重要度を考慮して以下に掲げる事項を適切に考慮されたものであること。

① 準拠規格及び基準

安全機能を有する構築物，系統及び機器は，設計，材料の選定，製作及び検査について，それらが果たすべき安全機能の重要度を考慮して適切と認められる規格及び基準によるものであること。

2.14.1.1 措置を講ずべき事項への適合性

滞留水一時貯留設備は，それらが果たすべき安全機能の重要度を考慮して適切と認められる規格及び基準を考慮して，設計，材料の選定，製作及び検査を実施する。

2.14.1.2 対応方針

施設の設計については、安全上の重要度を考慮して以下について適切に考慮したものと
する。

(1) 準拠規格及び基準

安全機能を有する構築物、系統及び機器は、設計、材料の選定、製作及び検査につい
て、それらが果たすべき安全機能の重要度を考慮して適切と認められる規格及び基準によ
るものとする。

(実施計画：II-1-14-1)

滞留水一時貯留設備を構成する構築物、系統及び機器の設計、材料の選定、製作及び検
査については、発電用原子力設備規格 設計・建設規格 (JSME)、日本産業規格 (JIS)、
日本水道協会規格 (JWWA) 等を適用することにより信頼性を確保する。

(実施計画：II-2-5-添 32-1)

滞留水一時貯留設備を構成する主要な機器は、「発電用原子力設備に関する技術基準を定
める省令」において、廃棄物処理設備に相当すると位置付けられる。これに対する適用規格
は、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」(以下、「設計・建設規格」とい
う。)で規定され、機器区分クラス3の規定を適用することを基本とする。

なお、クラス3機器に該当しないその他の機器は、JIS 等規格適合品を用いることとし、
ポリエチレン管は、JWWA または ISO 規格に準拠する。

また、JSME 規格で規定される材料の日本産業規格の (JIS) の年度指定は、技術的妥当性の
範囲において材料調達性の観点から考慮しない場合もある。原子力発電所での使用実績が
ない材料を使用する場合は、他産業での使用実績等を活用しつつ、必要に応じて試験等を行
うことで、経年劣化等の影響についての評価を行う。

具体的な規格および基準は以下のとおり。

- ・ JIS G 3101 一般構造用圧延鋼材
- ・ JIS G 3106 溶接構造用圧延鋼材
- ・ JIS G 3193 熱間圧延鋼板及び鋼帯の形状、寸法、質量及びその許容差
- ・ JIS G 3454 圧力配管用炭素鋼鋼管
- ・ JIS G 4303 ステンレス鋼棒
- ・ JIS G 5121 ステンレス鋼鋳鋼品
- ・ JIS B 1178 基礎ボルト
- ・ JIS B 2220 鋼製管フランジ
- ・ JIS B 8265 圧力容器の構造 一般事項
- ・ JIS B 8301 遠心ポンプ、斜流ポンプ及び軸流ポンプー試験方法

- ・ JIS B 8302 ポンプ吐出し量測定方法
- ・ JIS B 8310 ポンプの騒音レベル測定方法
- ・ JIS C 4213 低圧三相かご形誘導電動機—低圧トップランナーモータ
- ・ JIS Z 3801 手溶接技術検定における試験方法及び判定基準
- ・ JIS Z 3841 半自動溶接技術検定における試験方法及び判定基準
- ・ JEC-2110 誘導機
- ・ JWWA K 144 水道配水用ポリエチレン管
- ・ JIS K6331 送水用ゴムホース（ウォーターホース）

(実施計画：II-2-5-添32別1-3)

(2) 滞留水一時貯留設備の構造強度評価

滞留水一時貯留設備を構成する構築物，系統及び機器は，「実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則」において，廃棄物処理設備等に相当するものと位置づけられることから，その設計，材料の選定，製作及び検査において，それらが果たすべき安全機能の重要度を考慮して，建屋滞留水を内包する容器及び鋼管については，発電用原子力設備規格 設計・建設規格（JSME S NC1）のクラス3機器の規定を適用して評価を行う。

ポリエチレン管はISO規格またはJWWA規格に準拠したものを，適用範囲内で使用することで，構造強度を有すると評価する。また，耐圧ホースについては，製造者仕様範囲内の圧力及び温度で使用することで構造強度を有すると評価する。なお，滞留水一時貯留設備におけるポリエチレン管，耐圧ホースの環境条件（最高使用温度・最高使用圧力）は以下のとおりであり，当該条件を満足する管を選定する。

滞留水一時貯留設備の系統・機器の概要については，別紙－1，滞留水一時貯留設備の構造強度評価については，別紙－2，滞留水一時貯留設備の耐震重要度と機器クラスについては，別紙－3参照。

また，ポリエチレン管，耐圧ホース等の設計・建設規格に記載のない非金属材料の信頼性確保については，参考資料参照。

滞留水一時貯留設備の系統・機器の概要

滞留水一時貯留設備における系統概略を「1.系統概略」に示す。また主要機器の機器概略を「2. 主要機器概略」に示す。

1. 系統概略

2.14.1.1-2

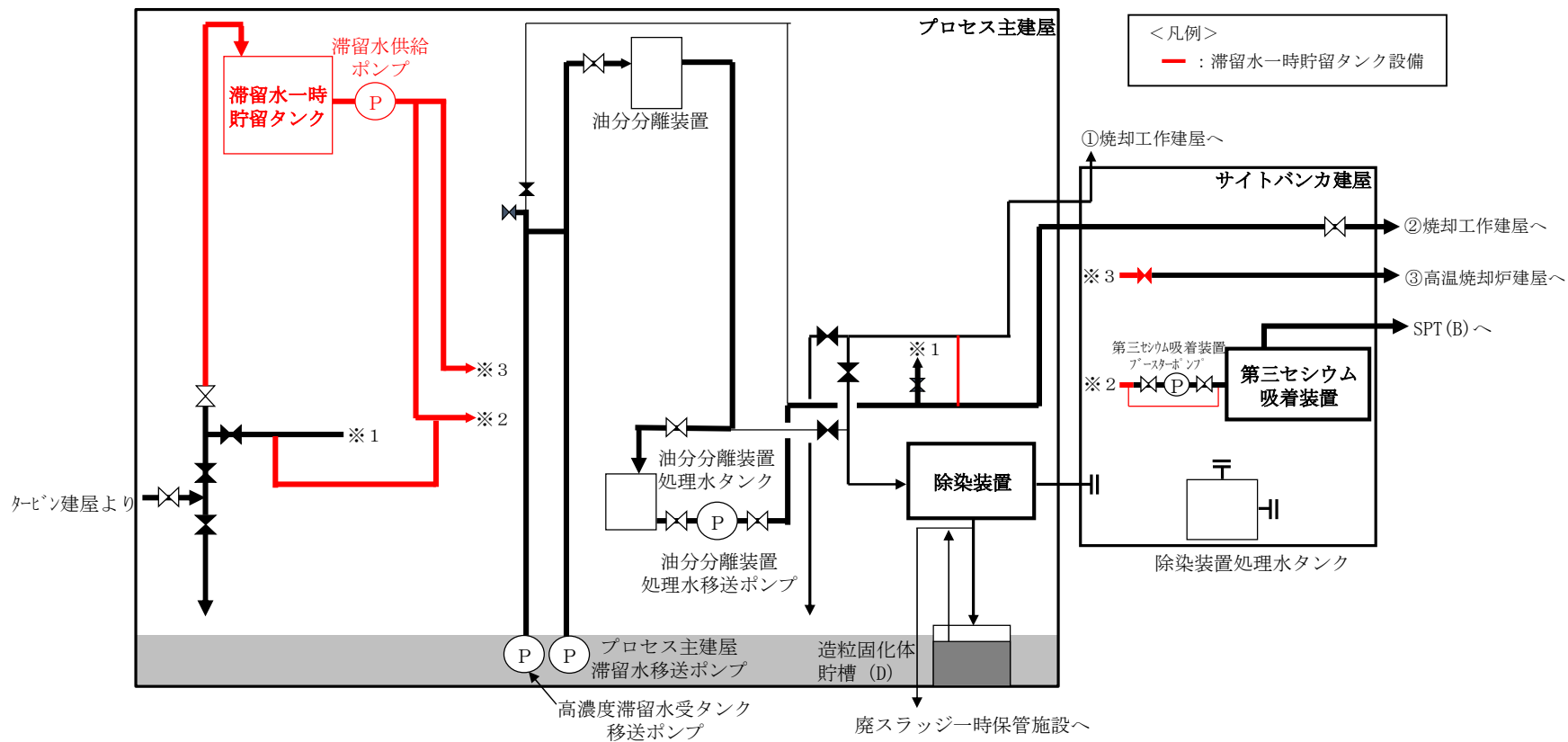


図 2.14.1-1 滞留水一時貯留設備の全体概要図 (1 / 3)

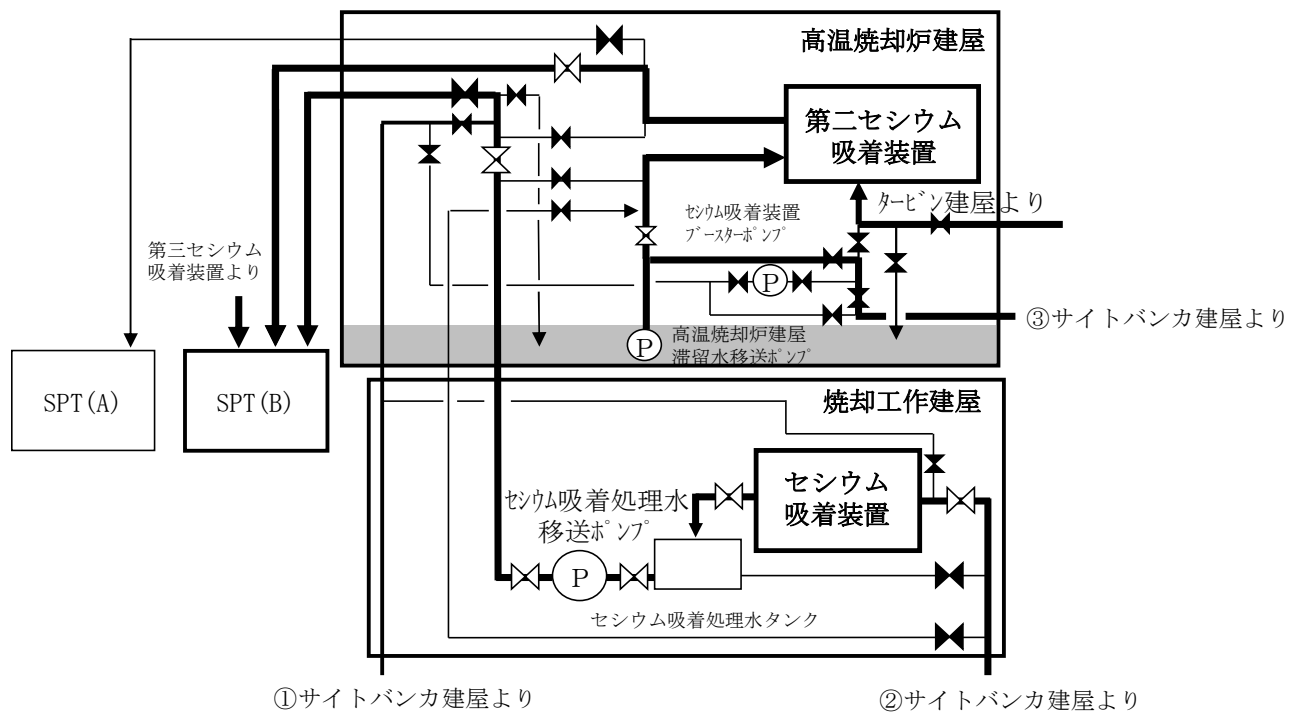


図 2.14.1-1 滞留水一時貯留設備の全体概要図 (2 / 3)

2.14.1.1-4

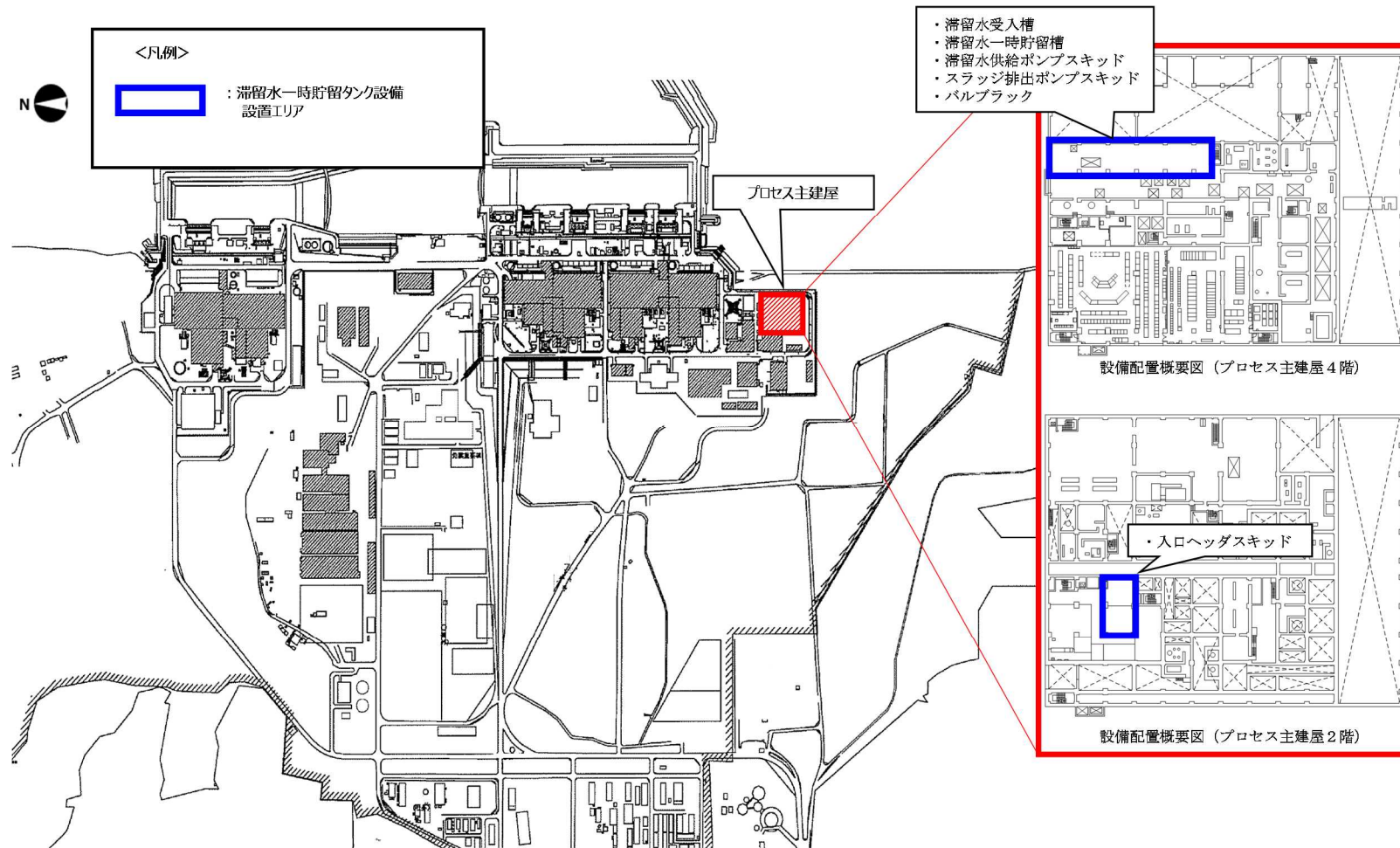


図 2.14.1-1 滞留水一時貯留設備の全体概要図（3 / 3）

2. 主要機器概略

2.1 滞留水一時貯留設備の主要仕様

(1) 滞留水一時貯留タンク

a. 滞留水受入槽

名称		滞留水受入槽	
種類		たて置円筒形	
容量	m ³ /基	15	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴内径	mm	2800
	胴板厚さ	mm	12
	円錐鏡板厚さ	mm	12
	高さ	mm	4293
材料	胴板	-	SM400B (内面ゴムライニング)
	円錐鏡板	-	SM400B (内面ゴムライニング)
基数		基	2

b. 滞留水一時貯留槽

名称		滞留水一時貯留槽	
種類		たて置円筒形	
容量	m ³ /基	24	
最高使用圧力	MPa	静水頭	
最高使用温度	℃	40	
主要寸法	胴内径	mm	3100
	胴板厚さ	mm	12
	鏡板厚さ	mm	12
	高さ	mm	4406
材料	胴板	-	SM400B (内面ゴムライニング)
	鏡板	-	SM400B (内面ゴムライニング)
基数		基	2

(2) ポンプ

a. 滞留水供給ポンプ (完成品)

台 数	2 台
容 量	30 m ³ /h

b. スラッジ排出ポンプ (完成品)

台 数	2 台
容 量	15 m ³ /h

(3) 主配管

主要配管仕様 (1 / 4)

名称	仕様	
プロセス主建屋切替弁スキッド出口 から入口ヘッドスキッド入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
入口ヘッドスキッド入口から 入口ヘッドスキッド出口まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch.40, 150A/ Sch.40 STPG370 1.0MPa 40℃
	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch.40 STPG370 1.37MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
入口ヘッドスキッド出口から 滞留水受入槽まで (鋼管)	呼び径／厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch.40 STPG370 1.0MPa 40℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
滞留水受入槽から 滞留水一時貯留槽まで (耐圧ホース)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	200A 相当 EPDM 合成ゴム 静水頭 40℃

主要配管仕様（2 / 4）

名称	仕様	
滞留水一時貯留槽から 滞留水供給ポンプ入口まで （鋼管） （ポリエチレン管）	呼び径／厚さ	100A/Sch.40
	材質	STPG370
	最高使用圧力 最高使用温度	静水頭 40℃
（ポリエチレン管）	呼び径／厚さ	100A/Sch.40 , 125A/Sch.40 , 150A/ Sch.40
	材質	STPG370
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37MPa 40℃
滞留水供給ポンプスキッド出口から 滞留水供給ポンプスキッド出口まで （鋼管）	呼び径／厚さ	80A/Sch.40, 100A/Sch.40, 150A/ Sch.40
	材質	STPG370
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37MPa 40℃
滞留水供給ポンプスキッド出口から 入口ヘッドスキッド入口まで （ポリエチレン管）	呼び径	100A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37MPa 40℃
滞留水供給ポンプスキッド出口から 滞留水一時貯留槽まで （鋼管） （ポリエチレン管）	呼び径／厚さ	80A/Sch.40
	材質	STPG370
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37MPa 40℃
（ポリエチレン管）	呼び径	25A 相当, 50A 相当, 80A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力 最高使用温度	1.37MPa 40℃

主要配管仕様 (3 / 4)

名称	仕様	
入口ヘッドスキッド出口から 第三セシウム吸着装置入口まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.37MPa 40℃
プロセス主建屋切替弁スキッド近傍 配管分岐からプロセス主建屋1階北 側分岐部まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.37MPa, 1.0MPa 40℃
第三セシウム吸着装置入口分岐部か ら第三セシウム吸着装置ブースター ポンプ出口分岐部まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.37MPa 40℃
入口ヘッドスキッド出口からサイト バンカ建屋1階西側分岐部まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.37MPa 40℃
プロセス主建屋1階西側移送配管分 岐部からプロセス主建屋切替弁スキ ッド移送配管部まで (鋼管) (ポリエチレン管)	呼び径/厚さ 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A/Sch.80 STPG370 1.37MPa 66℃
	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	100A 相当 ポリエチレン 1.0MPa 40℃
第二セシウム吸着装置入口分岐部か ら第二セシウム吸着装置ブースター ポンプ出口分岐部まで (ポリエチレン管)	呼び径 材質 最高使用圧力 最高使用温度	80A 相当 ポリエチレン 1.37MPa 40℃

主要配管仕様（4 / 4）

名称	仕様	
滞留水受入槽から スラッジ排出ポンプ入口まで （鋼管） （ポリエチレン管）	呼び径／厚さ	50A/Sch.40
	材質	STPG370
	最高使用圧力	静水頭, 1.0MPa
	最高使用温度	40℃
	呼び径	50A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	静水頭, 1.0MPa
	最高使用温度	40℃
スラッジ排出ポンプ出口から プロセス主建屋地下まで （鋼管）	呼び径／厚さ	40A/Sch.40, 50A/Sch.40
	材質	STPG370
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
（ポリエチレン管）	呼び径	50A 相当
	材質	ポリエチレン
	最高使用圧力	1.0MPa
	最高使用温度	40℃
（耐圧ホース）	呼び径	50A 相当
	材質	ポリ塩化ビニル
	最高使用圧力	大気圧
	最高使用温度	40℃

滞留水一時貯留設備の構造強度評価について

1. 構造強度評価の基本方針

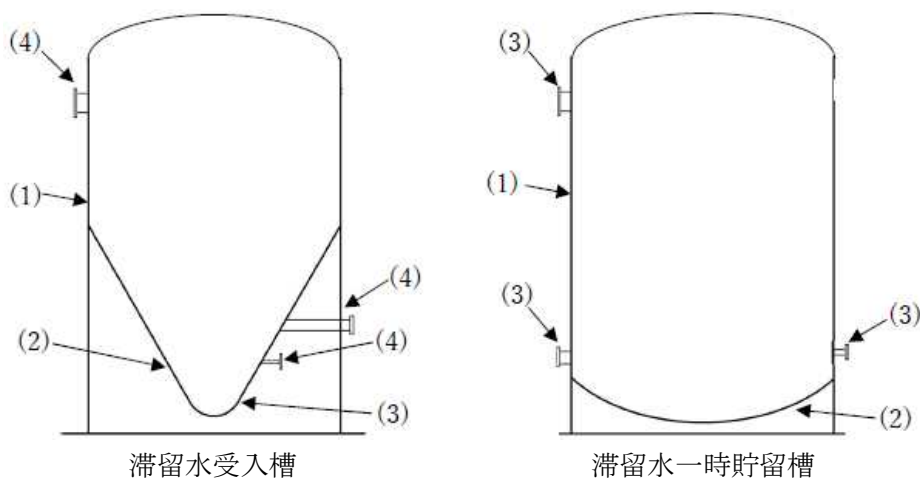
滞留水一時貯留設備を構成する主要な機器及び主配管（鋼管）は、強度評価においては、「JSME S NC-1 発電用原子力設備規格 設計・建設規格」（以下、「JSME 規格」という。）のクラス 3 機器またはクラス 3 配管に準じた評価を行う。

2. 強度評価

2.1 滞留水受入槽，滞留水一時貯留槽

2.1.1 評価箇所

強度評価箇所を図－１に示す。



“() ” は 2.1.3 の番号に対応する

図－１ 滞留水受入槽概要図

2.1.2 評価方法

2.1.2.1 胴，底板の厚さの評価

(1) 円筒胴の厚さの評価

円筒胴に必要な厚さは，次に掲げる値のうち，いずれか大きい値とする。

a. 計算上必要な厚さ： t_1

$$t_1 = \frac{D_i \cdot H \cdot \rho}{0.204 \cdot S \cdot \eta}$$

t_1 ：必要厚さ (mm)

D_i ：胴の内径 (m)

H ：水頭 (m)

ρ ：液体の比重。ただし，1未満の場合は1とする。

S ：許容引張応力 (MPa)

η ：継手効率 (-)

b. 規格上必要な最小厚さ： t_2

炭素鋼鋼板又は低合金鋼板で作られた場合は3mm，その他の材料で作られた場合は1.5mm とする。

(2) 円すい胴の厚さの評価

円すい胴に必要な厚さは，次に掲げる値のうち，いずれか大きい値とする。

a. 計算上必要な厚さ： t_1, t_2

$$t_1 = \frac{P \cdot D_i}{2 \cdot \cos \theta \cdot (S \cdot \eta - 0.6 \cdot P)}$$

$$t_2 = \frac{P \cdot D_i \cdot W}{4 \cdot \cos \theta \cdot (S \cdot \eta - 0.1 \cdot P)}$$

ただし，
$$W = \frac{1}{4} \cdot \left(3 + \sqrt{\frac{D_i}{2 \cdot r_o \cdot \cos \theta}} \right)$$

t ：必要厚さ (mm)

P ：最高使用圧力 (MPa)

D_i ：円すいの部分がすその丸みの部分に接続する部分の軸に垂直な断面の内径 (mm)

θ ：円すいの頂角の2分の1 (°)

S ：許容引張応力 (MPa)

η ：継手効率 (-)

r_o ：胴の大径端側のすその丸みの部分の内半径

b. 規格上必要な最小厚さ： t_3

炭素鋼鋼板又は低合金鋼板で作られた場合は3mm，その他の材料で作られた場合は1.5mm とする。

(3) 下部鏡板の厚さの評価

下部鏡板(全半球鏡板)に必要な厚さは，次に掲げる値とする。

$$t = \frac{P \cdot R}{2 \cdot S \cdot \eta - 0.2 \cdot P}$$

t ：必要厚さ (mm)

P ：最高使用圧力 (MPa)

R ：鏡板の内半径 (mm)

S ：許容引張応力 (MPa)

η ：継手効率 (-)

(4) 管台の厚さの評価

管台に必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい値とする。

a. 計算上必要な厚さ： t_1

$$t_1 = \frac{D_i \cdot H \cdot \rho}{0.204 \cdot S \cdot \eta}$$

t_1 ：必要厚さ (mm)

D_i ：管台の内径 (m)

H ：水頭 (m)

ρ ：液体の比重。ただし、1未満の場合は1とする。

S ：許容引張応力 (MPa)

η ：継手効率 (-)

b. 規格上必要な最小厚さ： t_2

管台の外径に応じて、JSME 規格 表 PVC-3980-1 より求めた管台の厚さとする。

2.1.2.2 胴の穴の補強計算

a. 補強に有効な範囲内にある補強に有効な面積が、補強に必要な面積より大きくなるようにする。

b. 大きい穴の補強を要しない穴の最大径

下においては、大きい穴の補強計算は必要ない。

・内径 1500mm 以下の胴において、穴の径が胴の内径の 2 分の 1 以下の場合

・内径 1500mm 以上の胴において、穴の径が胴の内径の 3 分の 1 以下の場合

c. 溶接部の強度として、予想される破断箇所の強さが、溶接部の負うべき荷重以上であること。

2.1.3 評価結果

滞留水受入槽に対して実施した強度評価の結果を表-1, 2に示す。また、滞留水一時貯留槽に対して実施した強度評価の結果を表-3, 4に示す。いずれの項目においても、必要厚さ等を満足しており、十分な構造強度を有すると評価している。

表－1 滞留水受入槽の評価結果（板厚）

機器名称	評価項目	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
滞留水 受入槽	(1) 胴板(円筒)の厚さ	3.0	8.5
	(2) 胴板(円すい)の厚さ	3.0	8.5
	(3) 下部鏡板の厚さ	0.1	8.5
	(4) 管台の厚さ (50A)	2.4	2.7
	(4) 管台の厚さ (100A)	3.5	4.8
	(4) 管台の厚さ (200A)	3.5	7.0

表－2 滞留水受入槽の評価結果（胴の穴の補強計算）

機器名称	評価項目	評価結果	
		補強に必要な面積 (mm ²)	補強に有効な総面積 (mm ²)
滞留水 受入槽	(4) 管台(100A)	92.9	1205.2
		大きな穴の補強を要 しない最大径 (mm)	穴の径 (mm)
		933.3	115.4
		溶接部の負うべき負 荷 (N)	予想の破断箇所の強 さ (N)
		-79,108	－※
		(4) 管台(200A)	補強に必要な面積 (mm ²)
	175.2		2233.3
	大きな穴の補強を要 しない最大径 (mm)		穴の径 (mm)
	933.3		218.0
	溶接部の負うべき負 荷 (N)		予想の破断箇所の強 さ (N)
	-149,660		－※

※溶接部の負うべき荷重が負であり溶接部の強度計算は不要

表－3 滞留水一時貯留槽の評価結果（板厚）

機器名称	評価項目	必要厚さ (mm)	最小厚さ (mm)
滞留水 一時貯留槽	(1) 胴板(円筒)の厚さ	3.0	8.5
	(2) 下部鏡板の厚さ	0.8	8.5
	(3) 管台の厚さ (50A)	2.4	2.7
	(3) 管台の厚さ (100A)	3.5	4.8
	(3) 管台の厚さ (200A)	3.5	7.0

表－4 滞留水一時貯留槽の評価結果（胴の穴の補強計算）

機器名称	評価項目	評価結果	
滞留水 一時貯留槽	(3) 管台(100A)	補強に必要な面積 (mm ²)	補強に有効な総面積 (mm ²)
		92.9	1205.2
		大きな穴の補強を要 しない最大径 (mm)	穴の径 (mm)
		1033.3	115.4
		溶接部の負うべき負 荷 (N)	予想の破断箇所の強 さ (N)
		-79, 108	－※
	(3) 管台(200A)	補強に必要な面積 (mm ²)	補強に有効な総面積 (mm ²)
		175.2	2233.3
		大きな穴の補強を要 しない最大径 (mm)	穴の径 (mm)
		1033.3	218.0
		溶接部の負うべき負 荷 (N)	予想の破断箇所の強 さ (N)
		-149, 660	－※

※溶接部の負うべき荷重が負であり溶接部の強度計算は不要

2.2 主配管

強度評価箇所を図-2に示す。

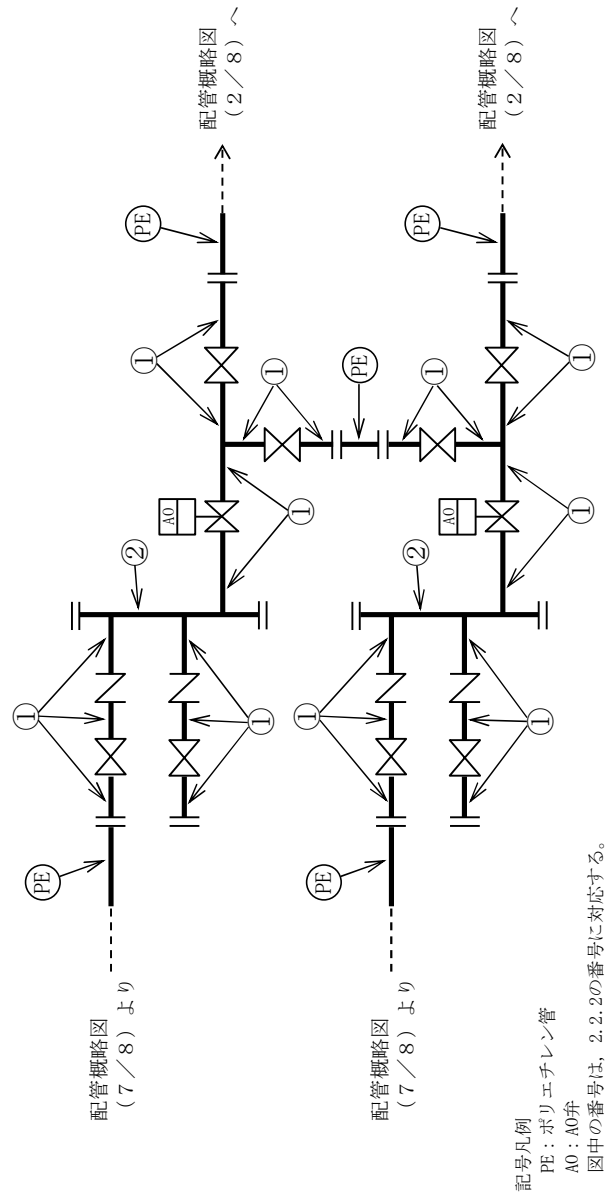
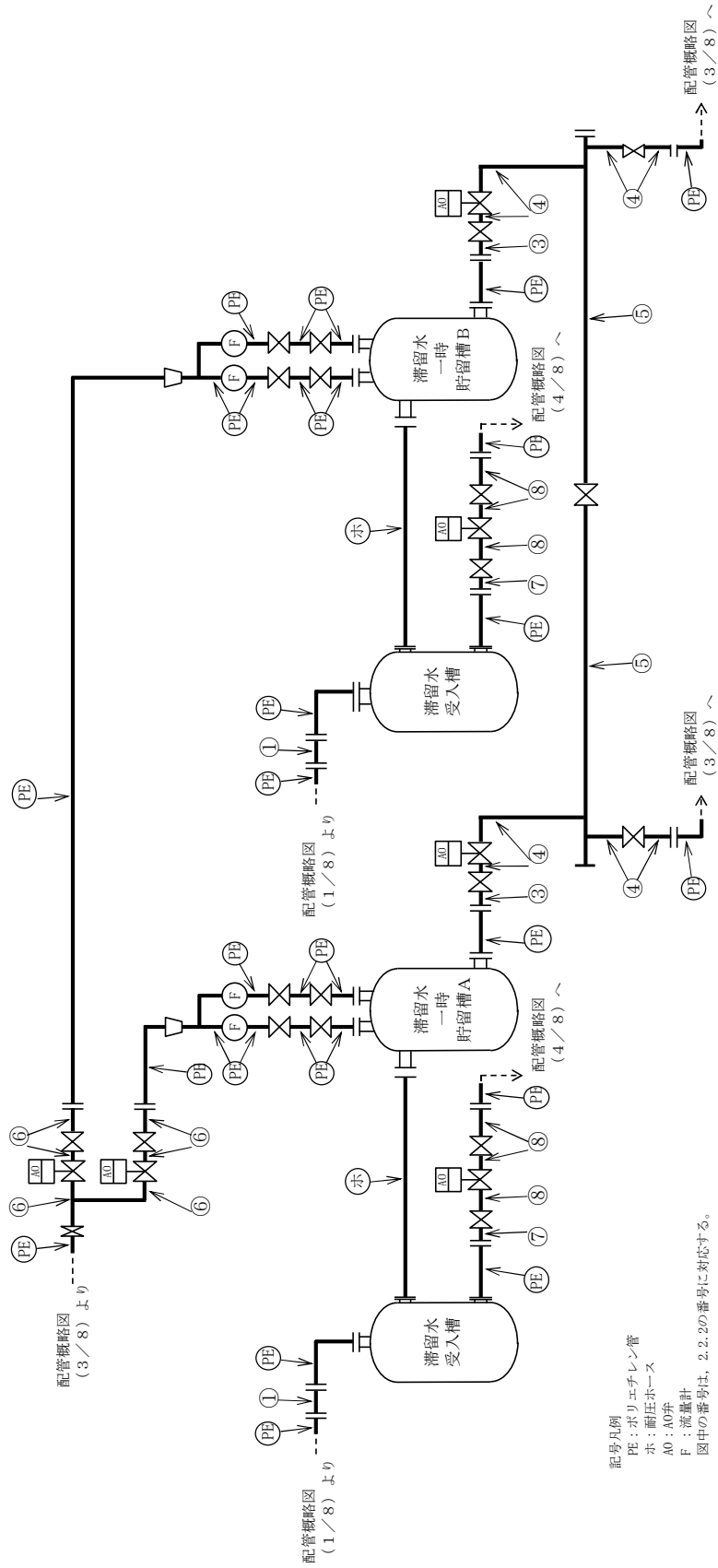
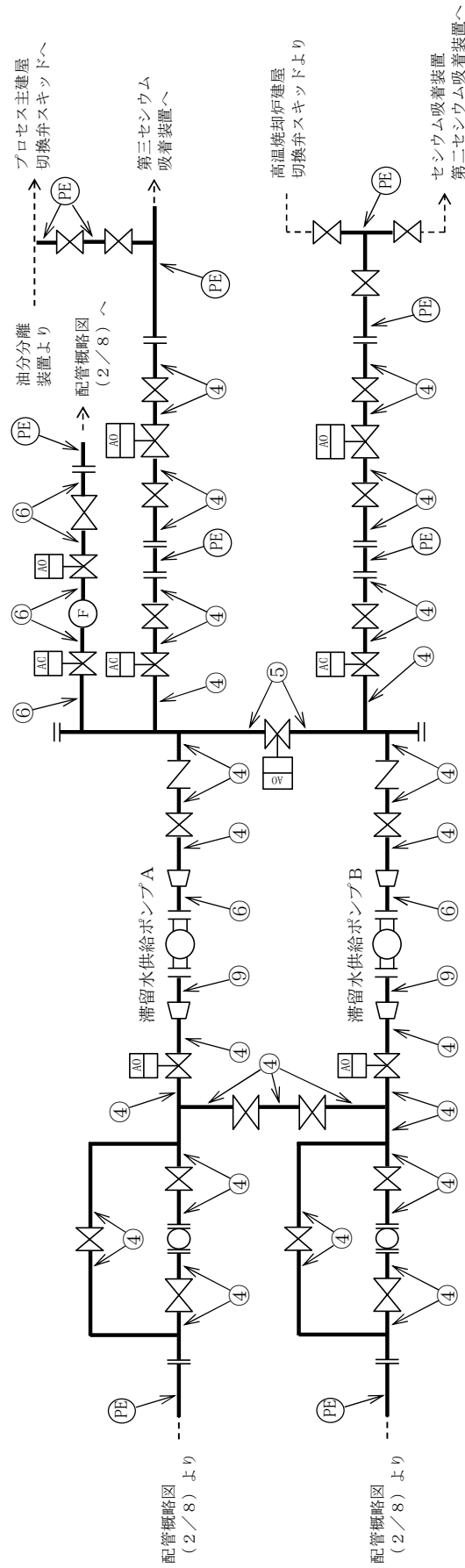


図-2 配管概略図 (1/8)



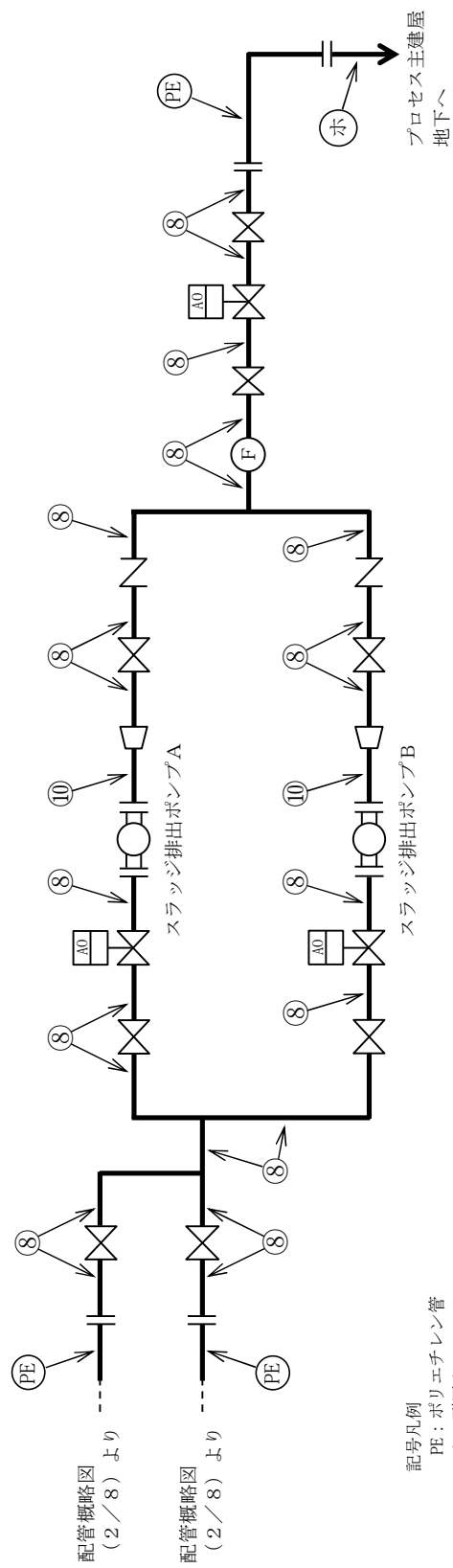
記号凡例
 PE : ポリエチレン管
 弁 : 耐圧ボース
 AO : AO弁
 F : 流量計
 図中の番号は、2.2.2の番号に対応する。

図一 2 配管概略図 (2 / 8)



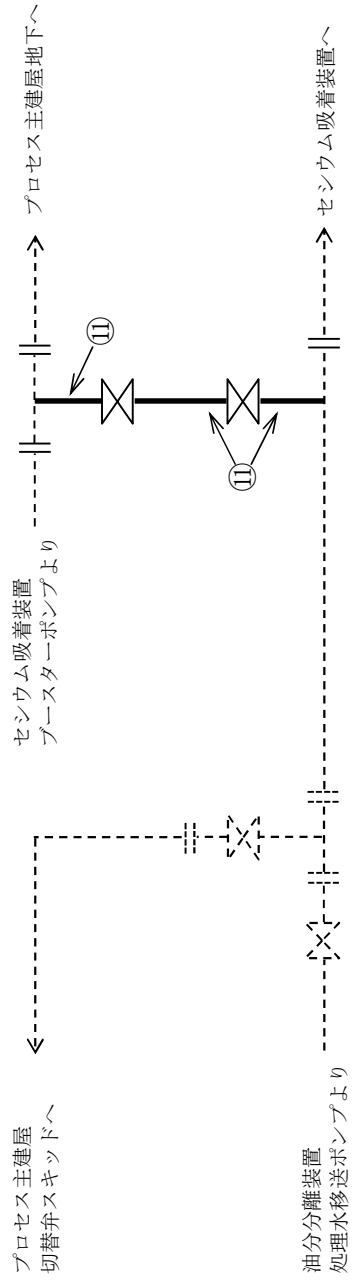
記号凡例
 PE : ポリエチレン管
 AO : AO弁
 F : 流量計
 図中の番号は、2.2.2の番号に対応する。

図一 2 配管概略図 (3 / 8)



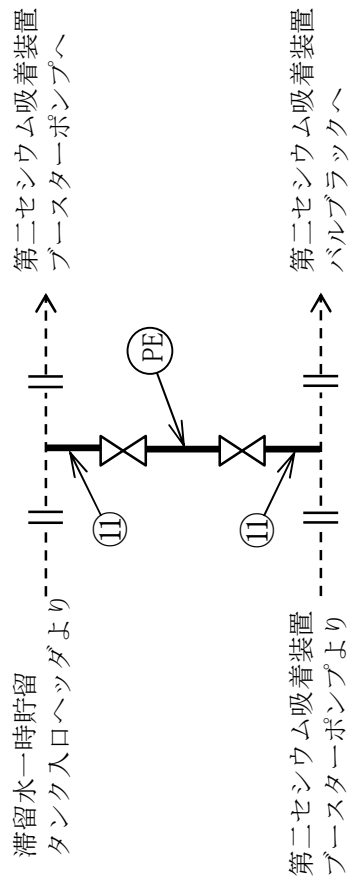
記号凡例
 PE：ポリエチレン管
 水：耐圧ホース
 AO：AO弁
 F：流量計
 図中の番号は、2.2.2の番号に対応する。

図一 2 配管概略図 (4 / 8)



記号凡例
 図中の番号は、2.2.2の番号に対応する。

図一 2 配管概略図 (5 / 8)

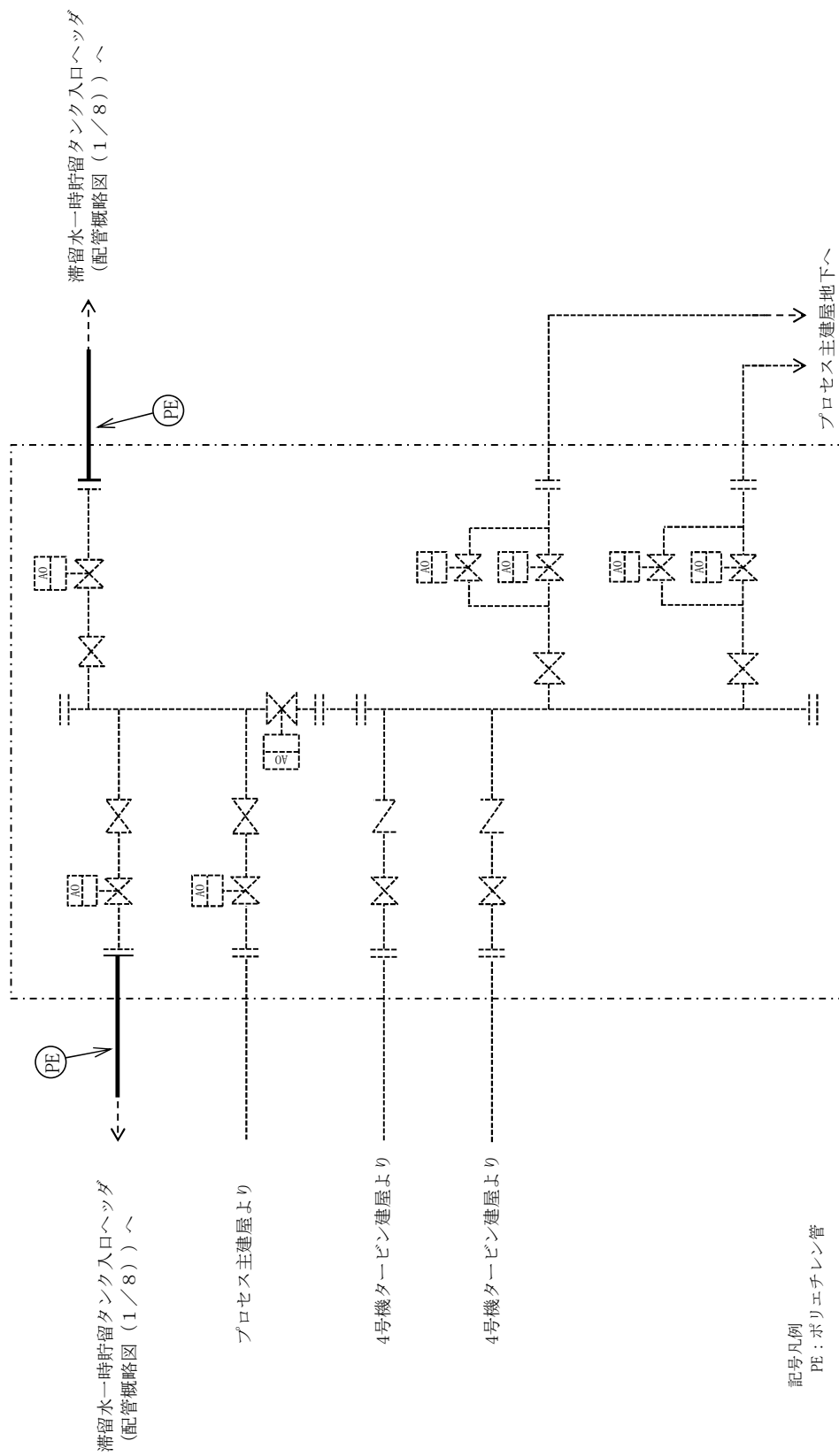


記号凡例

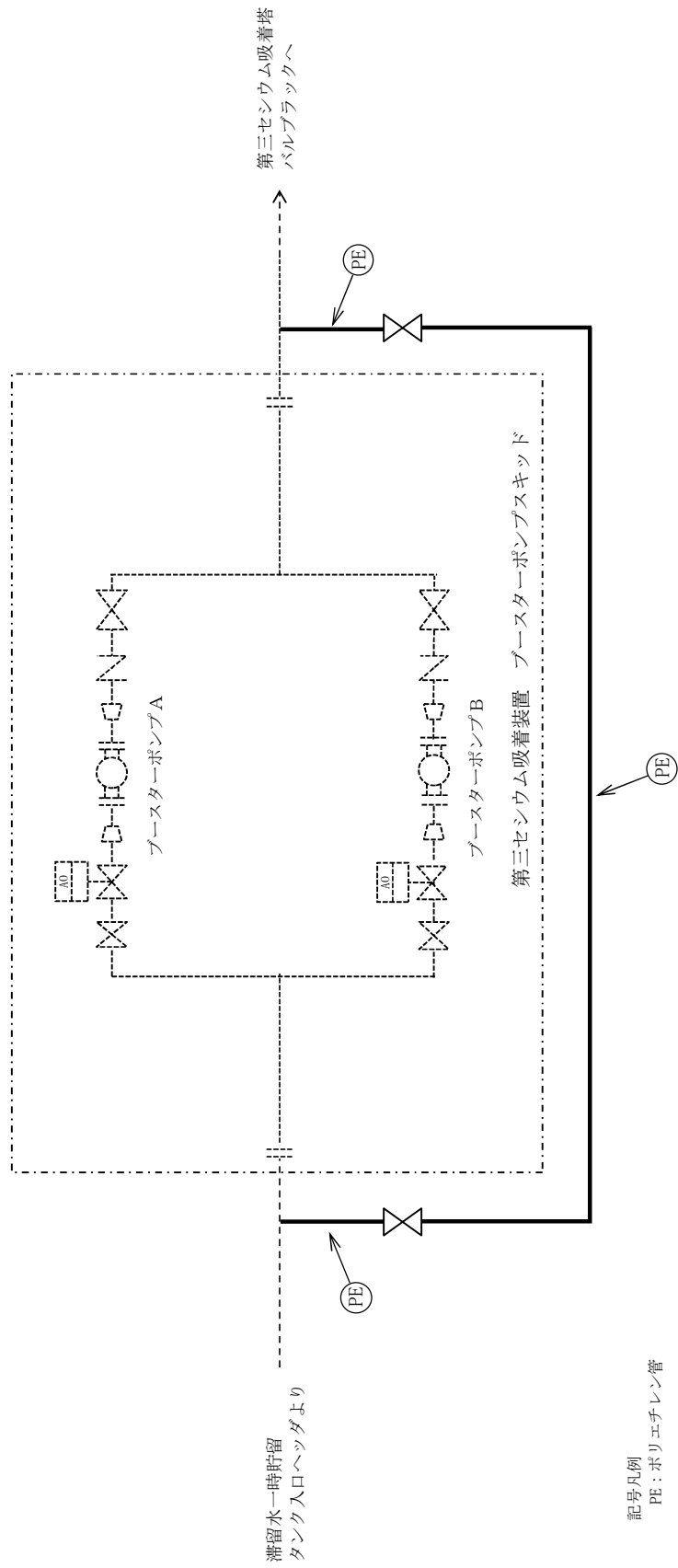
PE：ポリエチレン管

図中の番号は、2.2.2の番号に対応する。

図一 2 配管概略図 (6 / 8)



図一 2 配管概略図 (7 / 8)



図一 2 配管概略図 (8 / 8)

2.2.1 評価方法

管に必要な厚さは、次に掲げる値のうち、いずれか大きい方の値とする。

a. 計算上必要な厚さ： t_1

$$t_1 = \frac{P \cdot D_0}{2 \cdot S \cdot \eta + 0.8 \cdot P}$$

t_1 ：必要厚さ (mm)

P ：最高使用圧力 (MPa)

D_0 ：管の外径 (mm)

S ：許容引張応力 (MPa)

η ：継手効率 (-)

b. 規格上必要な最小厚さ： t_2

管台の外径に応じて、JSME 規格 表 PPD-3411-1 より求めた管の厚さとする。

2.2.2 評価結果

評価結果を表-5に示す。必要厚さを満足しており、十分な構造強度を有していると評価している。

表-5 主配管の評価結果

評価機器	口径	Sch	材料	最高使用圧力(MPa)	最高使用温度(°C)	必要厚さ(mm)	最小厚さ(mm)
配管①	100A	40	STPG370	1.0	40	3.4	5.25
配管②	150A	40	STPG370	1.0	40	3.8	6.21
配管③	100A	40	STPG370	静水頭	40	3.4	5.25
配管④	100A	40	STPG370	1.37	40	3.4	5.25
配管⑤	150A	40	STPG370	1.37	40	3.8	6.21
配管⑥	80A	40	STPG370	1.37	40	3.0	4.81
配管⑦	50A	40	STPG370	静水頭	40	2.4	3.40
配管⑧	50A	40	STPG370	1.0	40	2.4	3.40
配管⑨	125A	40	STPG370	1.37	40	3.8	5.77
配管⑩	40A	40	STPG370	1.0	40	2.2	3.20
配管⑪	100A	80	STPG370	1.37	66	3.4	7.52

以上

滞留水一時貯留設備の耐震重要度と機器クラスについて

滞留水一時貯留設備の耐震重要度と機器クラスは表 2.14.1.3-1 の通り。耐震重要度については、令和 4 年度第 5 1 回原子力規制委員会にて、「東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所における耐震クラス分類と地震動の適用の考え方」が示されたことを受け、耐震クラスを分類した（「2.14.2 自然現象に対する設計上の考慮への適合性」参照）。また、機器クラスについては、「実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則」に準じて設定した。

表 2.14.1.3-1 滞留水一時貯留設備の耐震重要度と機器クラス

設備	機器	耐震重要度分類	機器クラス
滞留水一時貯留設備	滞留水受入槽	B+	クラス 3
	滞留水一時貯留槽	B+	クラス 3
	滞留水供給ポンプ	B+	※1
	スラッジ排出ポンプ	B+	※1
	滞留水移送配管（鋼管）	B+	クラス 3
	滞留水移送配管（ポリエチレン管）	B+	※2
	滞留水移送配管（耐圧ホース）	B+	※2
その他	空気作動弁・手動弁	B+	※3

※1：「発電用原子炉施設の工事計画に係る手続きガイド」に準じて、クラス 3 機器に接続するポンプについては「設計・建設規格」又は JIS を基にした強度に関する計算等を実施する。

※2：クラス 3 に準じた構造強度評価および検査を実施する。

※3：製造メーカー指定の方法で耐圧試験を実施する。

以上

「設計・建設規格」に記載のない非金属材料の信頼性確保について

滞留水一時貯留設備では、ポリエチレン管や耐圧ホースを使用している。これらについては、福島第一原子力発電所で使用実績があり、また規格の適用範囲もしくは、製造者使用範囲内の圧力温度で使用することで、構造強度を有すると評価しているが、それぞれの非金属配管の適用範囲は、表 2.14.1.3-2 の通り。

表 2.14.1.3-2 非金属配管の環境条件と適用範囲

管の種類	環境条件		適用範囲	
	最高使用圧力 (MPa)	最高使用温度 (°C)	使用可能圧力 (MPa)	使用可能温度 (°C)
ポリエチレン管	1.37	40	～1.5	～40
耐圧ホース	静水頭	40	～1.0	～60

なお、ポリエチレン管については、ISO4427 Plastics piping systems 規格に準拠した高密度ポリエチレン管（二層）を設置する。採用するポリエチレン管の構造イメージは図 2.14.1.3-1 参照。



図 2.14.1.3-1 採用するポリエチレン管の構造イメージ

以上

2.14.2 自然現象に対する設計上の考慮 への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 4. 設計上の考慮

○施設の設計については，安全上の重要度を考慮して以下に掲げる事項を適切に考慮されたものであること。

②自然現象に対する設計上の考慮

- ・安全機能を有する構築物，系統及び機器は，その安全機能の重要度及び地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響を考慮して，耐震設計上の区分がなされるとともに，適切と考えられる設計用地震力に十分耐えられる設計であること。
- ・安全機能を有する構築物，系統及び機器は，地震以外の想定される自然現象（津波，豪雨，台風，竜巻等）によって施設の安全性が損なわれない設計であること。重要度の特に高い安全機能を有する構築物，系統及び機器は，予想される自然現象のうち最も苛酷と考えられる条件，又は自然力に事故荷重を適切に組み合わせた場合を考慮した設計であること。

2.14.2.1 措置を講ずべき事項への適合方針

(1) 地震に対する設計上の考慮

滞留水一時貯留設備を構成する機器は，その安全機能の重要度，地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆被ばく影響）や廃炉活動への影響等を考慮した上で，核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして耐震設計上の区分を行うとともに，適切と考えられる設計用地震力に耐えられる設計とする。

(2) 地震以外に想定される自然現象（津波，豪雨，台風，竜巻等）に対する設計上の考慮

滞留水一時貯留設備は，地震以外の想定される自然現象（津波，豪雨，台風，竜巻等）によって施設の安全性が損なわれない設計とする。

2.14.2.2 対応方針

2.14.2.2.1 自然現象に対する設計上の考慮

施設の設計については、安全上の重要度を考慮して以下について適切に考慮したものと
する。

○自然現象に対する設計上の考慮

- ・安全機能を有する構築物、系統及び機器は、その安全機能の重要度、地震によって機能の喪失を起こした場合の安全上の影響（公衆被ばく影響）や廃炉活動への影響等を考慮した上で、核燃料物質を非密封で扱う燃料加工施設や使用施設等における耐震クラス分類を参考にして耐震設計上の区分を行うとともに、適切と考えられる設計用地震力に耐えられる設計とする。また、確保できない場合は必要に応じて多様性を考慮した設計とする。
- ・安全機能を有する構築物、系統及び機器は、地震以外の想定される自然現象（津波、豪雨、台風、竜巻等）によって施設の安全性が損なわれないものとする。その際、必要に応じて多様性も考慮する。重要度の特に高い安全機能を有する構築物、系統及び機器は、予想される自然現象のうち最も苛酷と考えられる条件、又は自然力に事故荷重を適切に組み合わせた場合を考慮したものとす。

(実施計画：II-1-14-1)

2.14.2.2.2 自然現象に対する滞留水一時貯留設備の設計上の考慮

2.14.2.2.2.1 地震に対する滞留水一時貯留設備の設計上の考慮

滞留水一時貯留設備を構成する構築物，系統及び機器は，2021年9月8日および2022年11月16日の原子力規制委員会で示された「東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所における耐震クラス分類と地震動の適用の考え方」に基づいて，耐震設計上の区分を行うとともに，適切と考えられる設計用地震力に耐えられる設計とする。

なお，主要な機器の耐震性を評価するにあたっては，原子力発電所耐震設計技術規程（JEAC4601）等に準拠することを基本とするが，評価手法，評価基準について実態に合わせたものを採用する。

ポリエチレン管，耐圧ホース等は，材料の可撓性により耐震性を確保する。

（実施計画：II-2-5-添 32-1~2）

(1) 耐震性の基本方針

滞留水一時貯留設備は，耐震 B+クラスの設備に要求される地震動に対して必要な強度を確保する。耐震性の評価においては原則，構築物（間接支持構造物含む）は 1.5Ci，機器は 1.8Ci の水平方向設計震度の静的地震力，および 1/2Ss450，1/2Sd225（共振時のみ）を動的地震力として適用する。また，主要な機器及び鋼管の耐震性を評価するにあたっては，原子力発電所耐震設計技術規程（JEAC4601）等に準拠して構造強度評価を行うことを基本とするが，評価手法，評価基準について実態に合わせたものを採用する。なお，滞留水一時貯留設備に使用する耐圧ホース，ポリエチレン管等については，材料の可撓性により耐震性を確保する。

2.14.2.2.3 地震以外に想定される自然現象に対する設計上の考慮

滞留水一時貯留設備に対する地震以外に想定される自然現象に対する設計上の考慮は以下の通り。(実施計画：II-2-5-添32別1-4~5)

a. 津波

滞留水一時貯留設備は、アウターライズ津波による浸水を防止するため、仮設防潮堤内に設置する。また、アウターライズ津波を上回る津波の襲来に備え、大津波警報が出た際は、システムを停止し、隔離弁を閉めることにより滞留水の流出を防止する。

b. 豪雨

滞留水一時貯留設備は、豪雨による影響を受けにくい建屋内に設置する。

c. 積雪

滞留水一時貯留設備は、積雪による影響を受けにくい建屋内に設置する。

d. 落雷

滞留水一時貯留設備は、構内接地網へ接続する等により、落雷に伴う雷サージ侵入による設備の損傷を防止する設計とする。

e. 台風（強風、高潮）

滞留水一時貯留設備は、台風による影響を受けにくい建屋内に設置する。

f. 竜巻

竜巻の発生の可能性が予見される場合には、滞留水一時貯留設備の停止・隔離弁の閉止操作を行い、汚染水の拡大防止を図る。

g. 凍結

滞留水一時貯留設備は、建屋内に設置することから、凍結の恐れは小さいと考える。水の移送を停止した場合、屋外敷設のポリエチレン管は凍結による破損が懸念される。そのため、屋外敷設のポリエチレン管に保温材を取り付け、凍結防止を図る。

なお、保温材は高い気密性と断熱性を有する硬質ポリウレタン等を使用し、凍結しない十分な厚さを確保する。

凍結しない十分な厚さ（100A に対して 21.4mm 以上）を確保した保温材を取り付ける。

保温材厚さの設定の際には、「建設設備の凍結防止（空気調和・衛生工学会）」に基づき、震災以降に凍結事象が発生した外気温 -8°C 、内部流体の初期温度 5°C 、保温材厚さ 21.4mm の条件において、内部流体が 25%※凍結するまでに十分な時間（50 時間程度）があること

を確認した。なお、震災以降の実測データから、外気温 -8°C が半日程度継続することはない。

※「JIS A 9501 保温保冷工事施工標準」において管内水の凍結割合を 25%以上と推奨

h. 紫外線

滞留水一時貯留設備のうち、屋外敷設箇所のポリエチレン管は、紫外線による劣化を防ぐため、紫外線劣化防止効果のあるカーボンブラックを添加した保温材を取り付ける。もしくは、カーボンブラックを添加していない保温材を使用する場合は、カーボンブラックを添加した被覆材または紫外線による劣化のし難い材料（鋼板等）を取り付ける。

i. 高温

滞留水一時貯留設備は、熱による劣化が懸念されるポリエチレン管については、処理対象水の温度がほぼ常温のため、熱による材料の劣化の可能性は十分低い。

j. 生物学的事象

滞留水一時貯留設備は、建屋貫通孔等からの小動物の侵入が想定されるため、建屋貫通孔や電路端部等に対してシール材を施工することにより、侵入を防止する設計とすることで対策を行う。

k. その他

滞留水一時貯留設備は、上記の自然現象の他、火山、森林火災等により設備損傷のおそれがある場合は、運転する者が手動により免震重要棟集中監視室から設備を停止できる設計とする。

滞留水一時貯留設備の耐震クラス分類に関する補足説明については、別紙—1、滞留水一時貯留設備の耐震性に関する説明書については、別紙—2 参照。

滞留水一時貯留設備の耐震クラス分類に関する補足説明

1 耐震性の基本方針

滞留水一時貯留設備のうち、液体放射性物質を内包し、地上階に設置する設備については、2021年9月8日および2022年11月16日の原子力規制委員会で示された「東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所における耐震クラス分類と地震動の適用の考え方」を踏まえ、その安全機能が喪失した場合における公衆への放射線影響を評価した結果、直接線・スカイシャイン線による外部被ばく線量と、漏えいした滞留水の一部がダストとして大気中に拡散した場合の外部及び内部被ばく線量を合わせた場合、その実効線量は5mSv以下と評価される。また、長期的に使用する設備に該当することから、耐震B+クラスと位置付けられる。

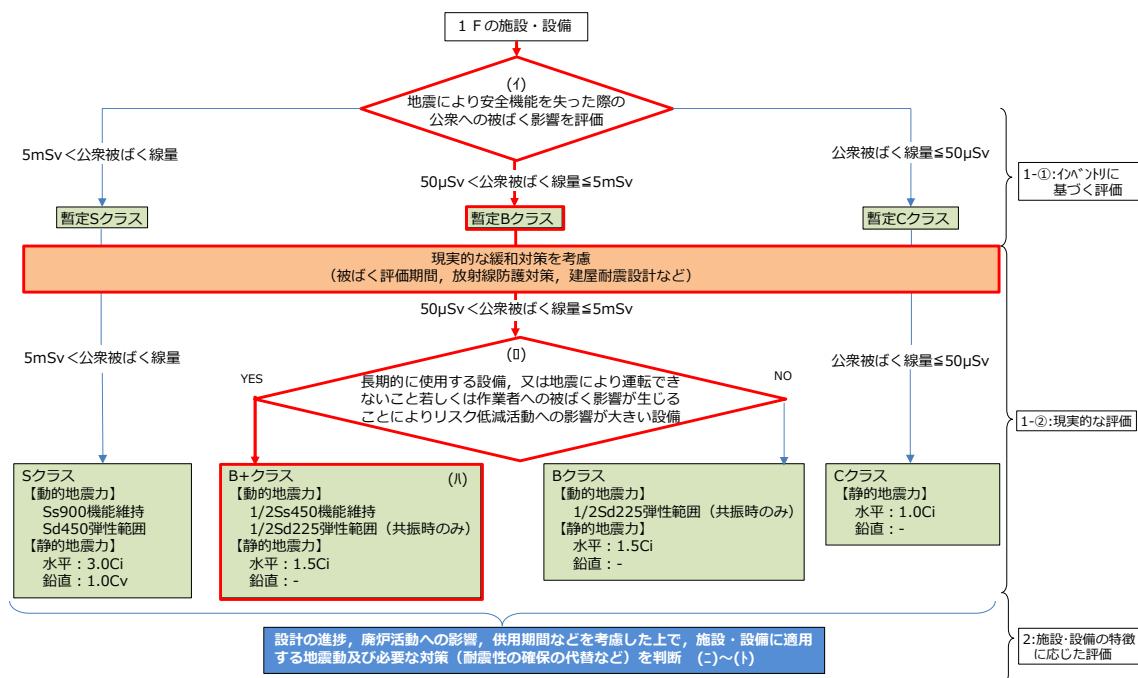


図 2.14.2.1-1 耐震クラス分類と施設・設備の特徴に応じた地震動の設定及び必要な対策を判断する流れ

【(イ)：地震により安全機能を失った際の公衆被ばく影響】

核燃料施設等の耐震クラス分類を参考にして、地震による安全機能喪失時の公衆被ばく線量により、S、B、Cを分類する。液体放射性物質を内包する施設・設備にあつては、液体の海洋への流出のおそれのない設計を前提とした線量評価によるものとする。

【(ロ)：通常のBクラスよりも高い耐震性が求められるB+クラスの対象設備の要件】

「運転できないこと若しくは作業者への被ばく影響が生じることによりリスク低減活動への影響が大きい設備」の具体例は以下のとおり。

- ・ 建屋滞留水・多核種除去設備などの水処理設備、使用済燃料をプールからより安定性の高い乾式キャスクへ移動させるために必要な燃料取出設備等。
- ・ 閉じ込め・遮へい機能喪失時の復旧作業における従事者被ばく線量が1日当たりの計画線量限度を超える設備等。

【(ハ)：B+クラスの1/2Ss450機能維持】

1/2Ss450に対して、運転の継続に必要な機能の維持や閉じ込め・遮へい機能の維持を求める。

令和4年3月16日の福島県沖地震の地震動が1/2Ss450を上回った周期帯に固有振動数を有する施設・設備は、当該地震動による施設・設備の機能への影響を評価する。

【(ニ)：耐震性の確保】

地震力の算定に際しては、水平2方向及び鉛直方向について適切に組み合わせる。

【(ホ)：耐震性の確保に対する代替策】

耐震性の確保の代替策として、耐震性の不足に起因するリスクを早期に低減させるための対策を講ずるとしてもよい。具体例は以下のとおり。

例：中低濃度タンクや吸着塔一時保管施設等の耐震性の不足に起因するリスクを早期に低減させる対策として、耐震性の高い建屋やタンクへの移替え及び移管、スラリー安定化処理設備や海洋放出設備による処理等を早期に行うことを想定。

【(ヘ)：上位クラスへの波及的影響】

上位クラスへの波及的影響がある場合、原則上位クラスに応じた地震動を念頭に置くが、耐震クラス分類の考え方と同様に、下位クラスによる波及的影響を起因とする敷地周辺の公衆被ばく線量も勘案し、適切な地震動を設定する。

【(ト)：液体放射性物質を内包する設備】

多核種除去設備等で処理する前の液体等、放出による外部への影響が大きい液体を内包する設備については、Ss900 に対して、海洋に流出するおそれのない設計とすることを求める（滞留水が存在する建屋、ALPS 処理前の水や濃縮廃液を貯留するタンクの堰等）。これ以外の液体を内包する設備については、上位クラスの地震動に対する閉じ込め機能の確保又は漏えい時の影響緩和対策を求める※。

※：設備自体を耐震CクラスからBクラスに格上げ、周囲の堰等に上位クラスの地震動に対して閉じ込め機能を維持する、漏えい時に仮設ホースによる排水等の機動的対応を講ずる等により、海洋への流出を緩和する措置を想定。

2 安全機能喪失の影響評価

2.1 機能喪失による公衆への放射線影響の程度について

滞留水一時貯留設備について、機能喪失による公衆への放射線影響を確認するため、線量評価を実施した。評価条件については、設備から全量漏えいした場合を想定した条件にて設定する。評価条件における放射性物質量を表 2.14.2.1-1 に示す。

表 2.14.2.1-1 評価条件における放射性物質量

核種	濃度 (Bq/L)	容積 (m ³)	放射性物質量 (Bq)
Cs-137 (Ba-137m)	1.3E+08	100 ^{※1}	1.3E+13
Cs-134	6.6E+06		6.6E+11
Sr-90 (Y-90)	3.0E+07		3.0E+12

※1 プロセス主建屋 4 階設置の主要機器の内包水量 84m³ に対して保守的に設定。

2.1.1 直接線・スカイシャイン線による被ばく評価

地震により安全機能（遮へい機能・閉じ込め機能）を失った際の公衆被ばく影響が、1 週間（7 日間）継続したことを想定する。最寄りの線量評価点（BP7）における直接線・スカイシャイン線による被ばく量は 0.016 mSv 程度である。

(1) 条件

設定した核種毎の放射能濃度に基づき、線源強度を ORIGEN2 の計算コードを用いて算出し、その結果を踏まえて、3 次元モンテカルロ計算コード MCNP5-1.60 を用いた解析により、敷地境界線上の直接線・スカイシャイン線の評価結果を算出。なお、機能喪失した場合の評価として、遮へいがなくなった状態での評価を実施する。

- ・ 建屋躯体による遮へい効果は考慮しない。
- ・ 法面（33.5m 盤）による遮へい効果は考慮しないが、設置地面は考慮する。

- ・ 線源の高さはプロセス主建屋4階床面高さとし、評価点(BP7)との高低差を考慮する。
- ・ 保守的にインベントリは全て暴露。
- ・ 評価期間については、安全機能の喪失を想定する期間として、7日間とする。

(2) 評価結果

最寄りの線量評価点 (No. 7) における直接線・スカイシャイン線による被ばく量は 0.016mSv 程度であることを確認した。

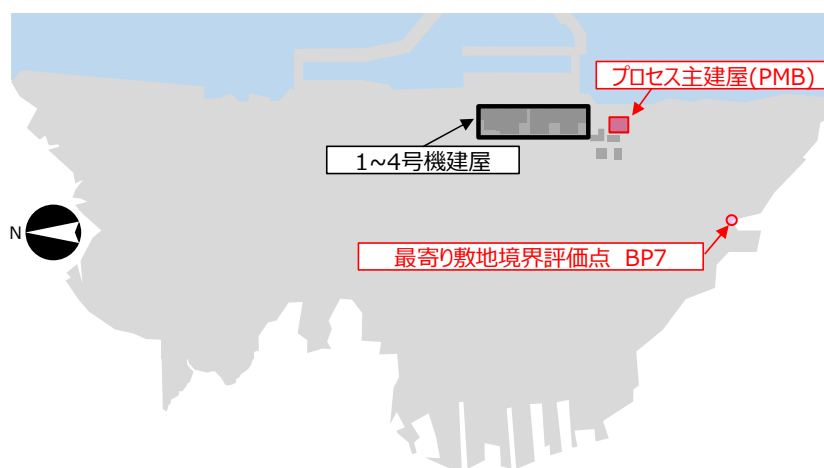


図 2.14.2.1-3 公衆被ばく線量評価における最寄りの線量評価点 (No. 7)

2.1.2 大気中への拡散による被ばく評価

地震により安全機能（遮へい機能・閉じ込め機能）を失った際に、漏えいした放射性物質がダストとして放出したことを想定する。実効放出継続時間を2時間と仮定した場合の、最寄り線量評価点 (BP7) におけるクラウドシャイン線、グランドシャイン線による外部被ばくおよびクラウドの吸入による内部被ばく量は 0.11 mSv 程度である。

(1) 条件

CADデータを用いて放出点を設定し、放出点から16方位（陸側）に対して最至近点を評価点として設定し、各方位の距離を算出。算出した放出点から評価点までの距離、放出率、実効放出継続時間、線量係数、気象データ等の条件を用いてWDOSE2_TEPSYSの計算コードを用いて相対濃度および相対線量を計算した。

算出した相対濃度、相対線量を用いて放出量から「クラウドシャインによる外部被ばく」、「グランドシャインによる外部被ばく」、「クラウドの吸入による内部被ばく」の3経路における大気拡散の評価結果となる積算線量を算出する。

- 建屋躯体による遮へい効果は考慮しない。
- 保守的にインベントリは全て暴露。

- 建屋及び閉じ込め機能は考慮せず、すべて喪失するものとし、DFは1とする。
 - 評価期間については、安全機能の喪失を想定する期間として、7日間とする。
 - 1979年4月1日～1980年3月31日（1979年度）の気象データを使用する。（参考に2020年4月1日～2021年3月31日（2020年度）の気象データを使用して、評価を実施※）
- ※評価の結果、2020年度の気象データを用いて算出した被ばく影響のほうが高いことから、保守的に2020年度の評価結果を採用している。
- 大気拡散の評価に用いている放射性物質の放出量は、DOE, NRCにおいても標準的な評価手法（DSA, ISA）として採用されている「五因子法」により評価した。

➤ 五因子法

$$\text{放射性物質放出量} = \text{MAR} \times \text{DR} \times \text{ARF} \times \text{RF} \times \text{LPF}$$

MAR：事象によって影響を受ける可能性のある放射性物質の総量（インベントリ）（Material At Risk）

DR：事象の影響を受ける割合（Damage Ratio）

ARF：事象の影響を受けたもののうち雰囲気に放出され浮遊する割合（Airborne Release Fraction）

RF：肺に吸入され得る微粒子の割合（Respirable Fraction）

LPF：環境中へ漏えいする割合（Leak Path Factor）

表 2.14.2.1-2 滞留水一時貯留設備の放射能濃度と放射性物質質量

	項目	単位	数値	注記	
MAR	設備全体が保有する放射性物質質量	Cs-137	Bq	1.3E+13	1.3E+08[Bq/L] × 1.0E+5[L]
		Ba-137m	Bq	1.3E+13	1.3E+08[Bq/L] × 1.0E+5[L]
		Cs-134	Bq	6.6E+11	6.6E+06[Bq/L] × 1.0E+5[L]
		Sr-90	Bq	3.0E+12	3.0E+07[Bq/L] × 1.0E+5[L]
		Y-90	Bq	3.0E+12	3.0E+07[Bq/L] × 1.0E+5[L]
DR		—	1	地震ではインベントリ全体が影響を受けるものとして1を設定	
ARF	総放出割合	—	1.17E-04	落下時の飛散率+静置時の飛散率×放出期間	
	落下時の飛散率	—	5.0E-05	出典※1より スラリーとして評価。	
	静置時の飛散率	1/h	4.0E-07	出典※1より 屋内における均質な堆積物として評価	
	放出期間	h	168	放出期間(7day)×24(h)	
RF		—	1	微粒子の大きさによる変数であるため1と設定	
LPF		—	1	保守的に1と仮定	
放射性物質放出量	Cs-137	Bq	1.52E+09	設備全体が保有する核種毎の放射性物質質量×総放出割合	
	Ba-137m	Bq	1.52E+09		
	Cs-134	Bq	7.74E+07		
	Sr-90	Bq	3.52E+08		
	Y-90	Bq	3.52E+08		

※1：U. S. Department of Energy, AIRBORNE RELEASE FRACTIONS/RATES AND RESPIRABLE FRACTIONS FOR NONREACTOR NUCLEAR FACILITIES, Volume I - Analysis of Experimental Data, DOE-HDBK-3010-94 December 1994

○安全機能喪失時の方位毎の評価条件と相対濃度・相対線量は以下の通りであり、南方向が最大となる。

表 2. 14. 2. 1-3 安全機能喪失時の方位毎の評価条件と相対濃度・相対線量(1979 年度気象データ)

放出点	PMB中心										備考
	一般公衆(敷地境界)										
評価点	S	SSW	SW	WEW	W	WNW	NW	NNW	N		
評価対象方位(風下方位)	S	SSW	SW	WEW	W	WNW	NW	NNW	N		
評価対象風向(風上方位)	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S		
放出点から評価点までの距離(km)	0.78	0.67	0.61	0.73	0.88	1.18	1.34	1.34	2.23		
建屋影響有無	無	←	←	←	←	←	←	←	←		
放出点高さ(m)	0	←	←	←	←	←	←	←	←		
評価点高さ(m)	0	←	←	←	←	←	←	←	←		
実効放出継続時間	2時間										
1979年度 気象データ	相対濃度 (s/m ³)	4.70E-05	3.60E-05	1.40E-05	8.20E-06	5.40E-06	5.40E-07	4.00E-06	2.10E-05	2.00E-05	
	相対線量 (Gy/Bq)	3.60E-19	3.10E-19	1.70E-19	1.30E-19	9.80E-20	1.70E-20	7.70E-20	2.20E-19	2.70E-19	

表 2. 14. 2. 1-4 安全機能喪失時の方位毎の評価条件と相対濃度・相対線量(2020 年度気象データ)

放出点	PMB中心										備考
	一般公衆(敷地境界)										
評価点	S	SSW	SW	WEW	W	WNW	NW	NNW	N		
評価対象方位(風下方位)	S	SSW	SW	WEW	W	WNW	NW	NNW	N		
評価対象風向(風上方位)	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S		
放出点から評価点までの距離(km)	0.78	0.67	0.61	0.73	0.88	1.18	1.34	1.34	2.23		
建屋影響有無	無	←	←	←	←	←	←	←	←		
放出点高さ(m)	0	←	←	←	←	←	←	←	←		
評価点高さ(m)	0	←	←	←	←	←	←	←	←		
実効放出継続時間	2時間										
2020年度 気象データ	相対濃度 (s/m ³)	2.50E-04	8.60E-05	3.20E-05	1.80E-05	1.50E-06	3.70E-06	5.20E-06	1.60E-05	1.90E-05	
	相対線量 (Gy/Bq)	1.20E-18	5.80E-19	3.20E-19	2.40E-19	4.10E-20	7.60E-20	1.10E-19	1.90E-19	2.50E-19	

(2) 評価結果

大気中への拡散による被ばく量は、1979 年度気象データ用いた場合では 0.021mSv、2020 年度気象データ用いた場合では 0.11mSv となった。

表 2. 14. 2. 1-5 安全機能喪失時の核種毎、被ばく経路ごとの実効線量評価結果(1979 年度気象データ)

核種	放出量 (Bq)	1979年度の気象データを用いた積算線量(μSv)					合計
		クラウドシャインによる外部被ばく		クラウドの吸入による内部被ばく	グランドシャインによる外部被ばく		
		γ線	β線				
Sr-90	3.516E+08	1.7E-07	2.6E-06	8.9E-01	1.1E-02	9.0E-01	
Y-90(Sr-90)	3.516E+08	2.6E-06	1.2E-05	8.3E-03	6.9E-01	7.0E-01	
Cs-134	7.735E+07	1.1E-04	4.7E-07	2.5E-02	2.1E+00	2.1E+00	
Cs-137	1.524E+09	6.3E-07	1.1E-05	9.4E-01	8.2E-02	1.1E+00	
Ba-137m(Cs-137)	1.524E+09	8.0E-04	3.7E-06	0.0E+00	1.6E+01	1.6E+01	
合計		9.1E-04	2.9E-05	1.9E+00	1.9E+01	2.1E+01	

表 2.14.2.1-6 安全機能喪失時の核種毎、被ばく経路ごとの実効線量評価結果(2020年度気象データ)

核種	放出量 (Bq)	2020年度の気象データを用いた積算線量(μSv)				合計
		クラウドシャインによる外部被ばく		クラウドの吸入による内部被ばく	グランドシャインによる外部被ばく	
		γ線	β線			
Sr-90	3.516E+08	5.6E-07	1.4E-05	4.7E+00	5.5E-02	4.8E+00
Y-90(Sr-90)	3.516E+08	8.6E-06	6.4E-05	4.4E-02	3.7E+00	3.8E+00
Cs-134	7.735E+07	3.5E-04	2.5E-06	1.3E-01	1.1E+01	1.1E+01
Cs-137	1.524E+09	2.1E-06	5.6E-05	5.0E+00	4.4E-01	5.4E+00
Ba-137m(Cs-137)	1.524E+09	2.7E-03	2.0E-05	0.0E+00	8.4E+01	8.4E+01
合計		3.1E-07	1.6E-04	9.9E+00	9.9E+01	1.1E+02

2.1.3 評価結果

遮蔽機能および閉じ込め機能の喪失による影響評価結果は下記の通り。施設・設備の特徴に応じた評価により、耐震クラスは『B+クラス』と設定する。

- 放射性物質質量に基づく評価（地震により安全機能を失った際の公衆への被ばく影響）
地震により安全機能（遮蔽機能・閉じ込め機能）を失った際の公衆被ばく影響が、1週間（7日間）継続した際の公衆被ばく評価を実施。
 - ・ 直接・スカイシャイン線量：0.016mSv
 - ・ 大気拡散による被ばく線量：0.11mSv
 - ・ 公衆被ばく線量(上記合計)：0.126mSv
 - $50 \mu\text{Sv} < \text{公衆被ばく線量} \leq 5\text{mSv}$
耐震クラス分類は、『B+クラス』

- 当該設備の供用期間とリスク低減活動への影響
当該設備は長期的に使用することを見込んでいる。
なお、当該設備が地震により運転できないことによるリスク低減活動への影響は小さく、作業者への被ばく影響も小さいことから、廃炉作業に大きな影響はない。

- 当該設備は多核種除去設備等で処理前の液体等、放出による外部への影響が大きい液体を内包する設備であるが、建屋滞留水を貯留している建屋に設置することから、海洋へ漏出するおそれはない。

以上

滞留水一時貯留設備の耐震性に関する説明書

滞留水一時貯留設備を構成する設備について、耐震性の基本方針に基づき、構造強度の評価を行う。

1. 耐震性の基本方針

滞留水一時貯留設備のうち、液体放射性物質を内包し、地上階に設置する設備については、2021年9月8日および2022年11月16日の原子力規制委員会で示された「東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所における耐震クラス分類と地震動の適用の考え方」を踏まえ、その安全機能が喪失した場合における公衆への放射線影響を評価した結果、直接線・スカイシャイン線による外部被ばく線量と、漏えいした滞留水の一部がダストとして大気中に拡散した場合の外部及び内部被ばく線量を合わせた場合、その実効線量は5mSv以下と評価される。また、長期的に使用する設備に該当することから、耐震B+クラスと位置付けられる。

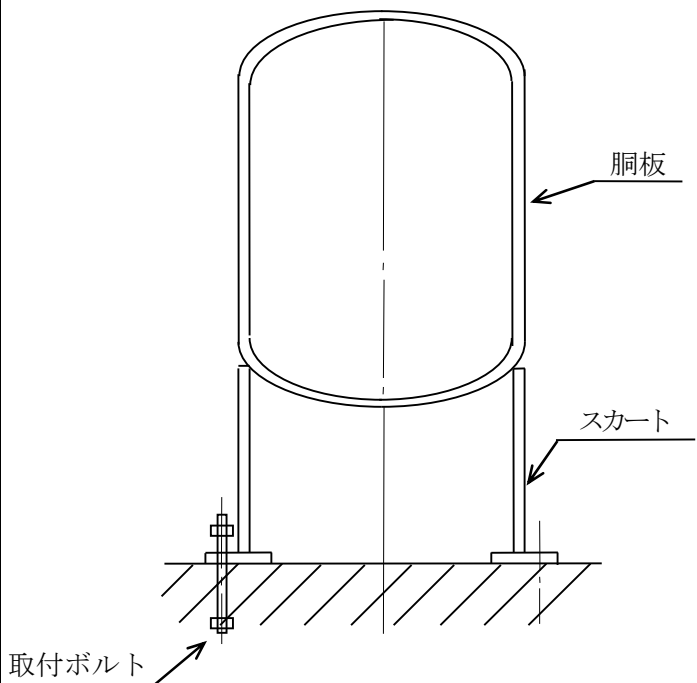
滞留水一時貯留設備は、耐震B+クラスに要求される地震動に対して必要な強度を確保する。主要な機器及び鋼管の耐震性を評価するにあたっては、「原子力発電所耐震設計技術指針（JEAG4601）等」に準拠して構造強度評価を行うことを基本とするが、評価手法、評価基準について実態に合わせたものを採用する。なお、滞留水一時貯留設備に使用する耐圧ホース、ポリエチレン管等については、材料の可撓性により耐震性を確保する。

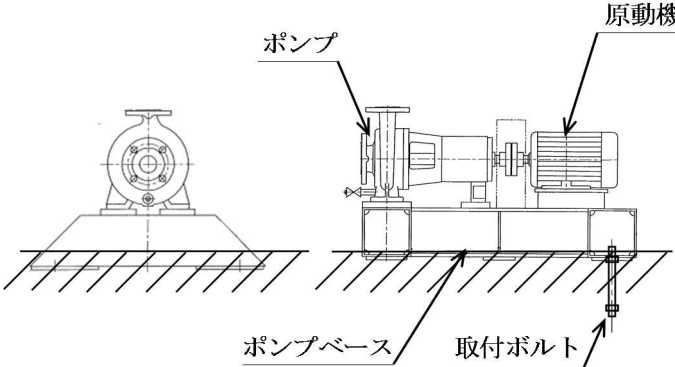
また、滞留水一時貯留設備は、原子炉設置許可申請書及び工事計画認可申請書において、発災前に耐震Bクラスとして許可及び認可を受けたプロセス主建屋に設置する。

1.1 設備重要度による耐震クラス分類

<div style="text-align: right;">耐震クラス別</div> <div style="text-align: left;">系統設備</div>	B+
滞留水一時貯留設備 (1) 容器 (2) ポンプ (3) 配管 (4) スキッド	滞留水受入槽 滞留水一時貯留槽 滞留水供給ポンプ スラッジ排出ポンプ 主配管 滞留水供給ポンプスキッド スラッジ排出ポンプスキッド バルブラック 入口ヘッドスキッド

1.2 構造計画

主要区分	計画の概要		概略構造図	摘要
	基礎・支持構造物	主体構造		
(1) スカート支持たて置円筒形容器	胴をスカートで支持し、スカートを取付ボルトでスキッドに据え付ける。	上面及び下面に鏡板を有するたて置円筒形		<ul style="list-style-type: none"> ・ 滞留水受入槽 ・ 滞留水一時貯留槽

主要区分	計画の概要		概略構造図	摘要
	基礎・支持構造物	主体構造		
(2) 横軸ポンプ	ポンプはポンプベースに固定され、ポンプベースは取付ボルトによりスキッドに据え付ける。	うず巻形		<ul style="list-style-type: none">・ 滞留水供給ポンプ・ スラッジ排出ポンプ

主要区分	計画の概要		概略構造図	摘要
	基礎・支持構造物	主体構造		
(3)スキッド	スキッド架構を基礎ボルトで基礎に据え付ける。	垂直自立形		<ul style="list-style-type: none">・滞留水供給ポンプスキッド・スラッジ排出ポンプスキッド・バルブラック・入口ヘッダスキッド

1.3 設計用地震力

項目	耐震 クラス	静的地震力		動的地震力	
		水 平	鉛 直	水 平	鉛 直
機 器 ・ 配 管 系	B+	$1.8 \cdot C_i^*$	—	1/2Ss450 1/2Sd225	1/2Ss450 1/2Sd225

注記 ※ : C_i は、標準せん断力係数を0.2とし、建物・構造物の振動特性、地盤の種類等を考慮して求められる値とする。

1.4 荷重の組合せと許容限界

荷重の組合せと許容限界は、以下の通りとする。

記号の説明

- D : 死荷重
- P_d : 当該設備に設計上定められた最高使用圧力による荷重
- M_d : 当該設備に設計上定められた機械的荷重
- S_{B+} : B+クラスの設備に適用される地震動より求まる地震力又はB+クラス設備に適用される静的地震力
- $B_A S$: B+クラスの設備の地震時許容応力状態
- S_y : 設計降伏点 設計・建設規格 付録材料図表 Part5表8に規定される値
- S_u : 設計引張強さ 設計・建設規格 付録材料図表 Part5表9に規定される値
- S : 許容引張応力 設計・建設規格 付録材料図表 Part5表5～7に規定される値
- f_t : 許容引張応力 支持構造物(ボルト等を除く。)に対して設計・建設規格SSB-3121.1により規定される値。ボルト等に対して設計・建設規格SSB-3131により規定される値
- f_s : 許容せん断応力 同上
- f_c : 許容圧縮応力 支持構造物(ボルト等を除く。)に対して設計・建設規格SSB-3121.1により規定される値。
- f_b : 許容曲げ応力 同上
- τ_b : ボルトに生じるせん断応力

(1) 容器

耐震 クラス	荷重の組合せ	供用状態 (許容応力状態)	許 容 限 界		適用範囲
			一次一般膜応力	一次膜応力+一次曲げ応力	
B+	D+Pd+Md+S _{B+}	C (BAS)	S _y と0.6・S _u の小さい方。 ただし、オーステナイト系ステンレス鋼及び高ニッケル合金については上記の値と1.2・Sのうち大きい方とする。	S _y ただし、オーステナイト系ステンレス鋼及び高ニッケル合金についてはS _y と1.2・Sのうち大きい方とする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 滞留水受入槽 ・ 滞留水一時貯留槽

(2) 支持構造物 (注1, 注2)

耐震 クラス	荷重の組合せ	供用状態 (許容応力 状態)	許 容 限 界 (ボ ル ト 等 以 外)					許 容 限 界 (ボ ル ト 等)			適用範囲
			一 次 応 力					一 次 応 力			
			引 張	せん断	圧 縮	曲 げ	組 合 せ	引 張	せん断	組 合 せ	
B+	D+Pd+Md+S _{B+}	C (BAS)	1.5・f _t	1.5・f _s	1.5・f _c	1.5・f _b	1.5・f _t	1.5・f _t	1.5・f _s	Min{1.5・f _t , (2.1・f _t -1.6・τ _b)}	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基礎ボルト ・ 取付ボルト ・ スカート

注1：耐圧部に溶接により直接取り付けられる支持構造物であって、耐圧部と一体の応力解析を行うものについては、耐圧部と同じ許容応力とする。

注2：鋼構造設計規準（日本建築学会 2005年改定）等の幅厚比の規定を満足する。

2. 耐震性評価の方法・結果

2.1 容器

本評価は、[4.1 スカート支持たて置円筒形容器の耐震性についての計算書作成の基本方針](#) ~~「2.16.2 増設多核種除去設備 添付資料-3 付録1 スカート支持たて置円筒形容器の耐震性についての計算書作成の基本方針」~~ (耐震設計上の重要度分類B+クラス) に基づいて評価を実施した。評価の結果、胴板、スカート及び取付ボルト、取付部の強度が確保されることを確認した (表-1, 2)。

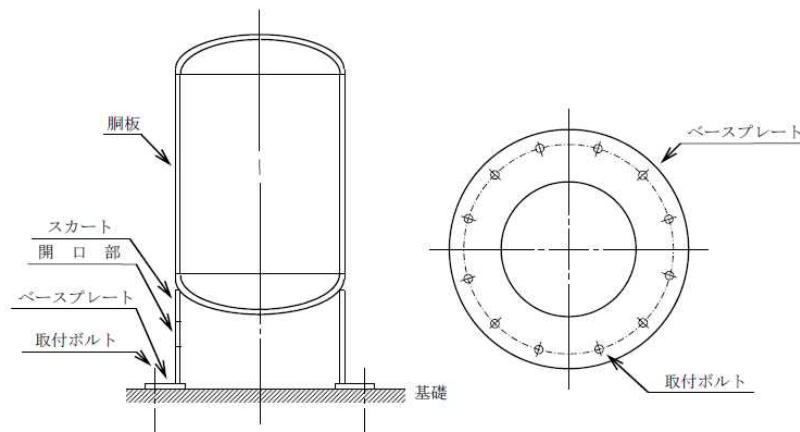


図-1 容器評価箇所

表-1 滞留水受入槽の耐震性評価結果

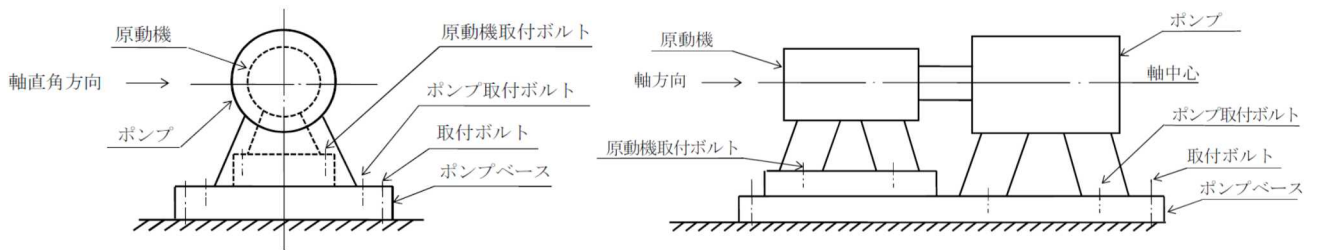
部材	材料	水平震度	鉛直震度	応力	算出応力	許容応力
胴板	SM400B	0.68	0.48	一次一般膜	$\sigma_0 = 9$	$S_a = 240$
				膜+曲げ	$\sigma_0 = 9$	$S_a = 240$
スカート	SM400B	0.68	0.48	組合せ	$\sigma_s = 17$	$F_t = 245$
				圧縮と曲げの組合せ (座屈評価)	$(\eta \cdot \sigma_{s1}/f_c + \eta \cdot \sigma_{s2}/f_b) \leq 1$	0.08
取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_b = 38$	$F_{ts} = 183$
				せん断	$\tau_b = 26$	$F_{sb} = 141$

表－2 滞留水一時貯留槽の耐震性評価結果

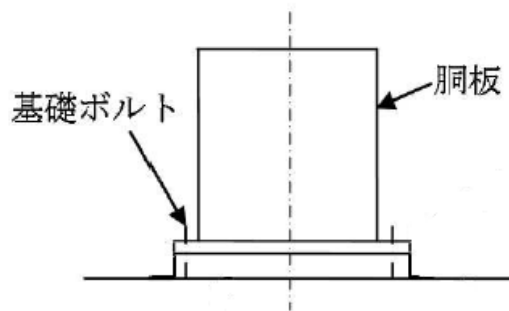
部材	材料	水平震度	鉛直震度	応力	算出応力	許容応力
胴板	SM400B	0.68	0.48	一次一般膜	$\sigma_0 = 11$	$S_a = 240$
				膜＋曲げ	$\sigma_0 = 11$	$S_a = 240$
スカート	SM400B	0.68	0.48	組合せ	$\sigma_s = 14$	$F_t = 245$
				圧縮と曲げの組合せ (座屈評価)	$(\eta \cdot \sigma_{s1}/f_c + \eta \cdot \sigma_{s2}/f_b) \leq 1$	
					0.06	
取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_b = 20$	$F_{ts} = 183$
				せん断	$\tau_b = 36$	$F_{sb} = 141$

2.2 ポンプ，スキッド類

ポンプ，スキッド類の評価は、4.2 横軸ポンプ及びスキッドの耐震性についての計算書作成の基本方針針「2.16.2 増設多核種除去設備 添付資料＝3 付録3 横軸ポンプ及びスキッドの耐震性についての計算書作成の基本方針」(耐震設計上の重要度分類B+クラス)に基づいて評価を実施した。評価の結果，ポンプ取付ボルトの強度が確保されることを確認した(表－3，4，5)。



図－2 ポンプ評価箇所



図－3 スキッド評価箇所

表-3 滞留水供給ポンプの耐震性評価結果

部材	材料	水平震度	鉛直震度	応力	算出応力	許容応力
ポンプ 基礎ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b1} = 7$	$f_{ts1} = 176$
				せん断	$\tau_{b1} = 7$	$f_{sb1} = 135$
ポンプ 取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b2} = -$	$f_{ts2} = 176$
				せん断	$\tau_{b2} = 3$	$f_{sb2} = 135$
原動機 取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b4} = 7$	$f_{ts4} = 176$
				せん断	$\tau_{b4} = 5$	$f_{sb4} = 135$

表-4 スラッジ排出ポンプの耐震性評価結果

部材	材料	水平震度	鉛直震度	応力	算出応力	許容応力
ポンプ 基礎ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b1} = 5$	$f_{ts1} = 176$
				せん断	$\tau_{b1} = 4$	$f_{sb1} = 135$
ポンプ 取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b2} = -$	$f_{ts2} = 176$
				せん断	$\tau_{b2} = 2$	$f_{sb2} = 135$
原動機 取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b4} = 2$	$f_{ts4} = 176$
				せん断	$\tau_{b4} = 1$	$f_{sb4} = 135$

表-5 スキッド類の耐震性評価結果

機器名称	部材	材料	水平震度	鉛直震度	応力	算出応力	許容応力
滞留水供給 ポンプスキッド	スキッド 取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b1} = -$	$f_{ts1} = 176$
					せん断	$\tau_{b1} = 20$	$f_{sb1} = 135$
スラッジ排出 ポンプスキッド	スキッド 取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b1} = -$	$f_{ts1} = 176$
					せん断	$\tau_{b1} = 11$	$f_{sb1} = 135$
バルブラック	スキッド 取付ボルト	SS400	0.68	0.48	引張	$\sigma_{b1} = -$	$f_{ts1} = 176$
					せん断	$\tau_{b1} = 33$	$f_{sb1} = 135$
入口ヘッダ スキッド	スキッド 取付ボルト	SS400	0.65	0.46	引張	$\sigma_{b1} = -$	$f_{ts1} = 176$
					せん断	$\tau_{b1} = 16$	$f_{sb1} = 135$

2.3 主配管（鋼管）

共振による加速度増大の防止を目的とし、対象の配管を多質点モデルとして固有値解析を実施し、固有振動数が20Hz以上となるようなサポート構造を導出したうえで、各対象に一律の震度を与えて地震応力等を求める解析による評価を実施した。評価の結果、算出応力が許容応力以下であることを確認した。

表－6 配管系における各種条件

配管分類	主配管（鋼管）											
配管クラス	クラス3相当											
耐震クラス	B+クラス											
最高使用圧力 [MPa]	1.37			1.0			静水頭			1.37		
最高使用温度 [°C]	40											66
配管材質	STPG370											
配管口径 [A]	80	100	125	150	40	50	100	150	50	100	100	
Sch	40											80

表－7 応力評価結果（主配管（鋼管））

配管分類	主配管（鋼管）				
配管種類	滞留水供給 ポンプスキッド 内配管	スラッジ排出 ポンプスキッド 内配管	入口ヘッド スキッド 内配管	バルブ ラック 内配管	処理装置 移送ライン バイパス配管
算出応力[MPa]	38	50	32	19	27
供用状態における 一次許容応力[MPa]	215	215	215	215	189

3. 耐震クラス分類に関する考え方

滞留水一時貯留設備のうち、液体放射性物質を内包する設備については、その安全機能が喪失した場合における公衆への放射線影響を評価した結果、直接線・スカイシャイン線による外部被ばく線量と、漏えいした滞留水の一部がダストとして大気中に拡散した場合の外部及び内部被ばく線量を合わせた場合、その実効線量は5mSv以下と評価されること、および長期的に使用する設備に該当することから、耐震B+クラスと位置付けられる。

3.1 機能喪失による公衆への放射線影響の程度について

滞留水一時貯留設備について、機能喪失による公衆への放射線影響を確認するため、線量評価を実施した。評価条件については、設備から全量漏えいした場合を想定した条件にて設定する。評価条件における放射性物質量を表-8に示す。

表-8 評価条件における放射性物質量

核種	濃度 (Bq/L)	容積 (m ³)	放射性物質量 (Bq)
Cs-137 (Ba-137m)	1.3E+08	100 ^{※1}	1.3E+13
Cs-134	6.6E+06		6.6E+11
Sr-90 (Y-90)	3.0E+07		3.0E+12

※1 プロセス主建屋4階設置の主要機器の内包水量84m³に対して保守的に設定。

3.1.1 漏えいした放射性物質の直接線・スカイシャイン線による被ばく評価

地震により安全機能（遮へい機能・閉じ込め機能）を失った際の公衆被ばく影響が、1週間（7日間）継続したことを想定する。最寄りの線量評価点（BP7）における直接線・スカイシャイン線による被ばく量は0.016 mSv程度である。

3.1.2 漏えいした放射性物質の大気中への拡散による被ばく評価

地震により安全機能（遮へい機能・閉じ込め機能）を失った際に、漏えいした放射性物質がダストとして放出したことを想定する。実効放出継続時間を2時間と仮定した場合の、最寄り線量評価点（BP7）におけるクラウドシャイン線、グランドシャイン線による外部被ばくおよびクラウドの吸入による内部被ばく量は0.11 mSv程度である。

3.2 B+クラスの設計震度について

a. 静的地震力の評価

機器に対する静的地震力の評価は、水平震度 0.3 に 1.2 を乗じて水平震度は 0.36 とし評価を行う。この評価は、後述する b. に包絡されることから、a. の評価を省略する。

b. 1/2Ss450 機能維持

滞留水一時貯留設備では 1/2Ss450 に対する、設備を設置するプロセス主建屋の各フロアでの水平（2方向）、鉛直、水平2方向の各時刻の応答加速度を重ね合わせの最大応答加速度は以下の通りである。

表－9 プロセス主建屋における設備設置箇所の最大応答加速度

プロセス主建屋	最大応答加速度[cm/s ²]			
	水平 NS 方向	水平 EW 方向	水平 2 方向 重ね合わせ	鉛直方向
4 階	460	545	552	387
2 階	415	516	523	370
1 階	368	460	461	352

このため、機器に対する評価では最大応答加速度に 1.2 を乗じて重力加速度で除した値を評価に用いる震度とし、備を設置するプロセス主建屋の各フロアに応じて以下の通りに評価を行う。

表－10 プロセス主建屋における設備設置箇所の設計震度

プロセス主建屋	水平震度	鉛直震度
4 階	0.68	0.48
2 階	0.65	0.46
1 階	0.57	0.44

c. 1/2Sd225 弾性範囲（共振時のみ）

1/2Sd225 における機器に対する評価では、b. に記載する値に 1/2 を乗じて求め、評価を行う。

4. 耐震性についての計算の計算書作成の基本方針

4.1 スカート支持たて置円筒形容器の耐震性についての計算書作成の基本方針

4.1.1 一般事項

本基本方針は、スカート支持たて置円筒形容器（耐震設計上の重要度分類BクラスおよびB+クラス）の耐震性についての計算方法を示す。

なお、「2.16.2 増設多核種除去設備 添付資料-3 付録1 スカート支持たて置円筒形容器の耐震性についての計算書作成の基本方針」（耐震設計上の重要度分類B+クラス）と同様である。

4.1.1.1 適用基準

本基本方針における計算方法は、原子力発電所耐震設計技術指針 J E A G 4 6 0 1 -1987（日本電気協会 電気技術基準調査委員会 昭和62年8月）に準拠する。

4.1.1.2 計算条件

- (1) 容器及び内容物の質量は重心に集中するものとする。
- (2) 地震力は容器に対して水平方向および鉛直方向に作用するものとする。
- (3) 容器はスカートで支持され、スカートは下端のベースプレートを円周上等ピッチの多数の基礎ボルトで基礎に固定された固定端とする。ここで、基礎については剛となるように設計する。
- (4) 胴とスカートをはりと考え、変形モードは曲げ及びせん断変形を考慮する。
- (5) 容器頂部に水平方向変位を拘束する構造物を設ける場合は、その部分をピン支持とする。
- (6) スカート部材において、マンホール等の開口部があって補強をしていない場合は、欠損の影響を考慮する。

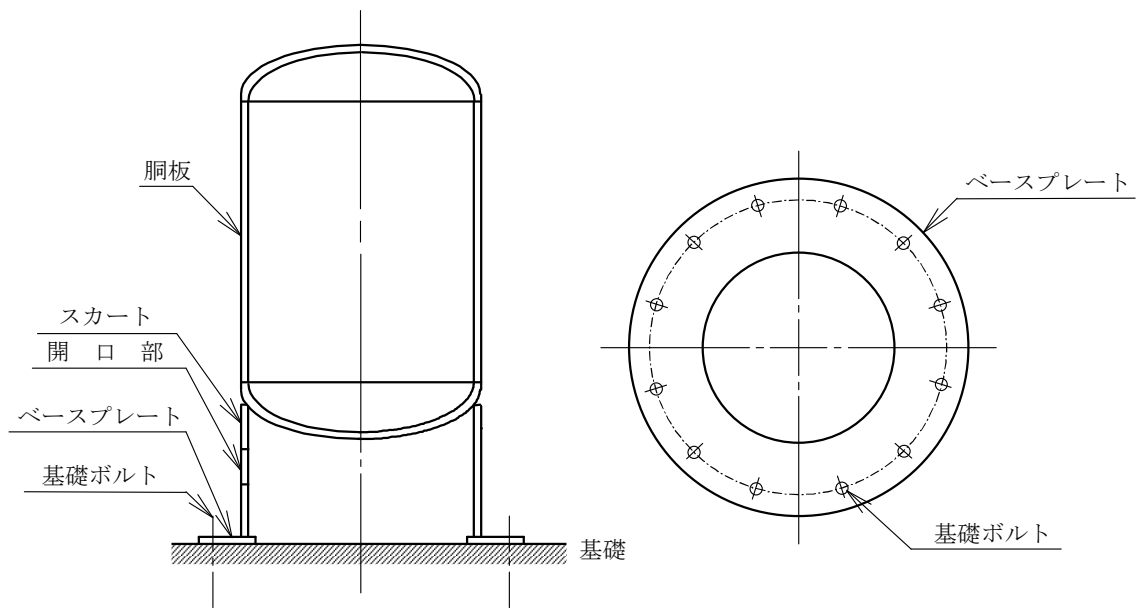


図1-1 概要図

4.1.1.3 記号の定義

記号	記号の説明	単位
A	胴の軸断面積	mm ²
A _b	基礎ボルトの軸断面積	mm ²
A _e	胴の有効せん断断面積	mm ²
A _s	スカートの内径	mm ²
A _{se}	スカートの有効せん断断面積	mm ²
C _c	基礎ボルト計算における係数	—
C _H	水平方向設計震度	—
C _t	基礎ボルト計算における係数	—
C _v	鉛直方向設計震度	—
D _{bi}	ベースプレートの内径	mm
D _{bo}	ベースプレートの外径	mm
D _c	基礎ボルトのピッチ円直径	mm
D _i	胴の内径	mm
D _j	スカートに設けられた各開口部の穴径 ($j=1, 2, 3 \dots j_1$)	mm
D _s	スカートの内径	mm
E	胴の縦弾性係数	MPa
E _s	スカートの縦弾性係数	MPa
e	基礎ボルト計算における係数	—
F	設計・建設規格 SSB-3121.1 又は SSB-3131 に定める値	MPa
F _c	基礎に作用する圧縮力	N
F _t	基礎ボルトに作用する引張力	N
f _b	曲げモーメントに対する許容座屈応力	MPa
f _c	軸圧縮荷重に対する許容座屈応力	MPa
f _{sb}	せん断力のみを受ける基礎ボルトの許容せん断応力	MPa
f _t	スカートの許容引張応力	MPa
f _{to}	引張力のみを受ける基礎ボルトの許容引張応力	MPa
f _{ts}	引張力とせん断力を同時に受ける基礎ボルトの許容引張応力	MPa
G	胴のせん断弾性係数	MPa
G _s	スカートのせん断弾性係数	MPa
g	重力加速度 (=9.80665)	m/s ²
H	水頭	mm
I	胴の断面二次モーメント	mm ⁴
I _s	スカートの断面二次モーメント	mm ⁴

記号	記号の説明	単位
j_1	スカートに設けられた開口部の穴の個数	—
K_H	水平方向ばね定数	N/m
K_V	鉛直方向ばね定数	N/m
k	基礎ボルト計算における中立軸の荷重係数	—
λ	胴のスカート接合点から重心までの距離	mm
λ_1, λ_2	基礎ボルト計算における中立軸から荷重作用点までの距離 (図2-4に示す距離)	mm
λ_r	容器の重心から上端支持部までの長さ	mm
λ_s	スカートの長さ	mm
M_s	スカートに作用する転倒モーメント	N・mm
M_{s1}	スカートの上端部に作用する転倒モーメント	N・mm
M_{s2}	スカートの下端部に作用する転倒モーメント	N・mm
m_o	容器の運転時質量	kg
m_e	容器のスカート接合部から上部の空質量	kg
n	基礎ボルトの本数	—
P_r	最高使用圧力	MPa
Q	重心に作用する任意の水平力	N
Q'	Q により上端の支持部に作用する反力	N
S	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表5に定める値	MPa
S_a	胴の許容応力	MPa
S_u	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表9に定める値	MPa
S_y	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表8に定める値	MPa
s	基礎ボルトと基礎の縦弾性係数比	—
T_H	水平方向固有周期	s
T_V	鉛直方向固有周期	s
t	胴板の厚さ	mm
t_1	基礎ボルト面積相当板幅	mm
t_2	圧縮側基礎相当幅	mm
t_s	スカートの厚さ	mm
Y	スカート開口部の水平断面における最大円周長さ	mm
z	基礎ボルト計算における係数	—
α	基礎ボルト計算における中立軸を定める角度	rad
δ	荷重 Q による容器の上端での変位量	mm
δ'	荷重 Q' による容器の上端での変位量	mm

記号	記号の説明	単位
δ_0	荷重Q, Q' による容器の重心での変位量	mm
η	座屈応力に対する安全率	—
π	円周率	—
ρ'	液体の密度 (=比重×10 ⁻⁶)	kg/mm ³
σ_0	胴の一次一般膜応力の最大値	MPa
σ_{0c}	胴の組合せ圧縮応力	MPa
σ_{0t}	胴の組合せ引張応力	MPa
σ_b	基礎ボルトに生じる引張応力	MPa
σ_c	基礎に生じる圧縮応力	MPa
σ_s	スカートの組合せ応力	MPa
σ_{s1}	スカートの運転時質量による軸方向応力	MPa
σ_{s2}	スカートの曲げモーメントによる軸方向応力	MPa
σ_{s3}	スカートの鉛直方向地震による軸方向応力	MPa
$\sigma_{x1}, \sigma_{\phi 1}$	静水頭又は内圧により胴に生じる軸方向及び周方向応力	MPa
σ_{x2}	胴の運転時質量による軸方向引張応力	MPa
σ_{x3}	胴の空質量による軸方向圧縮応力	MPa
σ_{x4}	地震により胴に生じる軸方向応力	MPa
σ_{x5}	胴の鉛直方向地震による軸方向引張応力	MPa
σ_{x6}	胴の鉛直方向地震による軸方向圧縮応力	MPa
σ_{xc}	胴の軸方向応力の和 (圧縮側)	MPa
σ_{xt}	胴の軸方向応力の和 (引張側)	MPa
σ_{ϕ}	胴の周方向応力の和	MPa
$\sigma_{\phi 2}$	静水頭に鉛直方向地震が加わり胴に生じる周方向応力	MPa
τ	地震により胴に生じるせん断応力	MPa
τ_b	基礎ボルトに生じるせん断応力	MPa
τ_s	地震によりスカートに生じるせん断応力	MPa
$\phi_1(x)$	圧縮荷重に対する許容座屈応力の関数	MPa
$\phi_2(x)$	曲げモーメントに対する許容座屈応力の関数	MPa

注：「設計・建設規格」とは、発電用原子力設備規格（設計・建設規格 J S M E S N C 1 - 2 0 0 5 (2007年追補版含む。)) (日本機械学会 2007年9月) (以下「設計・建設規格」という。)をいう。

4.1.2 計算方法

4.1.2.1 固有周期の計算方法

(1) 計算モデル

本容器は、1.2項より図2-1に示す下端固定の1質点系振動モデルあるいは下端固定上端支持の1質点系振動モデルとして考える。

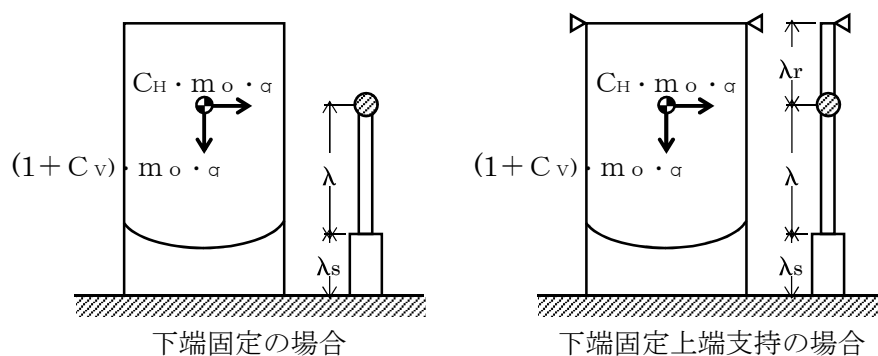


図2-1 固有周期の計算モデル

(2) 水平方向固有周期

a. 下端固定の場合

曲げ及びせん断変形によるばね定数 K_H は次式で求める。

$$K_H = 1000 \left\{ \frac{\lambda^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{1}{3 \cdot E_s \cdot I_s} \cdot (3 \cdot \lambda^2 \cdot \lambda_s + 3 \cdot \lambda \cdot \lambda_s^2 + \lambda_s^3) + \frac{\lambda}{G \cdot A_e} + \frac{\lambda_s}{G_s \cdot A_{s_e}} \right\} \dots\dots\dots (2.1.1)$$

ここで、スカートの開口部 (図2-2参照) による影響を考慮し、胴及びスカートの断面性能は次のように求める。

胴の断面性能は

$$I = \frac{\pi}{8} \cdot (D_i + t)^3 \cdot t \dots\dots\dots (2.1.2)$$

$$A_e = \frac{2}{3} \cdot \pi \cdot (D_i + t) \cdot t \dots\dots\dots (2.1.3)$$

スカートの断面性能は

$$I_s = \frac{\pi}{8} \cdot (D_s + t_s)^3 \cdot t_s - \frac{1}{4} \cdot (D_s + t_s)^2 \cdot t_s \cdot Y \dots\dots\dots (2.1.4)$$

スカート開口部の水平断面における最大円周長さは、
(図2-2及び図2-3参照)

$$Y = \sum_{j=1}^{j_1} (D_s + t_s) \cdot \sin^{-1} \left(\frac{D_j}{D_s + t_s} \right) \quad \dots\dots\dots (2.1.5)$$

$$A_{se} = \frac{2}{3} \cdot \{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s \quad \dots\dots\dots (2.1.6)$$

したがって、固有周期 T_H は次式で求める。

$$T_H = 2 \cdot \pi \cdot \sqrt{\frac{m_0}{K_H}} \quad \dots\dots\dots (2.1.7)$$

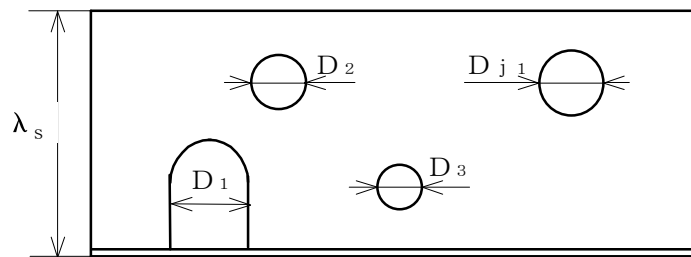


図2-2 スカート開口部の形状

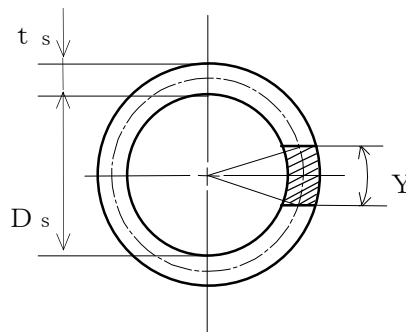


図2-3 スカート開口部の水平断面における最大円周長さ

b. 下端固定上端支持の場合

重心の位置に水平方向の荷重Qが作用したときに上端の支持部に生じる反力Q'は、図2-4に示すように荷重Q及び反力Q'による上端の変位量δとδ'が等しいとして求める。

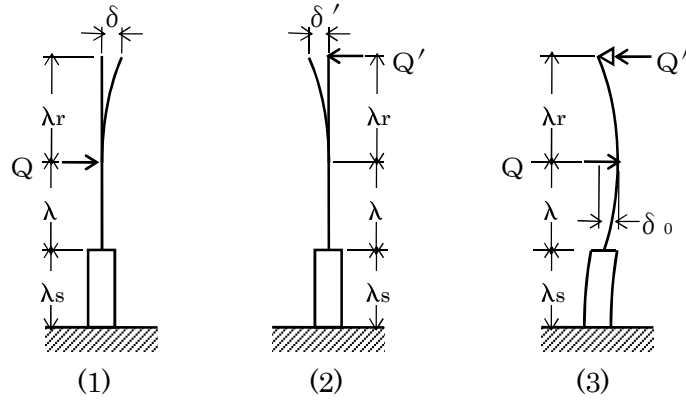


図2-4 下端固定上端支持の場合の変形モデル

図2-4の(1)の場合

$$\delta = \frac{Q \cdot \lambda^2}{6 \cdot E \cdot I} \cdot (2 \cdot \lambda + 3 \cdot \lambda_r) + \frac{Q}{6 \cdot E_s \cdot I_s} \cdot \{2 \cdot \lambda_s^3 + 3 \cdot \lambda_s^2 \cdot \lambda_r + 6 \cdot \lambda_s \cdot \lambda \cdot (\lambda_s + \lambda + \lambda_r)\} + \frac{Q \cdot \lambda}{G \cdot A_e} + \frac{Q \cdot \lambda_s}{G_s \cdot A_{se}} \quad \dots \dots \dots (2.1.8)$$

図2-4の(2)の場合

$$\delta' = \frac{Q' \cdot (\lambda + \lambda_r)^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{Q'}{3 \cdot E_s \cdot I_s} \cdot \{3 \cdot (\lambda + \lambda_r)^2 \cdot \lambda_s + 3 \cdot (\lambda + \lambda_r) \cdot \lambda_s^2 + \lambda_s^3\} + \frac{Q' \cdot (\lambda + \lambda_r)}{G \cdot A_e} + \frac{Q' \cdot \lambda_s}{G_s \cdot A_{se}} \quad \dots \dots \dots (2.1.9)$$

(2.1.8) 式と (2.1.9) 式を等しく置くことにより、

$$Q' = Q \cdot \left\{ \frac{\lambda^2 \cdot (2 \cdot \lambda + 3 \cdot \lambda_r)}{6 \cdot E \cdot I} + \frac{2 \cdot \lambda_s^3 + 3 \cdot \lambda_s^2 \cdot \lambda_r + 6 \cdot \lambda_s \cdot \lambda \cdot (\lambda_s + \lambda + \lambda_r)}{6 \cdot E_s \cdot I_s} \right\}$$

$$\begin{aligned}
& + \frac{\lambda}{G \cdot A_e} + \frac{\lambda_s}{G_s \cdot A_{se}} \left\{ \frac{(\lambda + \lambda_r)^3}{3 \cdot E \cdot I} + \right. \\
& \left. \frac{3 \cdot (\lambda + \lambda_r)^2 \cdot \lambda_s + 3 \cdot (\lambda + \lambda_r) \cdot \lambda_s^2 + \lambda_s^3}{3 \cdot E_s \cdot I_s} \right. \\
& \left. + \frac{\lambda + \lambda_r}{G \cdot A_e} + \frac{\lambda_s}{G_s \cdot A_{se}} \right\} \dots\dots\dots(2.1.10)
\end{aligned}$$

したがって、図 2-4 の(3)に示す重心位置での変位量 δ_0 は図 2-4 の(1)及び(2)の重心位置での変位量の重ね合せから求めることができ、ばね定数 K_H は次式で求める。

$$\begin{aligned}
K_H = \frac{Q}{\delta_0} = 1000 \left\{ \frac{\lambda^3}{3 \cdot E \cdot I} + \frac{3 \cdot \lambda^2 \cdot \lambda_s + 3 \cdot \lambda \cdot \lambda_s^2 + \lambda_s^3}{3 \cdot E_s \cdot I_s} \right. \\
+ \left(1 - \frac{Q'}{Q} \right) \left(\frac{\lambda}{G \cdot A_e} + \frac{\lambda_s}{G_s \cdot A_{se}} \right) - \frac{Q'}{Q} \left(\frac{2 \cdot \lambda^3 + 3 \cdot \lambda^2 \cdot \lambda_r}{6 \cdot E \cdot I} \right. \\
\left. + \frac{3 \cdot \lambda_s^2 \cdot \lambda + \lambda_s^3 + 3 \cdot \lambda_s \cdot \lambda^2 + 3 \cdot \lambda_s \cdot \lambda \cdot \lambda_r + \frac{3}{2} \cdot \lambda_s^2 \cdot \lambda_r}{3 \cdot E_s \cdot I_s} \right) \left. \right\} \\
\dots\dots\dots(2.1.11)
\end{aligned}$$

固有周期は (2.1.7) 式により求める。

(3) 鉛直方向固有周期

軸方向変形によるばね定数 K_V は次式で求める。

$$K_V = 1000 \left\{ \frac{\lambda}{A \cdot E} + \frac{\lambda_s}{A_s \cdot E_s} \right\} \dots\dots\dots(2.1.12)$$

$$A = \pi \cdot (D_i + t) \cdot t \dots\dots\dots(2.1.13)$$

$$A_s = \{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s \dots\dots\dots(2.1.14)$$

したがって、固有周期 T_V は次式で求める。

$$T_V = 2 \cdot \pi \cdot \sqrt{\frac{m_0}{K_V}} \dots\dots\dots(2.1.15)$$

4.1.2.2 応力の計算方法

応力計算において、静的地震力を用いる場合は、絶対値和を用い、動的地震力を用いる場合は、SRS法を用いることができる。なお、滞留水一時貯留設備の応力計算においては静的地震力を用いることから、絶対値和を用いる。

4.1.2.2.1 胴の応力

(1) 静水頭又は内圧による応力

静水頭による場合（鉛直方向地震時を含む。）

$$\sigma_{\phi 1} = \frac{\rho' \cdot g \cdot H \cdot D_i}{2 \cdot t} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.1)$$

$$\sigma_{\phi 2} = \frac{\rho' \cdot g \cdot H \cdot D_i \cdot C_v}{2 \cdot t} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.2)$$

$$\sigma_{x 1} = 0 \quad \dots\dots\dots(2.2.1.3)$$

内圧による場合

$$\sigma_{\phi 1} = \frac{P_r \cdot (D_i + 1.2 \cdot t)}{2 \cdot t} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.4)$$

$$\sigma_{\phi 2} = 0 \quad \dots\dots\dots(2.2.1.5)$$

$$\sigma_{x 1} = \frac{P_r \cdot (D_i + 1.2 \cdot t)}{4 \cdot t} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.6)$$

(2) 運転時質量及び鉛直方向地震による応力

胴がスカートと接合する点を境界として、上部には胴自身の質量による圧縮応力が、下部には下部の胴自身の質量と内容物の質量による引張応力が生じる。

下部の胴について

$$\sigma_{x 2} = \frac{(m_o - m_e) \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.7)$$

$$\sigma_{x 5} = \frac{(m_o - m_e) \cdot g \cdot C_v}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.8)$$

上部の胴について

$$\sigma_{x 3} = \frac{m_e \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.9)$$

$$\sigma_{x 6} = \frac{m_e \cdot g \cdot C_v}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.10)$$

(3) 水平方向地震による応力

水平方向の地震力により胴はスカート接合部で最大となる曲げモーメントを受ける。この曲げモーメントによる軸方向応力と地震力によるせん断応力は次のように求める。

a. 下端固定の場合

$$\sigma_{x4} = \frac{4 \cdot C_H \cdot m_o \cdot g \cdot \lambda}{\pi \cdot (D_i + t)^2 \cdot t} \dots\dots\dots(2.2.1.11)$$

$$\tau = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_o \cdot g}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \dots\dots\dots(2.2.1.12)$$

b. 下端固定上端支持の場合

$$\sigma_{x4} = \frac{4 \cdot C_H \cdot m_o \cdot g \cdot \left| \lambda - \frac{Q'}{Q} \cdot (\lambda + \lambda_r) \right|}{\pi \cdot (D_i + t)^2 \cdot t} \dots\dots\dots(2.2.1.13)$$

$$\tau = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_o \cdot g \cdot \left(1 - \frac{Q'}{Q} \right)}{\pi \cdot (D_i + t) \cdot t} \dots\dots\dots(2.2.1.14)$$

(4) 組合せ応力

(1)～(3)によって求めた胴の応力は以下のように組み合わせる。

a. 一次一般膜応力

(a) 組合せ引張応力

$$\sigma_{\phi} = \sigma_{\phi 1} + \sigma_{\phi 2} \dots\dots\dots(2.2.1.15)$$

$$\sigma_{ot} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_{\phi} + \sigma_{xt} + \sqrt{(\sigma_{\phi} - \sigma_{xt})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\} \dots\dots\dots(2.2.1.16)$$

ここで,

【絶対値和】

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} + \sigma_{x2} + \sigma_{x4} + \sigma_{x5} \dots\dots\dots(2.2.1.17)$$

【SRSS法】

$$\sigma_{xt} = \sigma_{x1} + \sigma_{x2} + \sqrt{\sigma_{x4}^2 + \sigma_{x5}^2} \dots\dots\dots(2.2.1.18)$$

(b) 組合せ圧縮応力

σ_{xc} が正の値 (圧縮側) のとき, 次の組合せ圧縮応力を求める。

$$\sigma_{\phi} = -\sigma_{\phi 1} - \sigma_{\phi 2} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.19)$$

$$\sigma_{oc} = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \sigma_{\phi} + \sigma_{xc} + \sqrt{(\sigma_{\phi} - \sigma_{xc})^2 + 4 \cdot \tau^2} \right\} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.20)$$

ここで,

【絶対値和】

$$\sigma_{xc} = -\sigma_{x1} + \sigma_{x3} + \sigma_{x4} + \sigma_{x6} \quad \dots\dots(2.2.1.21)$$

【SRSS法】

$$\sigma_{xc} = -\sigma_{x1} + \sigma_{x3} + \sqrt{\sigma_{x4}^2 + \sigma_{x6}^2} \quad \dots(2.2.1.22)$$

したがって、胴の組合せ一次一般膜応力の最大値は、絶対値和、SRSS法それぞれに対して、

$$\sigma_o = \text{Max} \{ \text{組合せ引張応力} (\sigma_{ot}), \text{組合せ圧縮応力} (\sigma_{oc}) \} \quad \dots\dots\dots(2.2.1.23)$$

とする。

一次応力は一次一般膜応力と同じになるので省略する。

4.1.2.2.2 スカートの応力

(1) 運転時質量及び鉛直方向地震による応力

スカート底部に生じる運転時質量及び鉛直方向地震による圧縮応力は次式で求める。

$$\sigma_{s1} = \frac{m_o \cdot g}{\{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s} \quad \dots\dots\dots(2.2.2.1)$$

$$\sigma_{s3} = \frac{m_o \cdot g \cdot C_v}{\{ \pi \cdot (D_s + t_s) - Y \} \cdot t_s} \quad \dots\dots\dots(2.2.2.2)$$

(2) 水平方向地震による応力

水平方向の地震力によりスカートには曲げモーメントが作用する。この曲げモーメントによる軸方向応力と地震力によるせん断応力は次式で求める。

a. 下端固定の場合

$$\sigma_{s2} = \frac{M_s}{(D_s + t_s) \cdot t_s \cdot \left\{ \frac{\pi}{4} \cdot (D_s + t_s) - \frac{Y}{2} \right\}} \quad \dots\dots(2.2.2.3)$$

$$\tau_s = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g}{\{\pi \cdot (D_s + t_s) - Y\} \cdot t_s} \dots\dots\dots(2.2.2.4)$$

ここで,

$$M_s = C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot (\lambda_s + \lambda) \dots\dots\dots(2.2.2.5)$$

b. 下端固定上端支持の場合

軸方向応力は (2.2.2.3) 式で表されるが, 曲げモーメント M_s は次の M_{s1}

又は

M_{s2} のいずれか大きい方の値とする。

$$M_{s1} = C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \left| \lambda - \frac{Q'}{Q} \cdot (\lambda + \lambda_r) \right| \dots\dots\dots(2.2.2.6)$$

$$M_{s2} = C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \left| \lambda_s + \lambda - \frac{Q'}{Q} \cdot (\lambda_s + \lambda + \lambda_r) \right| \dots\dots\dots(2.2.2.7)$$

$$\tau_s = \frac{2 \cdot C_H \cdot m_0 \cdot g \cdot \left(1 - \frac{Q'}{Q} \right)}{\{\pi \cdot (D_s + t_s) - Y\} \cdot t_s} \dots\dots\dots(2.2.2.8)$$

(3) 組合せ応力

組合せ応力は次式で求める。

【絶対値和】

$$\sigma_s = \sqrt{(\sigma_{s1} + \sigma_{s2} + \sigma_{s3})^2 + 3 \cdot \tau_s^2} \dots\dots\dots(2.2.2.9)$$

【SRSS法】

$$\sigma_s = \sqrt{(\sigma_{s1} + \sqrt{\sigma_{s2}^2 + \sigma_{s3}^2})^2 + 3 \cdot \tau_s^2} \dots\dots\dots(2.2.2.10)$$

4.1.2.2.3 基礎ボルトの応力

(1) 引張応力

基礎に作用する転倒モーメント M_s は、下端固定の場合、(2.2.2.5)式を、
 下端固定上端支持の場合は(2.2.2.6)式又は(2.2.2.7)式を用いる。

転倒モーメントが作用した場合に生じる基礎ボルトの引張荷重と基礎部の圧縮荷重については、荷重と変位量の釣合い条件を考慮することにより求める。

(図2-5参照)

以下にその手順を示す。

- a. σ_b 及び σ_c を仮定して基礎ボルトの応力計算における中立軸の荷重係数 k を求める。

$$k = \frac{1}{1 + \frac{\sigma_b}{s \cdot \sigma_c}} \dots\dots\dots(2.2.3.1)$$

- b. 基礎ボルトの応力計算における中立軸を定める角度 α を求める。

$$\alpha = \cos^{-1} (1 - 2 \cdot k) \dots\dots\dots(2.2.3.2)$$

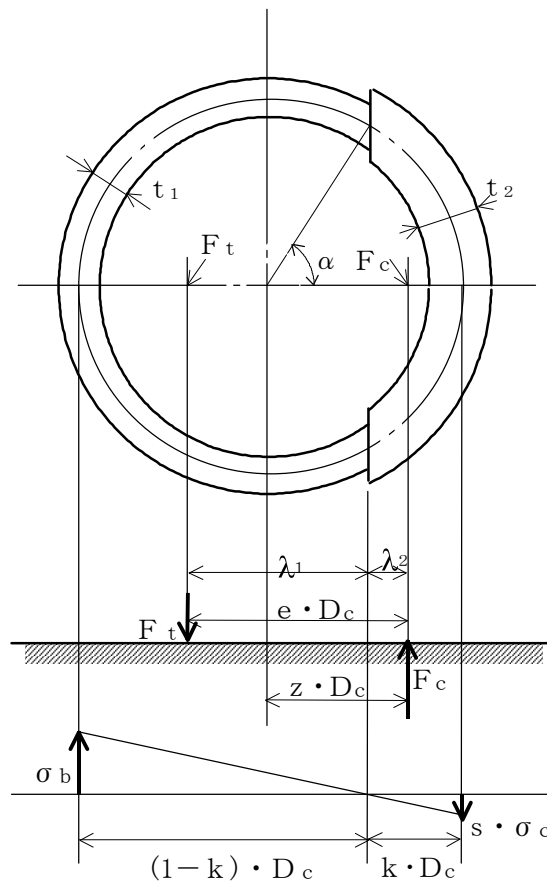


図2-5 基礎の荷重説明図

c. 各定数 e , z , C_t 及び C_c を求める。

$$e = \frac{1}{2} \cdot \left\{ \frac{(\pi - \alpha) \cdot \cos^2 \alpha + \frac{1}{2} \cdot (\pi - \alpha) + \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha}{(\pi - \alpha) \cdot \cos \alpha + \sin \alpha} + \frac{\frac{1}{2} \cdot \alpha - \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha + \alpha \cdot \cos^2 \alpha}{\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha} \right\} \quad (2.2.3.3)$$

$$z = \frac{1}{2} \cdot \left(\cos \alpha + \frac{\frac{1}{2} \cdot \alpha - \frac{3}{2} \cdot \sin \alpha \cdot \cos \alpha + \alpha \cdot \cos^2 \alpha}{\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha} \right) \quad (2.2.3.4)$$

$$C_t = \frac{2 \cdot \{(\pi - \alpha) \cdot \cos \alpha + \sin \alpha\}}{1 + \cos \alpha} \quad (2.2.3.5)$$

$$C_c = \frac{2 \cdot (\sin \alpha - \alpha \cdot \cos \alpha)}{1 - \cos \alpha} \quad (2.2.3.6)$$

d. 各定数を用いて F_t 及び F_c を求める。

【絶対値和】

$$F_t = \frac{M_s - (1 - C_v) \cdot m_0 \cdot g \cdot z \cdot D_c}{e \cdot D_c} \quad (2.2.3.7)$$

$$F_c = F_t + (1 - C_v) \cdot m_0 \cdot g \quad (2.2.3.8)$$

【SRSS法】

$$F_t = \frac{\sqrt{M_s^2 + (C_v \cdot m_0 \cdot g \cdot z \cdot D_c)^2}}{e \cdot D_c} - \frac{z}{e} \cdot m_0 \cdot g \quad (2.2.3.9)$$

$$F_c = \frac{\sqrt{M_s^2 + (C_v \cdot m_0 \cdot g \cdot (z - e) \cdot D_c)^2}}{e \cdot D_c} + \left(1 - \frac{z}{e}\right) \cdot m_0 \cdot g \quad (2.2.3.10)$$

基礎ボルトに引張力が作用しないのは、 α が π に等しくなったときであり、(2.2.3.3) 式及び (2.2.3.4) 式において α を π に近づけた場合の値 $e = 0.75$ 及び $z = 0.25$ を (2.2.3.7) 式又は (2.2.3.9) 式に代入し、得られる F_t の値によって引張力の有無を次のように判定する。

$F_t \leq 0$ ならば引張力は作用しない。

$F_t > 0$ ならば引張力が作用しているので次の計算を行う。

e. σ_b 及び σ_c を求める。

$$\sigma_b = \frac{2 \cdot F_t}{t_1 \cdot D_c \cdot C_t} \dots\dots\dots (2.2.3.11)$$

$$\sigma_c = \frac{2 \cdot F_c}{(t_2 + s \cdot t_1) \cdot D_c \cdot C_c} \dots\dots\dots (2.2.3.12)$$

ここで、

$$t_1 = \frac{n \cdot A_b}{\pi \cdot D_c} \dots\dots\dots (2.2.3.13)$$

$$t_2 = \frac{1}{2} \cdot (D_{bo} - D_{bi}) - t_1 \dots\dots\dots (2.2.3.14)$$

σ_b 及び σ_c がa項にて仮定した値と十分に近似していることを確認する。この場合の σ_b 及び σ_c を基礎ボルトと基礎に生じる応力とする。

(2) せん断応力

a. 下端固定の場合

$$\tau_b = \frac{C_H \cdot m_o \cdot g}{n \cdot A_b} \dots\dots\dots (2.2.3.15)$$

b. 下端固定上端支持の場合

$$\tau_b = \frac{C_H \cdot m_o \cdot g \cdot \left(1 - \frac{Q'}{Q}\right)}{n \cdot A_b} \dots\dots\dots (2.2.3.16)$$

4.1.3 評価方法

4.1.3.1 固有周期の評価

4.1.2.1項で求めた固有周期から、水平方向及び鉛直方向の設計震度を求める。

4.1.3.2 応力の評価

4.1.3.2.1 胴の応力評価

4.1.2.2.1項で求めた組合せ応力が胴の最高使用温度における許容応力 S_a 以下であること。

応力の種類	許容応力 S_a
一次一般膜応力	設計降伏点 S_y と設計引張強さ S_u の0.6倍のいずれか小さい方の値。ただし、オーステナイト系ステンレス鋼及び高ニッケル合金にあつては許容引張応力 S の1.2倍の方が大きい場合は、この大きい方の値とする。

一次応力の評価は算出応力が一次一般膜応力と同じ値であるので省略する。

4.1.3.2.2 スカートの応力評価

- (1) 4.1.2.2.2項で求めたスカートの組合せ応力が許容引張応力 f_t 以下であること。

$$f_t = \frac{F}{1.5} \cdot 1.5 \quad \dots\dots\dots (3.2.2.1)$$

- (2) 圧縮膜応力（圧縮応力と曲げによる圧縮側応力の組合せ）は次式を満足すること。（座屈の評価）

$$\frac{\eta \cdot (\sigma_{s1} + \sigma_{s3})}{f_c} + \frac{\eta \cdot \sigma_{s2}}{f_b} \leq 1 \quad \dots\dots\dots (3.2.2.2)$$

ここで、 f_c は次による。

$$\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_c = F \quad \dots\dots\dots (3.2.2.3)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} < \frac{8000 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_c = F \cdot \left[1 - \frac{1}{6800 \cdot g} \cdot \left\{ F - \phi_1 \left(\frac{8000 \cdot g}{F} \right) \right\} \right. \\ \left. \cdot \left(\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \right] \quad \dots\dots\dots (3.2.2.4)$$

$$\frac{8000 \cdot g}{F} \leq \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq 800 \quad \text{のとき}$$

$$f_c = \phi_1 \left(\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \right) \quad \dots\dots\dots (3.2.2.5)$$

ただし、 $\phi_1(x)$ は次の関数とする。

$$\phi_1(x) = 0.6 \cdot \frac{E_s}{x} \cdot \left[1 - 0.901 \cdot \left\{ 1 - \exp \left(-\frac{1}{16} \cdot \sqrt{x} \right) \right\} \right] \quad \dots\dots$$

$$\dots\dots\dots (3.2.2.6)$$

また、 f_b は次による。

$$\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_b = F \quad \dots\dots\dots (3.2.2.7)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} < \frac{9600 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$f_b = F \cdot \left[1 - \frac{1}{8400 \cdot g} \cdot \left\{ F - \phi_2 \left(\frac{9600 \cdot g}{F} \right) \right\} \right. \\ \left. \cdot \left(\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \right] \quad \dots\dots\dots (3.2.2.8)$$

$$\frac{9600 \cdot g}{F} \leq \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq 800 \quad \text{のとき}$$

$$f_b = \phi_2 \left(\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \right) \quad \dots\dots\dots (3.2.2.9)$$

ただし、 $\phi_2(x)$ は次の関数とする。

$$\phi_z(x) = 0.6 \cdot \frac{E_s}{x} \cdot \left[1 - 0.731 \cdot \left\{ 1 - \exp\left(-\frac{1}{16} \cdot \sqrt{x}\right) \right\} \right] \dots$$

.....(3.2.2.10)

η は安全率で次による。

$$\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \leq \frac{1200 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1 \quad \dots\dots\dots(3.2.2.11)$$

$$\frac{1200 \cdot g}{F} < \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} < \frac{8000 \cdot g}{F} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1 + \frac{0.5 \cdot F}{6800 \cdot g} \cdot \left(\frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} - \frac{1200 \cdot g}{F} \right) \quad \dots(3.2.2.12)$$

$$\frac{8000 \cdot g}{F} \leq \frac{D_s + 2 \cdot t_s}{2 \cdot t_s} \quad \text{のとき}$$

$$\eta = 1.5 \quad \dots\dots\dots(3.2.2.13)$$

4.1.3.2.3 基礎ボルトの応力評価

4.1.2.2.3項で求めた基礎ボルトの引張応力 σ_b は次式より求めた許容引張応力 f_{ts} 以下であること。

せん断応力 τ_b はせん断力のみを受ける基礎ボルトの許容せん断応力 f_{sb} 以下であること。

$$f_{ts} = 1.4 \cdot f_{to} - 1.6 \cdot \tau_b \quad \dots\dots\dots(3.2.3.1)$$

かつ、

$$f_{ts} \leq f_{to} \quad \dots\dots\dots(3.2.3.2)$$

ただし、 f_{to} 及び f_{sb} は下表による。

	許容引張応力 f_{to}	許容せん断応力 f_{sb}
計 算 式	$\frac{F}{2} \cdot 1.5$	$\frac{F}{1.5 \cdot \sqrt{3}} \cdot 1.5$

4.2 横軸ポンプ及びスキッドの耐震性についての計算書作成の基本方針

4.2.1 一般事項

本基本方針は、横軸ポンプ（耐震設計上の重要度分類BクラスおよびB+クラス）の耐震性についての計算方法を示す。なお、本基本方針はスキッドにも適用する。（その場合は、ポンプをスキッドと読み替える。）

なお、「2.16.2 増設多核種除去設備 添付資料-3 付録3 横軸ポンプ及びスキッドの耐震性についての計算書作成の基本方針」（耐震設計上の重要度分類B+クラス）と同様である。

4.2.1.1 適用基準

本基本方針における計算方法は、原子力発電所耐震設計技術指針 J E A G 4 6 0 1-1987（日本電気協会 電気技術基準調査委員会 昭和62年8月）（以下「指針」という。）に準拠する。

4.2.1.2 計算条件

- (1) ポンプ及び内容物の質量は重心に集中するものとする。
- (2) 地震力はポンプに対して水平方向および鉛直方向から作用するものとする。
- (3) ポンプは基礎ボルトで基礎に固定された固定端とする。ここで、基礎については剛となるように設計する。
- (4) 転倒方向は図1-1 概要図における軸直角方向及び軸方向について検討し、計算書には計算結果の厳しい方を記載する。

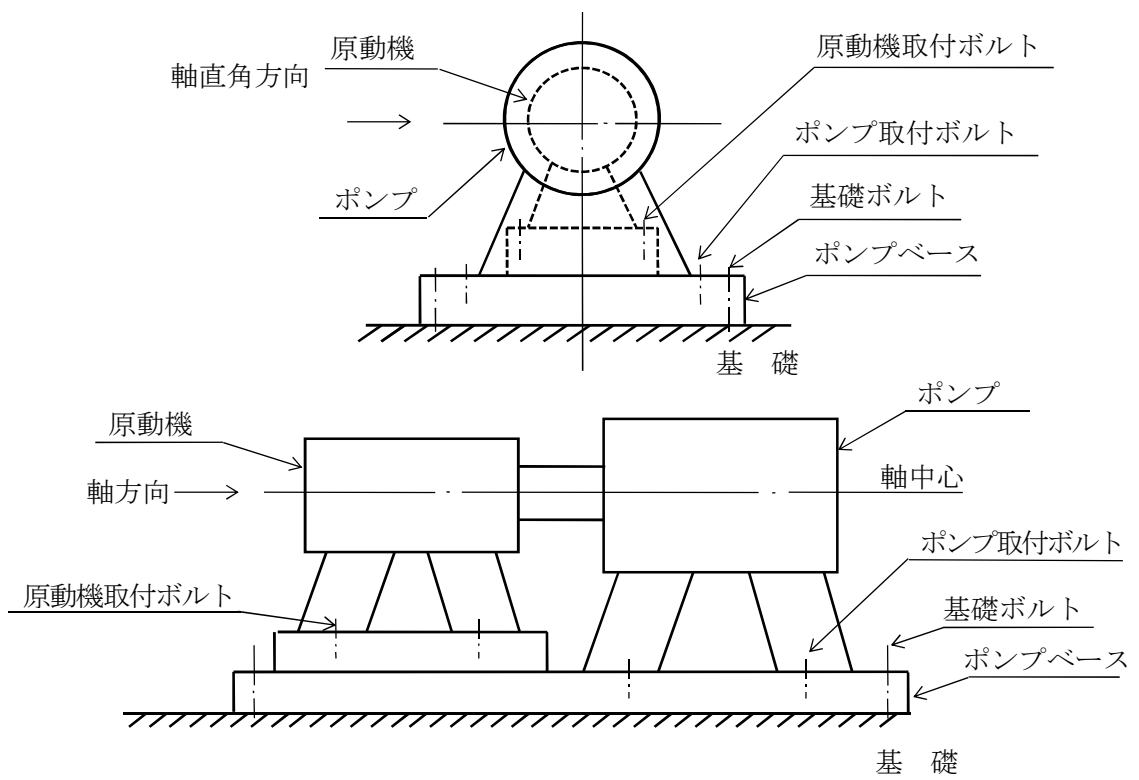


図 1-1 概 要 図

4.2.1.3 記号の説明

記号	記号の説明	単位
A_{bi}	ボルトの軸断面積	mm^2
C_H	水平方向設計震度	—
C_V	鉛直方向設計震度	—
C_m	原動機振動による震度	—
C_p	ポンプ振動による震度	—
d_i	ボルトの呼び径	mm
F_i	設計・建設規格 SSB-3131 に定める値	MPa
F_{bi}	ボルトに作用する引張力 (1本当たり)	N
f_{sbi}	せん断力のみを受けるボルトの許容せん断応力	MPa
f_{toi}	引張力のみを受けるボルトの許容引張応力	MPa
f_{tsi}	引張力とせん断力を同時に受けるボルトの許容引張応力	MPa
g	重力加速度 (=9.80665)	m/s^2
H_m	原動機予想最大両振幅	μm
H_p	ポンプ予想最大両振幅	μm
h_i	据付面又は取付面から重心までの距離	mm
λ_{li}	重心とボルト間の水平方向距離*	mm
λ_{zi}	重心とボルト間の水平方向距離*	mm
M_m	原動機回転により作用するモーメント	$\text{N}\cdot\text{mm}$
M_p	ポンプ回転により作用するモーメント	$\text{N}\cdot\text{mm}$
m_i	運転時質量	kg
N_m	原動機回転速度 (同期回転速度)	min^{-1}
N_p	ポンプ回転速度	min^{-1}
n_i	ボルトの本数	—
n_{fi}	評価上引張力を受けるとして期待するボルトの本数	—
P	原動機出力	kW
Q_{bi}	ボルトに作用するせん断力	N
S_{ui}	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表9 に定める値	MPa
S_{yi}	設計・建設規格 付録材料図表 Part5 表8 に定める値	MPa
π	円周率	—
σ_{bi}	ボルトに生じる引張応力	MPa
τ_{bi}	ボルトに生じるせん断応力	MPa

注 1: 「設計・建設規格」とは、発電用原子力設備規格（設計・建設規格 JSME S NC 1-2005 (2007 年追補版含む。)) (日本機械学会 2007 年 9 月) (以下「設計・建設規格」という。) をいう。

注 2: A_{bi} , d_i , F_i , F_{bi} , f_{sbi} , f_{toi} , f_{tsi} , λ_{1i} , λ_{2i} , n_i , n_{fi} , Q_{bi} , S_{ui} , S_{yi} , σ_{bi} 及び τ_{bi} の添字 i の意味は、以下のとおりとする。

$i = 1$: ポンプ基礎ボルト (ポンプと原動機のベースが共通である場合を含む。)

$i = 2$: ポンプ取付ボルト

$i = 3$: 原動機基礎ボルト

$i = 4$: 原動機取付ボルト

なお、ポンプと原動機間に増速機がある場合は、次のように定義する。

$i = 5$: 増速機基礎ボルト

$i = 6$: 増速機取付ボルト

注 3: h_i 及び m_i の添字 i の意味は、以下のとおりとする。

$i = 1$: ポンプ据付面

$i = 2$: ポンプ取付面

$i = 3$: 原動機据付面

$i = 4$: 原動機取付面

なお、ポンプと原動機間に増速機がある場合は、次のように定義する。

$i = 5$: 増速機据付面

$i = 6$: 増速機取付面

注記*: $\lambda_{1i} \leq \lambda_{2i}$

4.2.2 計算方法

4.2.2.1 固有周期の計算方法

横軸ポンプは構造的に 1 個の大きなブロック状をしており、重心の位置がブロック状のほぼ中心にあり、かつ、下面が基礎ボルトにて固定されている。

したがって、全体的に一つの剛体と見なせるため、固有周期は十分に小さく、固有周期の計算は省略する。

4.2.2.2 応力の計算方法

4.2.2.2.1 ボルトの応力

ボルトの応力は地震による震度、ポンプ振動による震度及びポンプ回転により作用するモーメントによって生じる引張力とせん断力について計算する。

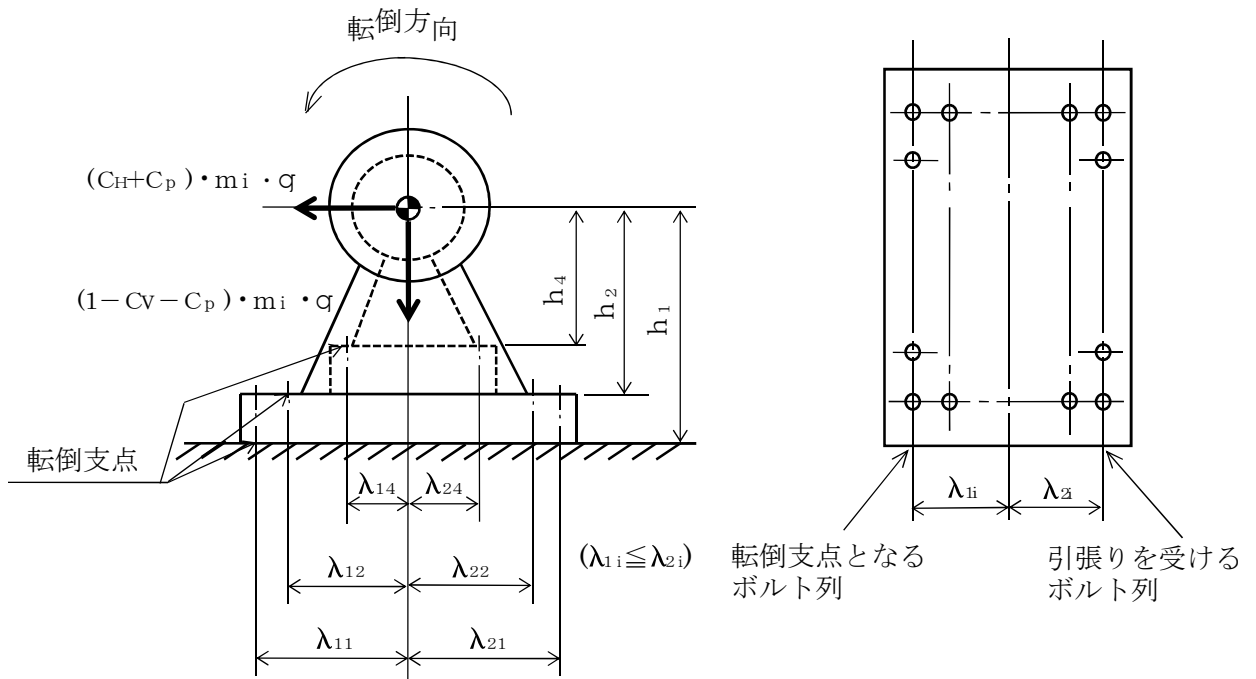


図 2-1 計算モデル (軸直角方向転倒)

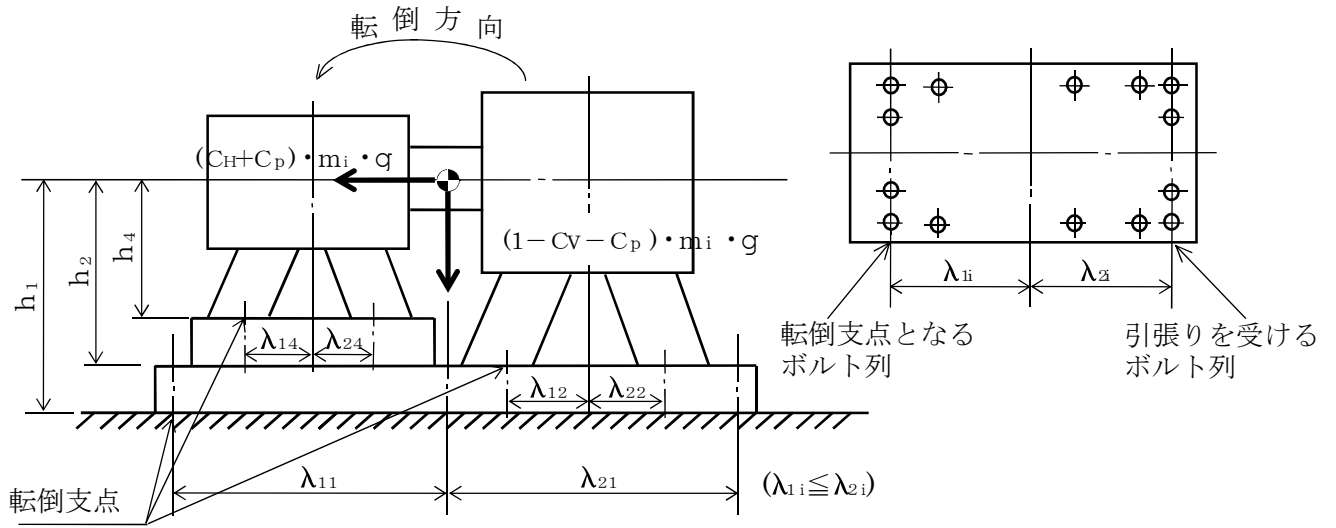


図 2-2 計算モデル (軸方向転倒)

(1) 引張応力

ボルトに対する引張力は最も厳しい条件として、図 2-1 及び図 2-2 で最外列のボルトを支点とする転倒を考え、これを片側の最外列のボルトで受けるものとして計算する。

なお、ポンプと原動機のベースが共通である場合の基礎ボルト (i=1) 及び計算モデル図 2-2 の場合のボルト (i=1~6) については、ポンプ回転によるモーメントは作用しない。

引張力

$$F_{b\ i} = \frac{(C_H + C_P) \cdot m_i \cdot g \cdot h_i + M_p - (1 - C_V - C_P) \cdot m_i \cdot g \cdot l_{1\ i}}{n_{f\ i} \cdot (l_{1\ i} + l_{2\ i})} \dots\dots\dots (2.2.1)$$

λ_{ii} が負となる場合、(2.2.1) 式中の $(1 - C_V - C_P)$ を $(1 - C_V + C_P)$ に置き換える。

増速機のボルト (i=5 及び 6) の場合、(2.2.1) 式中の M_p は $(M_p + M_m)$ 、

C_p は $(C_p + C_m)$ と置き換える。

ここで、ポンプ回転により作用するモーメント M_p は次式で求める。(M_m についても同様で、次式で求める。この場合、 N_p は N_m と置き換える。)

$$M_p = \left(\frac{60}{2 \cdot \pi \cdot N_p} \right) \cdot 10^6 \cdot P \dots\dots\dots (2.2.2)$$

$$(1kW = 10^6 N \cdot mm/s)$$

また、 C_p は振動による振幅及び回転速度を考慮して定める値で、次式で

求める。

(C_m についても同様に、次式で求める。この場合、 H_p は H_m 、 N_p は N_m と置き換える。)

$$C_p = \frac{\frac{1}{2} \cdot \frac{H_p}{1000} \cdot \left(2 \cdot \pi \cdot \frac{N_p}{60}\right)^2}{g \cdot 1000} \dots\dots\dots (2.2.3)$$

引張応力

$$\sigma_{bi} = \frac{F_{bi}}{A_{bi}} \dots\dots\dots (2.2.4)$$

ここで、ボルトの軸断面積 A_{bi} は

$$A_{bi} = \frac{\pi}{4} \cdot d_i^2 \dots\dots\dots (2.2.5)$$

ただし、 F_{bi} が負のときボルトには引張力が生じないので、引張応力の計算は行わない。

(2) せん断応力

ボルトに対するせん断力はボルト全本数で受けるものとして計算する。

せん断力

$$Q_{bi} = (C_H + C_p) \cdot m_i \cdot g \dots\dots\dots (2.2.6)$$

増速機のボルト($i=5$ 及び 6)の場合、(2.2.6) 式中の C_p は($C_p + C_m$)と置き換える。

せん断応力

$$\tau_{bi} = \frac{Q_{bi}}{n_i \cdot A_{bi}} \dots\dots\dots (2.2.7)$$

4.2.3 評価方法

4.2.3.1 応力の評価

4.2.3.1.1 ボルトの応力評価

4.2.2.2.1 項で求めたボルトの引張応力 σ_{bi} は次式より求めた許容引張応力

$f_{t\ s\ i}$ 以下であること。

せん断応力 τ_{bi} はせん断力のみを受けるボルトの許容せん断応力 $f_{s\ bi}$ 以下であること。

$$f_{t\ s\ i} = 1.4 \cdot f_{t\ oi} - 1.6 \cdot \tau_{bi} \dots\dots\dots (3.1.1)$$

かつ,

$$f_{t\ s\ i} \leq f_{t\ oi} \dots\dots\dots (3.1.2)$$

ただし, $f_{t\ oi}$ 及び $f_{s\ bi}$ は下表による。

	許容引張応力 $f_{t\ oi}$	許容せん断応力 $f_{s\ bi}$
計 算 式	$\frac{F_i}{2} \cdot 1.5$	$\frac{F_i}{1.5 \cdot \sqrt{3}} \cdot 1.5$

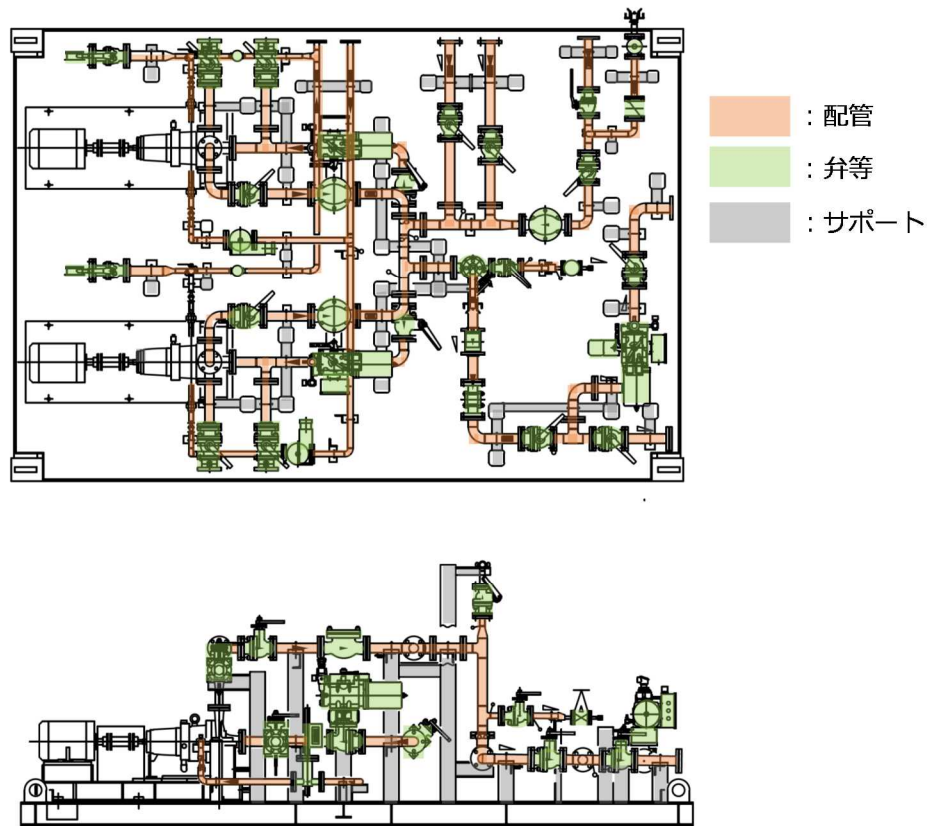


図2.14.2.2-1 スキッド概略構造イメージ (スラッジ排出ポンプスキッドの例)

2.14.3 外部人為事象に対する設計上の 考慮への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 4. 設計上の考慮

○施設の設計については，安全上の重要度を考慮して以下に掲げる事項を適切に考慮されたものであること。

③外部人為事象に対する設計上の考慮

- ・安全機能を有する構築物，系統及び機器は，想定される外部人為事象によって，施設の安全性を損なうことのない設計であること。
- ・安全機能を有する構築物，系統及び機器に対する第三者の不法な接近等に対し，これを防御するため，適切な措置を講じた設計であること。

2.14.3.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備は，想定される外部人為事象によって，施設の安全性を損なうことのない設計とする。

滞留水一時貯留設備に対する第三者の不法な接近等に対し，これを防御するため，適切な措置を講じた設計とする。

2.14.3.2 対応方針

○ 施設の設計については、安全上の重要度を考慮して以下について適切に考慮したものとする。

(1) 外部人為事象に対する設計上の考慮

- ・ 想定される外部人為事象としては、航空機落下、ダムの崩壊及び爆発、漂流した船舶の港湾への衝突等が挙げられる。本特定原子力施設への航空機の落下確率は、これまでの事故実績等をもとに、民間航空機、自衛隊機及び米軍機を対象として評価した（原管発管 21 第 270 号 実用発電用原子炉施設への航空機落下確率の再評価結果について（平成 21 年 10 月 30 日））。その結果は約 3.6×10^{-8} 回/炉・年であり、 1.0×10^{-7} 回/炉・年を下回る。したがって、航空機落下を考慮する必要はない。また、特定原子力施設の近くには、ダムの崩壊により特定原子力施設に影響を及ぼすような河川並びに爆発により特定原子力施設の安全性を損なうような爆発物の製造及び貯蔵設備はない。また、最も距離の近い航路との離隔距離や周辺海域の流向を踏まえると、航路を通行する船舶の衝突により、特定原子力施設が安全機能を損なうことはない。
- ・ 安全機能を有する構築物、系統及び機器に対する第三者の不法な接近、妨害破壊行為（サイバーテロ等の不正アクセス行為を含む）及び核物質の不法な移動を未然に防止するため、下記の措置を講ずる。
 - ① 安全機能を有する構築物、系統及び機器を含む区域を設定し、それを取り囲む物的障壁を持つ防護された区域を設けて、これらの区域への接近管理、入退域管理を徹底する。
 - ② 探知施設を設け、警報、映像監視等、集中監視する設計とする。
 - ③ 外部との通信設備を設ける。

(実施計画：II-1-14-1~2)

滞留水一時貯留設備は、想定される外部人為事象によって、施設の安全性を損なうことのない設計とする。また、第三者の不法な接近等に対し、これを防御するため、適切な措置を講じた設計とする。

(実施計画：II-2-5-添 32-2)

(2) 電磁的障害

滞留水一時貯留設備は、電磁的障害による擾乱に対して、制御盤へ入線する電源受電部へのラインフィルタや絶縁回路の設置、外部からの信号入出力部へのラインフィルタや絶縁回路の設置、通信ラインにおける光ケーブルの適用等により、影響を受けない設計とする。

(実施計画：II-2-5-添 32 別 1-5)

(3) 不正アクセス行為（サイバーテロを含む）

不正アクセス行為（サイバーテロを含む）を未然に防止するため、滞留水一時貯留設備の操作に係る監視・制御装置が、電気通信回線を通じて不正アクセス行為（サイバーテロを含む）を受けることがないように、外部からの不正アクセスを遮断する設計とする。

（実施計画：Ⅱ-2-5-添32別1-5）

滞留水一時貯留設備の外部人為事象に対する設計上の考慮については、別紙－1参照

滞留水一時貯留設備の外部人為事象に対する設計上の考慮について

滞留水一時貯留設備では、設備を設置しているプロセス主建屋を施錠管理することにより第三者の不法な接近等へ対策している。

滞留水一時貯留設備のポンプの起動・停止や弁の開・閉の運転操作については、プロセス主建屋の制御盤を経由して、免震重要棟の監視・操作端末にて実施可能な設計としており、圧力、流量、水位等の計器パラメータ、漏えい警報の監視については、プロセス主建屋の制御盤を経由して、免震重要棟の監視・操作端末にて監視可能な設計としている。

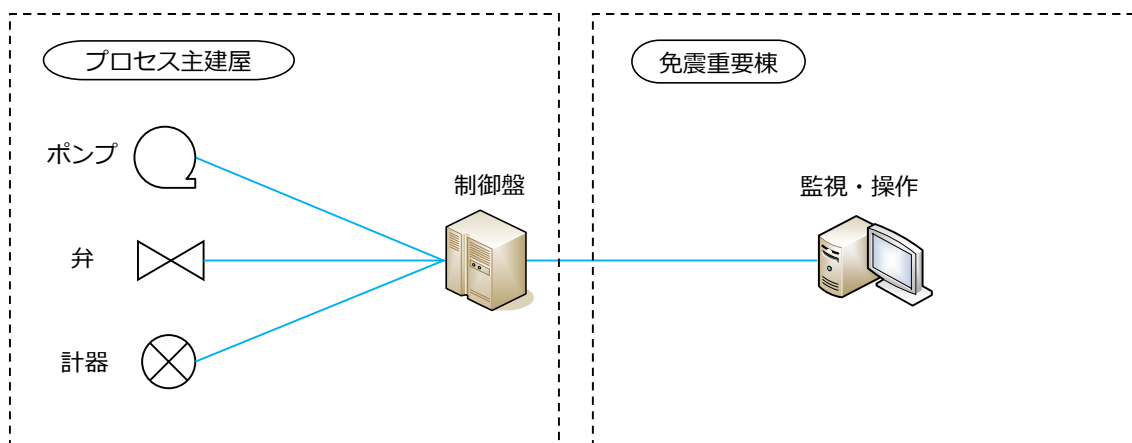


図 2.14.3.1-1 滞留水一時貯留設備の制御システム概略図

滞留水一時貯留設備では、電磁的障害への対策として制御盤へ入線する電源受電部や外部からの信号入出力部に対し、ノイズフィルタや絶縁回路を設置、通信ラインにおいて光ケーブルを適用し、電磁的障害の影響を受けない設計としている。電磁的障害への対策概略は図 2.14.3.1-2 参照

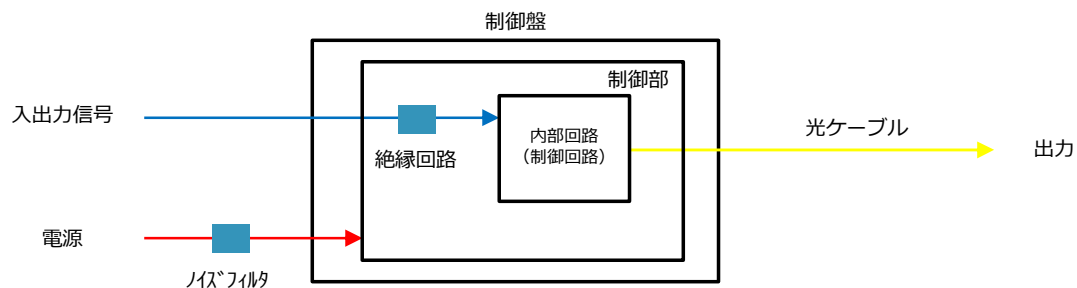


図 2.14.3.1-2 滞留水一時貯留設備の電磁的障害への対策概略図

2.14.4 火災に対する設計上の考慮への 適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 4. 設計上の考慮

○施設の設計については，安全上の重要度を考慮して以下に掲げる事項を適切に考慮されたものであること。

④火災に対する設計上の考慮

火災発生防止，火災検知及び消火並びに火災の影響の軽減の方策を適切に組み合わせて，火災により施設の安全性を損なうことのない設計であること。

2.14.4.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備は，火災発生防止，火災検知及び消火並びに火災の影響の軽減の方策を適切に組み合わせて，火災により施設の安全性を損なうことのない設計とする。

2.14.4.2 対応方針

滞留水一時貯留設備は、火災発生防止及び火災影響軽減のため、実用上可能な限り不燃性又は難燃性材料を使用するとともに設備周辺から可能な限り可燃物を排除する。

また、初期消火の対応ができるよう、設備近傍に消火器を設置する。なお、火災発生は監視カメラ等により確認可能な設計とする。

(実施計画：Ⅱ-2-5-添 32 -2, 実施計画：Ⅱ-2-5-添 32 別 1-6)

滞留水一時貯留設備の火災対策の補足説明については、別紙－ 1 参照。

滞留水一時貯留設備の火災対策の補足説明

(1) 火災の発生防止

配管の一部に使用する可燃性材料については、周囲を不燃物又は難燃性材料で養生することで対策を行うとともに、最外周が可燃性材料となっているポリエチレン管の周辺には、可能な限り可燃物（配管敷設箇所周囲の草木等の可燃物を除去含む）を排除することで火災の発生を防止する。

(2) 火災の検知及び消火

滞留水一時貯留設備については、監視カメラ等により火災の早期発見を図る。
また、初期消火の対応ができるよう、設備近傍に消火器を設置する。

(3) 火災の影響軽減

ポリエチレン管に関しては可燃であるが、内部は建屋滞留水を通水している状態であるため、通常の運用中は火災になりにくい。

また、前述した、可能な限り可燃物を排除する対策にて、火災の影響軽減も図る計画としている。

滞留水一時貯留設備を構成する機器について可燃物、難燃物、不燃物を整理した結果は今後提示予定

2.14.5 環境条件に対する設計上の考慮 への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 4. 設計上の考慮

○施設の設計については，安全上の重要度を考慮して以下に掲げる事項を適切に考慮されたものであること。

⑤環境条件に対する設計上の考慮

安全機能を有する構築物，系統及び機器は，経年事象を含むすべての環境条件に適合できる設計であること。特に，事故や地震等により被災した建造物の健全性評価を十分に考慮した対策を講じること。

2.14.5.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備の構築物，系統及び機器は，経年事象を含むすべての環境条件に適合できる設計とする。

2.14.5.2 対応方針

安全機能を有する構築物，系統及び機器は，それぞれの場所に応じた圧力，温度，湿度，放射線等に関する環境条件を考慮し，必要に応じて換気空調系，保温，遮へい等で維持するとともに，そこに設置する安全機能を有する構築物，系統及び機器は，これらの環境条件下で期待されている安全機能が維持できるものとする。

(実施計画：Ⅱ-1-14-2)

滞留水一時貯留設備の構築物，系統及び機器は，経年事象を含む想定されるすべての環境条件に適合できる設計とする。

(実施計画：Ⅱ-2-5-添 32-2)

滞留水一時貯留設備において使用する材料等に対して，環境条件に対する設計上の考慮は以下の通り。

(1) 圧力及び温度

滞留水一時貯留設備は通常運転時及び異常事象発生時に想定される圧力・温度を踏まえて，適切な最高使用圧力・最高使用温度を有する機器等を選定する。

(2) 腐食に対する考慮

滞留水一時貯留設備については，耐腐食性の優れた二相ステンレス鋼，ポリエチレン，合成ゴム，十分な肉厚を有する炭素鋼等を使用する。

(3) 放射線

滞留水一時貯留設備の材質として使用するポリエチレン等については，放射線による材料特性に有意な変化がない期間を評価した上で，当該期間を超えて使用する場合には，あらかじめ交換等を行う。

(実施計画：Ⅱ-2-5-添 32 別 1-6)

滞留水一時貯留設備の環境条件に対する設計上の考慮の補足説明については，別紙－1 参照。

滞留水一時貯留設備の環境条件に対する設計上の考慮の補足説明

滞留水一時貯留設備において使用する材料等に対して、環境条件に対する設計上の考慮を下記の通り確認している。

1. 圧力・温度

1.1 圧力

【鋼管】

最高使用圧力を 1.37MPa と設定しているが、従来から福島第一原子力発電所において実績のある材料を使用しているため、妥当な設計である。

なお、最高使用圧力 1.37MPa の該当箇所については処理装置周りの配管等（Ⅱ-2-5-45 表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様（1 1 / 3 1）のうち、油分分離装置処理水タンクからセシウム吸着装置入口まで（鋼管）などが該当）で使用実績がある。

【ポリエチレン管】

最高使用圧力を 1.37MPa と設定しているが、従来から福島第一原子力発電所において実績のある材料を使用しているため、妥当な設計である。

なお、最高使用圧力 1.37MPa の該当箇所については処理装置周りの配管等（Ⅱ-2-5-57 表 2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様（2 3 / 3 1）のうち、第三セシウム吸着装置入口から第三セシウム吸着装置出口まで（ポリエチレン管）が該当）で使用実績がある。

【耐圧ホース】

最高使用圧力を静水頭(当該設備では滞留水受入槽と滞留水一時貯留槽間の上部連結管として用いることから概ね大気圧程度)と設定している。従来から福島第一原子力発電所において実績のある材料を使用しており、圧力も低いことから妥当な設計である。

1.2 温度

【ポリエチレン管，耐圧ホース】

福島県の小名浜気象台の気象観測記録で過去に計測された気温は、最高で 37.7℃（1994 年 8 月 3 日：気象庁の過去の気象データより引用）であり、これを超えない温度として、40℃と設定している。参考：その他の近傍の観測地点では、福島県の浪江の気象観測記録で過去に計測された気温は、最高で 37.9℃（2010 年 8 月 24 日）

【鋼管】

上記と同様に概ね最高使用温度を 40℃と設定しているが、一部配管は既設仕様と同様の 66℃で設定している。なお、最高使用温度 66℃の該当箇所については処理装置周りの配管

等（Ⅱ-2-5-45表2. 5-1 汚染水処理設備等の主要配管仕様（11/31）のうち、油分分離装置処理水タンクからセシウム吸着装置入口まで（鋼管）などが該当）で使用実績がある。

2. 腐食に対する考慮

建屋滞留水を扱うポンプ・配管に関して材料選定理由を表 2.14.5.1-1 に示す。表 2.14.5.1-1 のうち、炭素鋼，ステンレス鋼に対する耐腐食性について評価を行った。

表 2.14.5.1-1 滞留水一時貯留設備の漏えい発生防止（腐食）

機器	材料	選定理由
タンク類	炭素鋼（内面ゴムライニング）	建屋滞留水に，海水由来等の塩分が含まれることから，ゴムライニング付の炭素鋼を使用する。
ポンプ類	二相ステンレス鋼（鋳鋼品）	建屋滞留水に，海水由来等の塩分が含まれることから，耐食性の優れる二相ステンレス鋼（鋳鋼品）を使用する。
配管	ポリエチレン管	施工性及び，耐腐食性に優れることから使用する。
	炭素鋼鋼管（内面ゴムライニング）	建屋滞留水に，海水由来等の塩分が含まれることから，ゴムライニング付の炭素鋼を使用する。
	合成ゴム（EPDM，ポリ塩化ビニル）	可撓性を要する箇所（タンク連結部）において，耐腐食性のある合成ゴム（EPDM）製ホースを使用する。また，敷設のしやすさから，地上階から地下階への移送配管としてポリ塩化ビニル製のホースを使用する。

3. 放射線

滞留水一時貯留設備の材質として使用するポリエチレンについては，集積線量が $2 \times 10^5 \text{Gy}$ に達すると，引張強度は低下しないが，破断時の伸びが減少する傾向を示す。このため，建屋滞留水の放射線による材料特性に有意な変化がない期間を評価した上で，当該期間を超えて使用する場合には，あらかじめ交換等を行う。

以上

2.14.7 運転員操作に対する設計上の考慮 への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 4. 設計上の考慮

○施設の設計については，安全上の重要度を考慮して以下に掲げる事項を適切に考慮されたものであること。

⑦運転員操作に対する設計上の考慮

運転員の誤操作を防止するための適切な措置を講じた設計であること。

2.14.7.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備は，運転する者の誤操作を防止するための適切な措置を講じた設計とする。

2.14.7.2 対応方針

運転員の誤操作を防止するため、盤の配置、操作器具等の操作性に留意するとともに、計器表示及び警報表示により施設の状態が正確、かつ、迅速に把握できるものとする等、適切な措置を講じた設計とする。また、保守点検において誤りを生じにくいよう留意したものとする。

(実施計画：II-1-14-2)

滞留水一時貯留設備は、遠隔操作室の監視・制御装置により、遠隔操作及び運転状況の監視が可能な設計とする。また、滞留水一時貯留設備は、運転する者による誤操作を防止できる設計とするとともに、異常事象や設備の運転に影響を及ぼしうる自然現象等が発生した状況下においても、運転する者がこれらの事象に対処するために必要な設備を容易に操作できる設計とする。

(実施計画：II-2-5-添 32-2)

(1)滞留水一時貯留設備の運転操作（ポンプの起動・停止や弁の開・閉）は監視・操作端末等により遠隔操作で実施する。滞留水一時貯留設備はプロセス計器だけでなく、監視カメラを多用し、現場の状況を映像で確認することが可能な設計とする。また、タンクからの溢水防止のため、液位に応じて予備系統への自動切替や警報発報などの機能を設ける。

(2)誤操作・誤判断を防止するため、弁操作や運転モードの切替等の重要な操作に関してはダブルアクションを要する設計とする。

(3)漏えい検知器の作動により警報が発生した場合は、運転員の手動停止操作にて運転停止が可能な構成（遠隔でのポンプ停止・隔離弁閉止機能）とする。

2.14.8 信頼性に対する設計上の考慮への 適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 4. 設計上の考慮

○施設の設計については，安全上の重要度を考慮して以下に掲げる事項を適切に考慮されたものであること。

⑧信頼性に対する設計上の考慮

- ・安全機能や監視機能を有する構築物，系統及び機器は，十分に高い信頼性を確保し，かつ，維持し得る設計であること。
- ・重要度の特に高い安全機能を有するべき系統については，その系統の安全機能が達成できる設計であるとともに，その構造，動作原理，果たすべき安全機能の性質等を考慮して，多重性又は多様性及び独立性を備えた設計であること。

2.14.8.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備は，十分に高い信頼性を確保し，かつ，維持し得る設計とする。

2.14.8.2 対応方針

安全機能や監視機能を有する構築物，系統及び機器は，十分に高い信頼性を確保し，かつ，維持し得るものとする。

(実施計画：II-1-14-2)

滞留水一時貯留設備の信頼性に対する設計上の考慮の補足説明については，別紙－1 参照。

滞留水一時貯留設備の信頼性に対する設計上の考慮の補足説明

滞留水一時貯留設備は、以下の観点について考慮し、信頼性を確保する。

(1) 電源の設計

- a. 滞留水一時貯留設備に係る滞留水供給ポンプ、スラッジ排出ポンプ、制御盤、計器等に対して電源を供給する。
- b. 各機器に電源を供給する電源盤は、常用2系統からなる所内共通低圧母線よりそれぞれ受電し、片系上位電源の計画外停止においても速やかに電源を復帰できる構成とする。

滞留水一時貯留設備における具体的な電源構成のイメージ図は、図 2.14.8.1-1 の通り。

以上

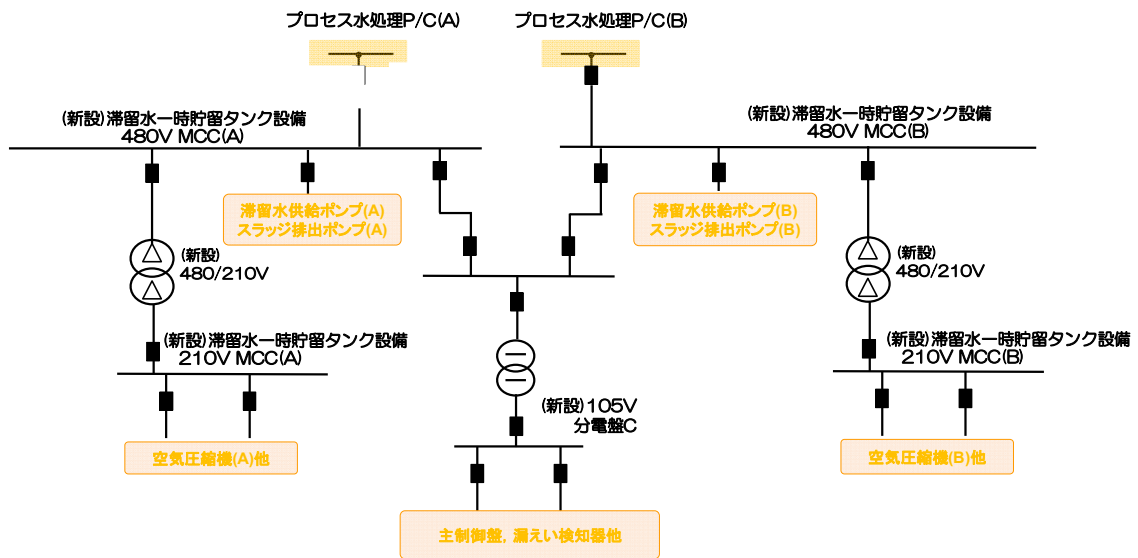


図 2.14.8.1-1 滞留水一時貯留設備における電源構成

2.14.9 検査可能性に対する設計上の考慮 への適合性

措置を講ずべき事項

II. 設計，設備について措置を講ずべき事項

1 4. 設計上の考慮

○施設の設計については，安全上の重要度を考慮して以下に掲げる事項を適切に考慮されたものであること。

⑨検査可能性に対する設計上の考慮

安全機能を有する構築物，系統及び機器は，それらの健全性及び能力を確認するために，適切な方法によりその機能を検査できる設計であること。

2.14.9.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備は，それらの健全性及び能力を確認するために，適切な方法によりその機能を検査できる設計とする。

2.14.9.2 対応方針

安全機能を有する構築物，系統及び機器は，それらの健全性及び能力を確認するため，その安全機能の重要度に応じ，必要性及び施設に与える影響を考慮して適切な方法により，検査ができるものとする。

(実施計画：II-1-14-2)

滞留水一時貯留設備を構成する構築物，系統及び機器は，それらの健全性及び能力を確認するために，適切な方法によりその機能を検査できる設計とする。

(実施計画：II-2-5-添 32-2)

検査可能性に関する考慮事項については，別紙－1 参照。

検査可能性に関する考慮事項

滞留水一時貯留設備の設置にあたっては、今後の保全を考慮した設計とする。設備保全の管理については、点検長期計画を作成し、点検計画に基づき、点検を実施していく。

今回設置する機器は使用前検査対象に合わせて、代表的な機器の点検に対する考慮は以下の通り。

なお、メンテナンス時は、タンク（滞留水受入槽，滞留水一時貯留槽）には、容器内部に洗浄水配管を設置することで内部のフラッシングが可能な構造としており、その他機器類はろ過水によるフラッシング等により、メンテナンス作業時の被ばくの低減を考慮した設計としている。

(1) タンク

- ・外観・フランジ点検

内部の点検が実施可能な設計とする。

(2) ポンプ，弁

- ・外観点検，取替

点検や，取替が可能な設計とする。

(3) 配管

- ・外観・フランジ点検

フランジ（シール）部のガスケット交換等の点検が実施可能な設計とする。

(4) 漏えい検知器

- ・外観点検，取替，機能確認

点検や，取替，機能確認が可能な設計とする。

なお，長納期の機器について予備品を確保する。

以上

3章 特定原子力施設の保安

3.1 特定原子力施設の保安のために措置を 講ずべき事項への適合性

措置を講ずべき事項

III. 特定原子力施設の保安のために措置を講ずべき事項

運転管理，保守管理，放射線管理，放射性廃棄物管理，緊急時の措置，敷地内外の環境放射線モニタリング等適切な措置を講じることにより，「II. 設計，設備について措置を講ずべき事項」の適切かつ確実な実施を確保し，かつ，作業員及び敷地内外の安全を確保すること。

特に，事故や災害時等における緊急時の措置については，緊急事態への対処に加え，関係機関への連絡通報体制や緊急時における医療体制の整備等を行うこと。

また，協力企業を含む社員や作業従事者に対する教育・訓練を的確に行い，その技量や能力の維持向上を図ること。

3.1.1 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備は，運転管理，保守管理，放射線管理，放射性廃棄物管理，緊急時の措置，敷地内外の環境放射線モニタリング等適切な措置を講じることにより，「II. 設計，設備について措置を講ずべき事項」の適切かつ確実な実施を確保し，かつ，作業員及び敷地内外の安全を確保する。

3.1.2 対応方針

○ 線量の評価方法

・ 線量評価点

施設と評価点との高低差を考慮し、各施設からの影響を考慮した敷地境界線上の最大実効線量評価地点における直接線及びスカイシャイン線による実効線量を算出する。

・ 評価に使用するコード MCNP 等、他の原子力施設における評価で使用実績があり、信頼性の高いコードを使用する。

・ 線源及び遮蔽

線源は各施設が内包する放射性物質に容器厚さ、建屋壁、天井等の遮蔽効果を考慮して設定する。内包する放射性物質や、遮蔽が明らかでない場合は、設備の表面線量率を測定し、これに代えるものとする。

対象設備は事故処理に係る使用済セシウム吸着塔保管施設、廃スラッジ貯蔵施設、貯留設備（タンク類）、固体廃棄物貯蔵庫、使用済燃料乾式キャスク仮保管設備及び瓦礫類、伐採木の一時保管エリア等とし、現に設置あるいは現時点で設置予定があるものとする。

（実施計画：Ⅲ-3-2-2-2-1）

○ 線量評価

滞留水一時貯留設備については、分析結果を基に核種は Cs-134、Cs-137 及び Sr-90、下記の放射能濃度が内包しているとし、制動エックス線を考慮したガンマ線線源強度を核種生成減衰計算コード ORIGEN により求め、3次元モンテカルロ計算コード MCNP により敷地境界における実効線量を評価した。

放射能濃度：Cs-134：6.6E+06 Bq/L,

Cs-137：1.3E+08 Bq/L,

Sr-90：3.0E+07 Bq/L

遮蔽：鉛 20mm

評価地点までの距離：約 1350m

線源の標高：T.P.約 24m

評価結果：約 0.0001mSv/年未満

※影響が小さいため線量評価上無視する

（実施計画：Ⅲ-3-2-2-2-61）

滞留水一時貯留設備の敷地境界線量影響評価に関する評価条件については、2章 2.11 別紙-1(2.11.1-1~2.11.1-2)参照

以上

4章 実施計画に係る検査の受検

4.1 実施計画に係る検査の受検への適合性

措置を講ずべき事項

VIII 実施計画に係る検査の受検

実施計画における施設、保安のための措置及び特定核燃料物質の防護のための措置について、法第64条の3第7項に基づく検査を受けること。

4.1.1. 措置を講ずべき事項への適合方針

滞留水一時貯留設備における施設、保安のための措置及び特定核燃料物質の防護のための措置について、法第64条の3第7項に基づく検査を受ける。

4.1.2 対応方針

滞留水一時貯留設備は、法第64条の3第7項に基づく検査を受けることができる構造とする。

実施計画に係る検査の受検

滞留水一時貯留設備の構造強度・耐震性及び機能・性能等に関する確認事項を表 4.1.1-1～表 4.1.1-6 に示す。

表 4.1.1-1 確認事項（滞留水受入槽，滞留水一時貯留槽）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について記録を確認する。	寸法が許容範囲内であること。
	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置, 据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認	最高使用圧力の 1.5 倍で一定時間保持後, 同圧力に耐えていること, また, 耐圧部からの漏洩がないことを立会または記録により確認する。	最高使用圧力の 1.5 倍に耐え, かつ構造物の変形等ないこと。また, 耐圧部からの漏えいがないこと。
機能・性能	貯留機能	漏えいなく貯留できることを確認する	タンク及び附属設備（連結管, 管台）に漏えいがないこと。

表 4.1.1-2 確認事項（滞留水供給ポンプ，スラッジ排出ポンプ）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	機器の据付位置，据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	漏えい確認※1	運転圧力で耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	耐圧部から著しい漏えいがないこと。
性能	運転性能確認	ポンプの運転確認を行う。	実施計画に記載した容量を満足すること。 また，異音，発煙，異常振動等がないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし，必要に応じて品質記録を確認する。

表 4.1.1-3-1 確認事項（主配管（鋼管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径／厚さについて記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※ ¹	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認※ ¹	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認 ※ ¹ ※ ²	最高使用圧力の1.5倍で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏えいがないことを確認する。	最高使用圧力の1.5倍に耐え、かつ異常のないこと。また、耐圧部からの漏えいがないこと。

※¹：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

※²：耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

表 4.1.1-3-2 確認事項（主配管（ポリエチレン管））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した外径について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※ ¹	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認※ ¹	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認※ ¹	製品の最高使用圧力以上で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏洩がないことを確認する。	製品の最高使用圧力に耐え、かつ異常のないこと。また、耐圧部からの漏えいがないこと。

※¹：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

表 4.1.1-3-3 確認事項（主配管（耐圧ホース））

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度 ・耐震性	材料確認	実施計画に記載した主な材料について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	寸法確認	実施計画に記載した主要寸法について記録を確認する。	実施計画のとおりであること。
	外観確認※1	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認※1	配管の据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
	耐圧・漏えい確認※1	確認圧力で一定時間保持後、同圧力に耐えていること、また、耐圧部からの漏洩がないことを立会または記録により確認する。	確認圧力に耐え、かつ異常のないこと。また、耐圧部からの漏えいがないこと。

※1：現地では実施可能な範囲とし、必要に応じて品質記録を確認する。

表 4.1.1-4 確認項目（漏えい検出装置及び警報装置）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
構造強度	外観確認	各部の外観を確認する。	有意な欠陥がないこと。
	据付確認	装置の据付位置, 据付状態について確認する。	実施計画のとおり施工・据付されていること。
機能	漏えい警報確認	漏えい信号により, 警報が発生することを確認する。	漏えいの信号により警報が発生すること。

表 4.1.1-5 確認項目（滞留水一時貯留設備）

確認事項	確認項目	確認内容	判定
性能	運転性能確認	処理装置へ実施計画に記載の容量が通水可能であることを確認する。	実施計画に記載した容量を処理装置へ通水することが可能であり, 設備からの異音, 発煙, 異常振動等がないこと。

表 4.1.1-6 確認事項（滞留水受入槽，滞留水一時貯留槽，鋼管の溶接検査）

確認事項	確認項目	対象設備	確認内容	判定
溶接検査	材料検査	滞留水受入槽 滞留水一時貯留槽 鋼管	材料が溶接規格等に適合するものであり，溶接施工法の母材の区分に適合することを確認する。	材料が溶接規格等に適合するものであり，溶接施工法の母材の区分に適合するものであること。
	開先検査	滞留水受入槽 滞留水一時貯留槽 鋼管	開先形状等が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	開先形状等が溶接規格等に適合するものであること。
	溶接作業検査	滞留水受入槽 滞留水一時貯留槽 鋼管	あらかじめ確認された溶接施工法又は実績のある溶接施工法又は管理されたプロセスを有する溶接施工法であることを確認する。あらかじめ確認された溶接士により溶接が行われていることを確認する。	あらかじめ確認された溶接施工法および溶接士により溶接施工をしていること。
	非破壊試験	滞留水受入槽 滞留水一時貯留槽 鋼管	溶接部について非破壊検査を行い，その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであることを確認する。	溶接部について非破壊検査を行い，その試験方法及び結果が溶接規格等に適合するものであること。
	機械試験	滞留水受入槽 滞留水一時貯留槽	溶接部を代表する試験片にて機械試験を行い，当該試験片の機械的性質が溶接規格等に適合しているものであることを確認する。	溶接部を代表する試験片にて機械試験を行い，当該試験片の機械的性質が溶接規格等に適合しているものであること。
	耐圧・漏えい検査 ※1	滞留水受入槽 滞留水一時貯留槽 鋼管	検査圧力で保持した後，検査圧力に耐えていることを確認する。耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいの有無を確認する。	検査圧力で保持した後，検査圧力に耐えていること。耐圧確認終了後，耐圧部分からの漏えいがないこと。
	外観検査 ※2	滞留水受入槽 滞留水一時貯留槽 鋼管	耐圧・漏えい検査後外観上，傷・へこみ・変形等の異常がないことを確認する。	外観上，傷・へこみ・変形等の異常がないこと。

※1 耐圧確認が困難な箇所については代替試験にて確認する。

※2 耐圧検査後の確認が困難な箇所については先行外観検査を実施する。

(実施計画：II-2-5-添32別4-1~II-2-5-添32別4-6)

以上

指摘事項リスト

(滞留水一時貯留設備の設置)

No	面談日時	指摘箇所	指摘事項	回答概要	反映箇所
1	第1回 2023年7月13日	1章 1.1	建屋滞留水一時貯留タンク設備を設置することで生じるリスクと設置しないことで生じるリスクを比較し、当該設備の設置がリスク低減に資することを示すこと。	別紙3を新規追加し、表1.1.2-2にてリスクに関する説明を追加致しました。 11/2技術会合の資料内容をまとめ資料に反映致しました。	1章1.1 別紙-3
2	第1回 2023年7月13日	1章 1.1	プロセス主建屋及び高温焼却炉建屋が有している各機能（滞留水を一時的に貯留するパッファ機能、スラッジの沈降機能など）に対して、同等以上の機能を有していることを資料に示して説明すること。	別紙2を新規追加し、現状のPMB・HTIの機能と滞留水一時貯留タンク設備の機能を整理した説明を追加致しました。	1章1.1 別紙-2
3	第1回 2023年7月13日	1章 1.1	今回の改造箇所の詳細を説明すること。工事にあたっての施工、運用の観点から記載すること。	別紙3を新規追加し、改造箇所について整理致しました。	1章1.1 別紙-3
4	第1回 2023年7月13日	1章 1.1	主要設備の設置場所、配管の敷設ルート（地下階への排出先を含む。）及び既設設備との接続場所がわかる図面を示して説明すること。	当該設備の設置場所や配管敷設ルートについては、2章2.9 別紙-1へ図を追加致しました。	2章2.9 別紙-1 図2.9.1-2~図2.9.1-5
5	第1回 2023年7月13日	1章 1.1	既設設備に悪影響を与えない考慮も合わせて説明すること。（工事に伴い撤去する既設設備や貫通孔施工など）	次回以降の面談にて整理した結果を説明致します。 （一部は1章1.1 別紙-4に記載しております）	
6	第1回 2023年7月13日	1章 1.1	滞留水一時貯留タンク設備の設置場所をプロセス主建屋の4階とした根拠を資料に示して説明すること。	「別紙1 3.」へ設置理由をまとめた記載を追加致しました。 11/2技術会合の資料内容をまとめ資料に反映致しました。	1章1.1 別紙-1 3.滞留水一時貯留タンク設備のPMB 4階への設置理由
7	第1回 2023年7月13日	2章 2.8	廃棄物の線量率を記載すること。	別紙-1に廃棄物の線量率を追記致しました。	2章2.8 別紙-1
8	第1回 2023年7月13日	2章 2.9	スラッジ排出ポンプについて、ポンプの種類（容積型か非容積型かなど）を示すとともに、水とスラッジを同時に排出するために必要な前提条件（固液比の制御、タンク内の攪拌等）の有無を資料に示して説明すること。	別紙-2に当該設備で分離するスラッジの取扱いについての説明を追加致しました。	2章2.9 別紙-2
9	第1回 2023年7月13日	2章 2.9	スラッジ排出箇所を配置図等で示すこと。 申請中であるゼオライト土嚢等処理設備と滞留水一時貯留タンク設備の位置関係を踏まえて、ゼオライト回収前に当該設備が運用開始すると回収するゼオライトが移動しないかについて説明すること。	スラッジ排出箇所については、2章2.9 別紙-1へ図を追加致しました。 なお、スラッジ排出箇所とゼオライト回収箇所は位置が離れており、ゼオライト回収に影響を与えないと想定しております。	2章2.9 別紙-1 図2.9.1-4
10	第1回 2023年7月13日	2章 2.9	当該設備から漏えいが発生し、系外に流失した際の影響範囲を確認するため、配管の概要配置図を記載し、説明すること。	当該設備の配管敷設ルートについては、2章2.9 別紙-1へ図を追加致しました。	2章2.9 別紙-1 図2.9.1-2~図2.9.1-5
11	第1回 2023年7月13日	2章 2.9	貯留タンク等について、実機で必要とされる貯留量を示した上で、容量の設定根拠と必要な容量が確保されていることを資料に示して説明すること。	別紙-3へ当該設備の貯留容量に関する考慮について説明を追加致しました。 11/2技術会合の資料内容をまとめ資料に反映致しました。	2章2.9 別紙-3

指摘事項リスト

(滞留水一時貯留設備の設置)

No	面談日時	指摘箇所	指摘事項	回答概要	反映箇所
12	第1回 2023年7月13日	2章 2.9	耐放射線性の材質を用いていることについて、適切な材料を採用する旨の説明を追加すること。	耐放射線性を有する材質等への考慮については、他の章で記載した考慮事項と同様のため、その旨記載致しました。(2.14.5-3, 2.14.5.1-1～2.14.5.1-2参照と記載追加)	2章2.9 2.9.1-1
13	第1回 2023年7月13日	2章 2.9	別紙1(1)漏えい発生防止 b.項の使用材質の「等」について、具体的に記載すること。	鋼管にはライニングを行うこと等の記載を追加致しました。	2章2.9 2.9.1-1
14	第1回 2023年7月13日	2章 2.10	ベントフィルタに使用するフィルタの種類、排気に係る一連の構造や除去効率を資料に示して説明すること。	別紙-1にベントフィルタの概要についての説明の資料を追加し、構造、除去効率などを記載致しました。	2章2.10 別紙-1
15	第1回 2023年7月13日	2章 2.10	当該フィルタから排出される放射性気体廃棄物について敷地境界における実効線量への影響がほとんどないことを資料に示して説明すること。ベントフィルタによる効果が敷地境界線量に与える影響を評価し、その結果を示すこと。	次回以降の面談にて検討した結果を説明致します。	
16	第1回 2023年7月13日	2章 2.10	大気モニタの設置の要否について検討し示すこと。	次回以降の面談にて指摘事項No.15の影響等を踏まえて検討した結果を整理し、説明致します。	
17	第1回 2023年7月13日	2章 2.11	線量評価で使用した核種やその放射能濃度については、滞留水の分析結果から設定したとしているが、サンプリング位置の妥当性や分析結果の代表性を示すこと。また、線量評価における線源モデル等の評価条件を示すこと。	別紙-1に線量評価条件についての説明の資料を追加し、放射能濃度条件設定方法や評価モデル概要などを記載致しました。	2章2.11 別紙-1
18	第1回 2023年7月13日	2章 2.11	放射能濃度の評価においてCs-134、Cs-137及びSr-90の3核種で代表できるとする根拠を示すこと	別紙-1に評価で用いた核種の代表性についての記載を追加致しました。	2章2.11 別紙-1
19	第1回 2023年7月13日	2章 2.11	保守的な線量評価のために、評価条件を貯留タンク満水状態としているが、配管などの系統内にも滞留水が存在する状態も含めた評価を行うこと。	次回以降の面談にて評価を実施したうえで結果を説明致します。	
20	第1回 2023年7月13日	2章 2.11	2.11-3に記載の「下記の放射能濃度が内包しているとし」の記載について、「下記」に対応する記載が無い為見直すこと。	文書が整合するよう、記載を見直し致しました。	2章2.11 2.11-3
21	第1回 2023年7月13日	2章 2.12	当該設備の設置工事時のみではなく、通常稼働時及び検査・メンテナンス時も想定した考慮内容について、説明すること。	設置工事時、通常運用時、メンテナンス時の考慮について記載を追加致しました。	2章2.12 別紙1 2.12.1-1
22	第1回 2023年7月13日	2章 2.12	別紙1の「(図2.12.1-3参照)」は誤記なので修正すること。	誤記修正(当該記載の削除)致しました。	2章2.12 別紙1 2.12.1-1
23	第1回 2023年7月13日	2章 2.12	設備運用時に雰囲気線量はどの程度になると想定しているのか、線量上昇する場合には遮へい等の対策について説明すること。	想定線量、遮へい対策の概要について、記載を追加致しました。	2章2.12 別紙1 2.12.1-1

指摘事項リスト

(滞留水一時貯留設備の設置)

No	面談日時	指摘箇所	指摘事項	回答概要	反映箇所
24	第1回 2023年7月13日	2章 2.13	当該設備の設置工事時のみではなく、通常稼働時及び検査・メンテナンス時も想定した考慮内容について、説明すること。	設置工事時、通常運用時、メンテナンス時の考慮について記載を追加致しました。	2章2.13 別紙1 2.13.1-1~2.13.1-2
25	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.1	ポリエチレン管の準拠規格について、JWWA 及びISO に準拠している部分の内訳を示すこと。	2章2.14.1 別紙3 参考資料へ準拠規格について記載致しました。	2章2.14.1 別紙3 参考資料
26	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.1	全体概略図1/3、※1の横の配管（赤線）部を当該設備で追加する意図を説明すること。	HTI地下滞留水のSARRY II での並列処理のためのライン追加となります。詳細は「1.1 特定原子力施設における主なリスクと今後のリスク低減対策への適合性 別紙3 1.1.3-1を参照ください」	1章1.1 別紙-3
27	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.1	ポリエチレン管はどのような仕様のものを使用予定であるか説明すること。（2層管を使用しているか）	2章2.14.1 別紙3 参考資料へポリエチレン管の仕様について記載致しました。	2章2.14.1 別紙3 参考資料
28	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.1	別紙-3 表2.14.1.3-1中のその他の機器（空気作動弁・手動弁）はBクラスとした理由を説明すること。また、耐震計算書上の取扱いを示すこと。	空気作動弁・手動弁の耐震クラス分類については、各スキッド構造内の鋼管と合わせて包絡的に評価を実施している実態であることから、主要設備である滞留水移送配管（鋼管）と合わせてB+クラスと記載を見直し致しました。	2章2.14.1 別紙3
29	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	耐震評価における設備設置箇所の最大応答加速度の水平2方向の合成方法の妥当性及び根拠（算出過程）について、建屋の地震応答解析の出典図書を明確にした上で示すこと。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
30	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	機器及び配管の耐震計算における水平2方向及び鉛直方向の考慮の方法及び考え方について記載して、説明すること。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
31	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	ポリエチレン配管に取り付ける凍結防止の保温材について、凍結しない十分な厚さを具体的に示すこと。	当該設備で主に使用する100A配管についての評価の記載を例として、追加致しました。	2章2.14.2 2.14.2-5~2.14.2-6
32	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	安全機能喪失の影響評価結果として、建屋滞留水を貯留している建屋に設置することから海洋へ漏出するおそれはないとしているが、その評価の具体的根拠を示すこと。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
33	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	耐震クラス分類フローの図を最新版に修正すること。	図2.14.2.1-1 耐震クラス分類と施設・設備の特徴に応じた地震動の設定及び必要な対策を判断する流れを見直しました。	2章2.14.2 別紙-1 2.14.2.1-1
34	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	耐震評価で用いる寸法等を記載すること。	実施計画 別冊5に耐震評価に用いた諸元等を記載しておりますので、参照ください。なお、諸元についてノウハウ情報に該当するため非公開とさせて頂いております。	別冊5 142-151
35	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	2.14.2.2.1(1)耐震性の基本方針に記載の「原子力発電所耐震設計技術規程（JEAG4601）」の「JEAG」は「JEAC」が正であることから修正すること。	誤記修正致しました。	2章2.14.2 2.14.2-4

指摘事項リスト

(滞留水一時貯留設備の設置)

No	面談日時	指摘箇所	指摘事項	回答概要	反映箇所
36	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	評価方針の引用の記載について見直すこと。	適切な引用に記載を見直しました。	2章2.14.2 別紙-2 2.14.2.2-8, 2.14.2.2-9, 2.14.2.2-14, 2.14.2.2-34
37	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	固有振動数20Hz以上となるサポート構造を採用する（≠定ピッチスパン法による評価）との事で、理由を記載すること。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
38	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	組合せ引張応力について、絶対値和かS R S S法のどちらを使用したか記載すること。	絶対値和を用いる旨、記載致しました。	2章2.14.2 別紙-2 2.14.2.2-23
39	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.2	スキッドの概略構造図を参考に示すこと。	図2.14.2.2-1ハスキッド概略構造イメージを追加致しました	2章2.14.2 別紙-2 2.14.2.2-40
40	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.3	当該設備を設置する建屋は施錠管理されている旨、まとめ資料へ記載すること。	当該設備を設置する建屋は施錠管理されている旨、記載追加致しました。	2章2.14.3 別紙-1 2.14.3.1-1
41	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.3	外部人為事象に対する設計上の考慮への適合性について、電磁的障害の評価に際し、設備を制御する概要を示すとともに、ラインフィルタの構成を示すこと。	当該設備の制御システムの概要ならびに電磁的障害対策の概要を追加致しました。	2章2.14.3 別紙-1 2.14.3.1-1
42	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.4	火災に対する設計上の考慮への適合性について、想定される可燃物の内訳を示すこと。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
43	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.4	火災の検知を目的として設置する監視カメラの配置を示すとともに、カメラの視野で確認できる範囲を立体的に示すこと。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
44	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.4	監視カメラを誰が何処で確認することができる構成としているかを示すとともに、火災検知時に対応する初動対応者を示すこと。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
45	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.4	保温材は難燃性という評価をしている場合は、その根拠を示すこと。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
46	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.5	環境条件に対する設計上の考慮への適合性について、圧力に対する評価に際し従来から福島第一原子力発電所において実績のある材料を使用しているためとしているが、その実績を示すこと。	別紙-1に実績について、実施計画の配管仕様を引用する形で追加記載致しました。	2章2.14.5 別紙-1 2.14.5.1-1
47	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.5	温度に対する評価において、小名浜気象台で過去に観測された最高気温が引用されているが、観測された年月日等の引用元の情報も併せて示すこと。	別紙-1に観測年月日や引用元の記載を追加致しました。	2章2.14.5 別紙-1 2.14.5.1-1

指摘事項リスト

(滞留水一時貯留設備の設置)

No	面談日時	指摘箇所	指摘事項	回答概要	反映箇所
48	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.7	運転員操作に対する設計上の考慮への適合性について、貯留タンク満水時の警報発報時の評価（タンク液位をオーバーフローしない液位で制御することなど）についても示すこと。	液位に応じて予備系統への自動切替する旨の記載を追加致しました。	2章2.14.7 2.14.7-3
49	第1回 2023年7月13日	2章 2.14.9	点検等作業の際に作業員が設備に接近することを想定し、配管系統内等をフラッシングすることで被ばく線量低減対策を設ける場合には、その詳細を示すこと。	メンテナンス時にはフラッシング等を実施することなどの考慮について、記載追加致しました。	2章2.14.9 別紙-1
50	第1回 2023年7月13日	3章 3.1	敷地境界線量評価条件について、指摘事項No.17と同様に記載すること。	滞留水一時貯留タンク設備の敷地境界線量影響評価に関する評価条件については、2章2.11 別紙-1(2.11.1-1~2.11.1-2)参照する旨、記載を追加致しました。	3章 3.1 3.1-3
51	第1回 2023年7月13日	-	「VIII 実施計画に係る検査の受検」において、使用前検査における確認事項を記載すること。	まとめ資料に「4章 実施計画に係る検査の受検」を新規追加し、使用前検査等の確認事項について記載致しました。	4章 4.1 別紙1
52	第1回 2023年7月13日	-	ポリエチレン管について、耐放射線性や耐震性の根拠を示すこと。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
53	第1回 2023年7月13日	変更比較表 P2,3	(50)～(52)における滞留水一時貯留タンク設備を介しての処理量、(98)におけるポンプの容量が妥当であることの根拠を、汚染水発生量や処理量等から説明すること。	2章2.9 別紙-3にて合わせて処理装置の容量について整理して結果について記載を追加致しました。	2章2.9 別紙-3
54	第2回 2023年9月25日	1章 1.1	受入槽と貯留槽の間に設けるとしているストレナについて、その性能と運用方法を説明すること。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
55	第2回 2023年9月25日	1章 1.1	受入槽内にて沈降やストレナにより分離できなかったスラッジによる影響として、後段の設備への負荷について評価すること。（大雨時に沈降時間は確保できるのか、など）	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
56	第2回 2023年9月25日	1章 1.1	本設備の要求機能の1つである「水質の均平化」について、当該設備設置前後を比較し、その影響を整理して示すこと。（表1.1.2-1中に記載のある1-4号機建屋からの建屋毎の滞留水移送運用の変更について、詳細を説明すること。）	2章2.9 別紙-4に水質の均平化に関する考慮について整理して結果について記載を追加致しました。	2章2.9 別紙-4
57	第2回 2023年9月25日	1章 1.1	本設備の要求機能の1つである「線量低減」について、遮蔽を設置した場合の敷地境界線量を示すとともに、現状における敷地境界線量と比較した結果も併せて示すこと。	次回以降の面談にて整理したうえで説明致します。	
58	第2回 2023年9月25日	2章 2.9	入口ハッグスキッドをPMB2階に設置する理由を説明すること。	1章1.1 別紙-1へ理由に関する記載を追加致しました。	1章1.1 別紙-1 3.滞留水一時貯留タンク設備のPMB 4階への設置理由
59	第2回 2023年9月25日	2章 2.9	配管概略図について、地下2階の図を追加し、スラッジ及びフラッシング水をプロセス主建屋地下2階に落とす配管のルート図や下端の位置・構造を示すこと。	2章2.9 別紙-1へ地下2階の図を追加致しました。 また、フラッシング水の排出については、スラッジ排出のラインを使用致します。	2.9.1-6

指摘事項リスト (滞留水一時貯留設備の設置)

No	面談日時	指摘箇所	指摘事項	回答概要	反映箇所
60	第2回 2023年9月25日	2章 2.9	運転操作に関する考慮と関連して、インターロック等溢水防止に関する記載を追加すること。	インターロックで予備系統→PMB地下の順で滞留水の移送先を切替する設計である旨の記載を追加致しました。	2.9.3-2
61	第2回 2023年9月25日	2章 2.9	過去数年の最大降水量の際の汚染水の移送量データ等を記載した上で、設備の一時貯留容量の十分性（妥当性）を示すこと。	別紙-3へコメント内容への回答について説明を追加致しました。 (11/2技術会合の資料内容をまとめ資料に反映致しました。)	2章2.9 別紙-3
62	第2回 2023年9月25日	2章 2.12	遮へい体の構造（材料、サイズなど含む）について、説明すること。	2章2.12 図2.12.1-3に構造について追加致しました。	図2.12.1-3
63	第2回 2023年9月25日	2章 2.12	ろ過水でフラッシングを行うことについて、フラッシングの際の一連の水の流れ（どこからきてどのように流れて行ってどのように排出されるか、）を示すこと。	2章2.12 図2.12.1-4にフロー図を追加致しました。	図2.12.1-4
64	第2回 2023年9月25日	2章 2.14.5	別紙-1 材質毎（鋼管、ポリエチレン管、耐圧ホース）に最高使用圧力・温度を適用する仕様についての考慮を分けて記載すること。	別紙-1に材質毎（鋼管、ポリエチレン管、耐圧ホース）に記載を追加致しました。	2章2.14.5 別紙-1